

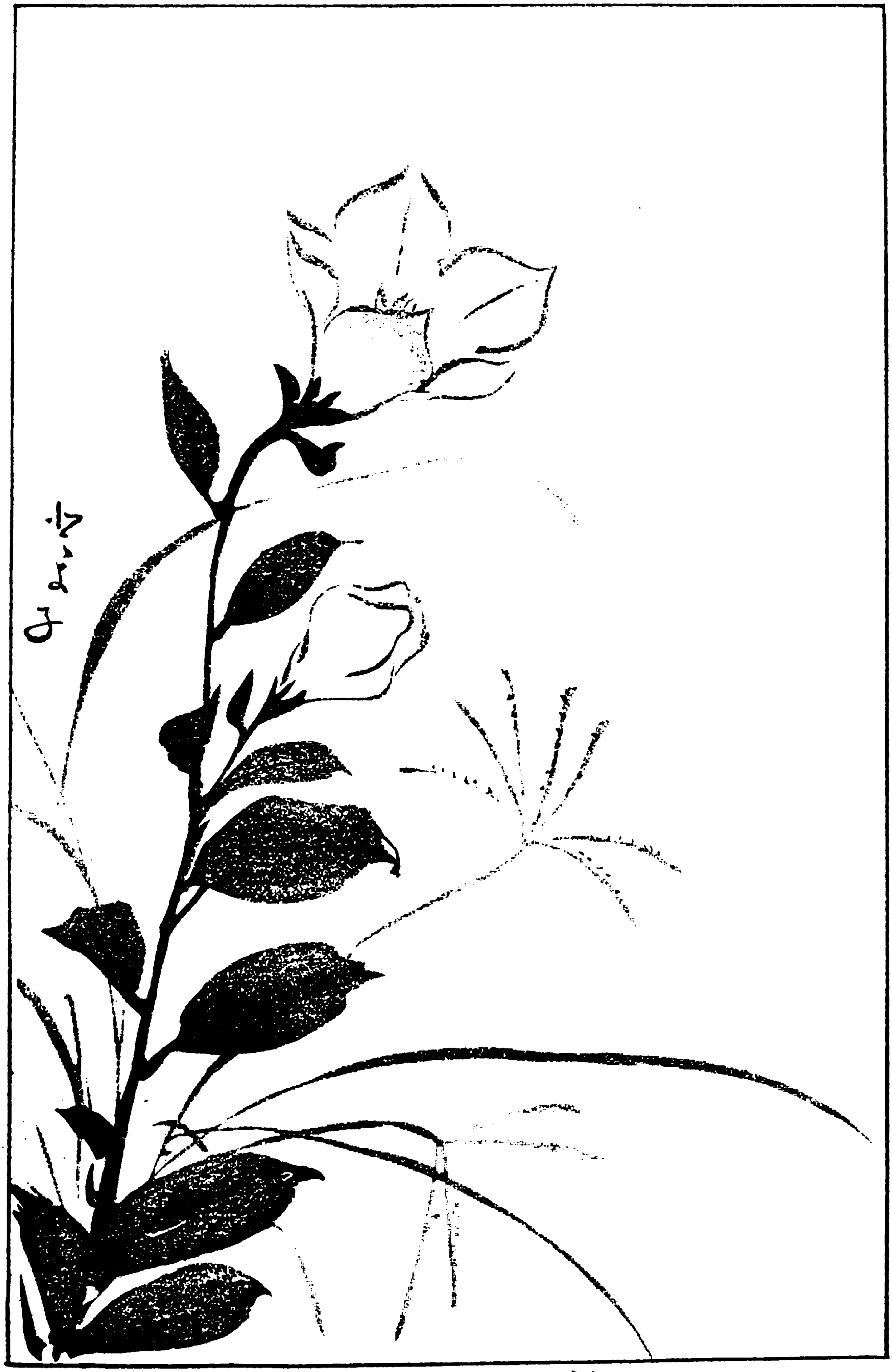
女子文壇

第二巻 第拾三號

明治卅九年十月一日發行（毎月両一日）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



桔梗



(竹内豐子女史筆)

十月一日より

一第十二回新柄陳列會

一、懸賞裾模様陳列

一、時代風俗人形及意匠參考品展覽

一寄せ切れ見切り反物大賣出し

右何れも弊店内に於て格別盛大に相催し候間皆々様御誘ひ合はされ不相變賑々敷御來觀被成下候様奉希上候　追て今回新たに

一洋服部（三越呉服店向側南寄り）

を開設仕り候上地質、柄合、裁縫共歐米の最新流行を其まゝ廉價に調進可仕候間續々御用命の程偏に奉願上候也

東京日本橋區駿河町

三越呉服店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

六合館○文魁堂　郵便振替貯金口座番號第一二三七一番

小野鵞堂先生書

朗詠帖

奉書刷美本全四冊

定價各一冊金卅五錢○郵稅各一冊金貳錢

消息からす丸帖

和裝美本全三冊

定價各壹冊金拾八錢○郵稅各一冊金貳錢

新古今和歌集序

和裝美本全一冊

定價金拾八錢○郵稅金貳錢

小野鵞堂先生書

三體千字文

唐裝美本全一冊　定價金六拾錢　郵稅金六錢

眞書千字文

唐裝美本全一冊　定價金卅五錢　郵稅金四錢

行書千字文

唐裝美本全一冊　定價金卅五錢　郵稅金四錢

草書千字文

唐裝美本全一冊　定價金卅五錢　郵稅金四錢

發兌元　東京市日本橋區數寄屋町九番地　六合館 文魁堂　林平次郎

（甲の二）

少年之友

少年少女の作文雑誌できれいでおもしろくッて安い皆様が日本一の大すきなのは是れです。

第壹號は賣弘めの爲め特に再版を印刷致しましたから又賣切れにならぬ中に持たぬ方は早くお買求を願ひます。

第貳號 十月一日發行目次

◎秋のおしへ(記者)◎雀の踊ちん◎新浦島(蝶二)◎新唱歌◎浮世百種◎わたしの日記◎十月の樂しみ◎斥候兵(鹿呰)◎風の神の滿韓落ち

懸賞少年文壇 ▲作文▲和歌▲俳句▲新考物▲お笑草▲百事問答▲友達會其他滿載

正價一冊がたッた五錢 六冊郵税共金廿七錢 十二冊五十四錢

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目二十三番地 文光堂 振替口座一九五五五

市内特約賣捌 神田區表神保町東京堂 裏神保町上田屋◎京橋區尾張町東海堂 其他北隆館 良明堂外

少年之友

三宅克己先生書 (第一輯第二輯發賣)

美景水彩 繪ハガキ

上等舶來紙八色密刷新式砂目模樣

無比廉價 壹輯三枚(一組)金拾二錢 送料九組まで二錢

此の繪端書は毎號秀才文壇に附録として非常の高評を博せる者を更に用紙を精選し上等アイボレー紙を以て特別美麗に印刷せる物にして御需用の上は必ず『是れは成程上等だ』と言はるゝは請合なり。乞ふ同好諸君御試用あつて喝采を賜はらんことを。

東宮侍講 本居豊穎先生閲
大町文學士 中内文學士序
國學院學士小森松風君編纂

(全一冊中判美本 正價金三十五錢 郵税四錢)

古今名家 短文軌範

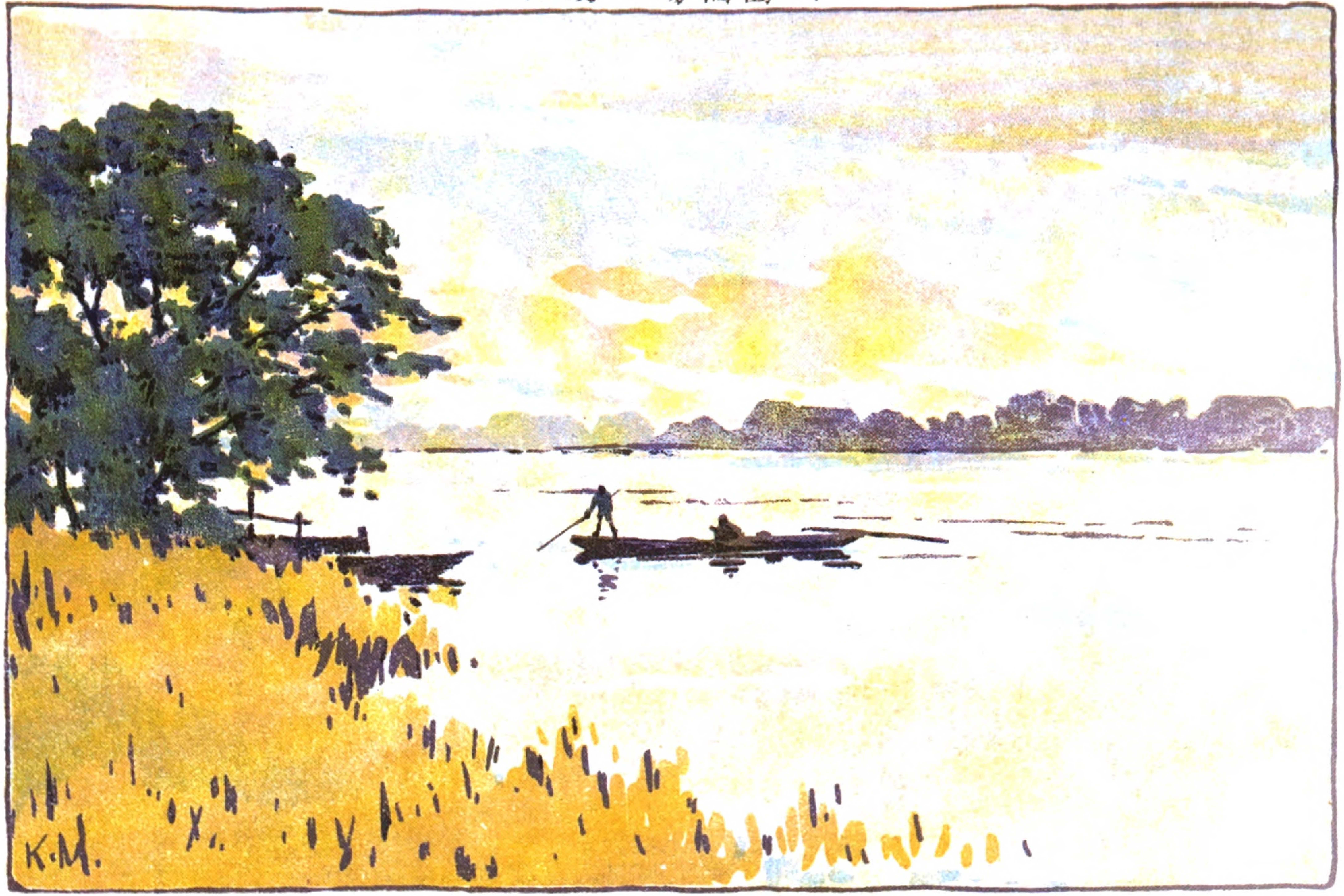
製本發賣

本書は○師範學校○中學校○高等女學校其他同程度の男女學生諸君の爲めに作文上最も先にすべき短文の指南として極めて懇切に古今名家の傑作を編纂せられたる者なれば學生以外何人に取りても益する所大なるべし

發兌元 東京市神田區旅籠町一丁目 文光堂

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

向島橋場の渡船



三宅克己先生畫

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



各女學校御用

附屬品並に造花機械類一式

東京市日本橋區横山町二丁目十六番地

天野卯兵衛

電話(長)浪花一六四三番

(切取線)

營業目錄御入用ナレバ此切取ヲ添ヘ御申越被下度候

縣　郡　町村

女子文壇

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑）の如き一時おさゑムテスカシ的舊式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進步せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病強健の大幸を得られよ 輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ可し奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢　特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず經ら**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月閉止りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る**悪血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證新發見藥

醫博實驗百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき希世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

見よ！明治風俗史の好材料！！

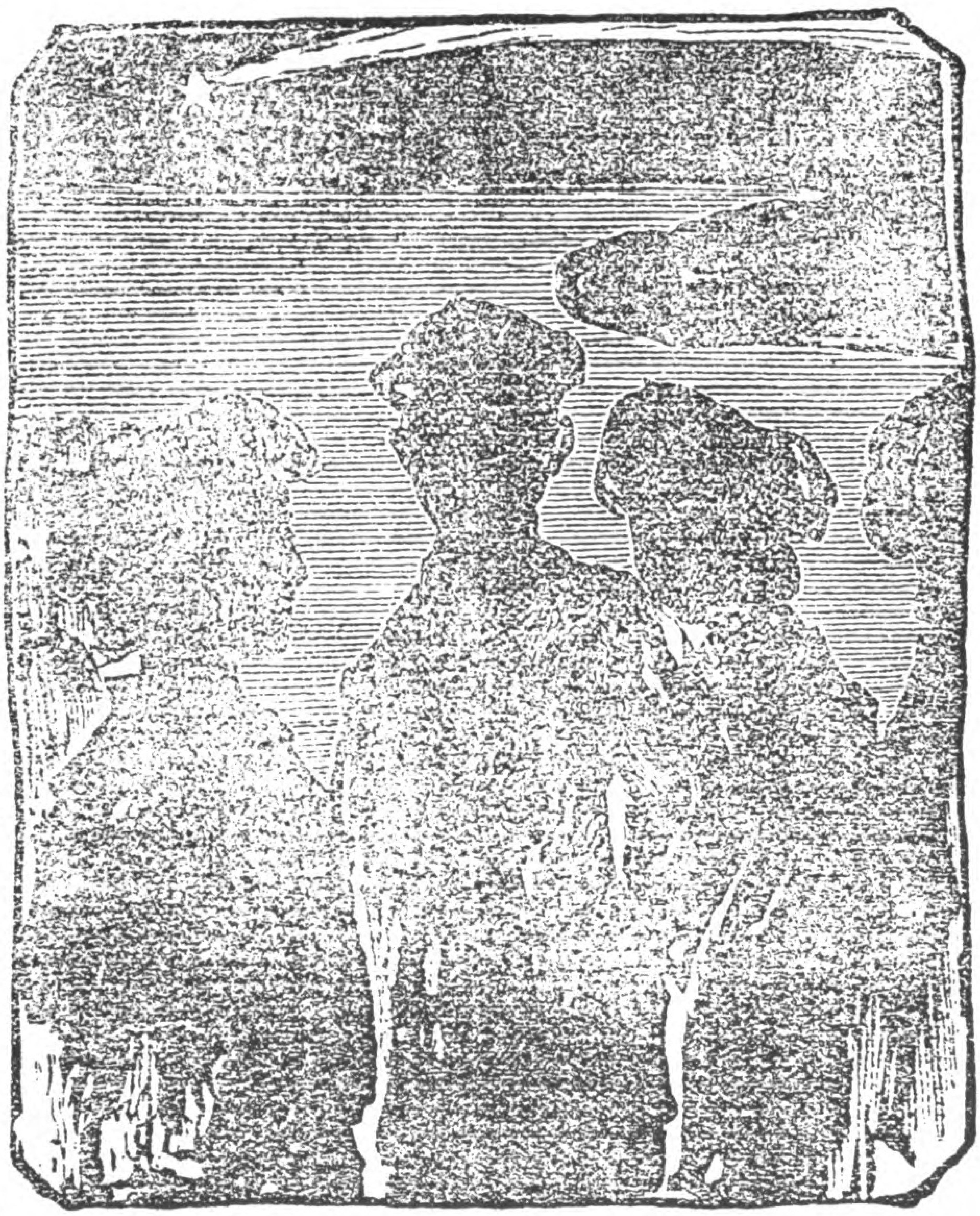
小栗風葉氏

新作 女學生

(口繪活人畫)

新案カシミヤ表紙

(本文色刷)



實價金七拾五錢　郵税六錢

當世女學生の生活狀態は、茲に風葉氏特得の辣手に依つて直寫せらる。精細透徹微を穿つて其寸毫をだに剩さゞる著者が着筆は、敢て俗世間に迎合せんとにはあらず。一面に於ては明治風俗史の材料として。一面に於ては世の父兄が參考の資たらしめむが爲のみ。

發兌元　東京日本橋通四丁目 (振替口座壹六壹七)　春陽堂

(乙の四)



金魚 （英國ハル氏筆）

米國各女子大學校長



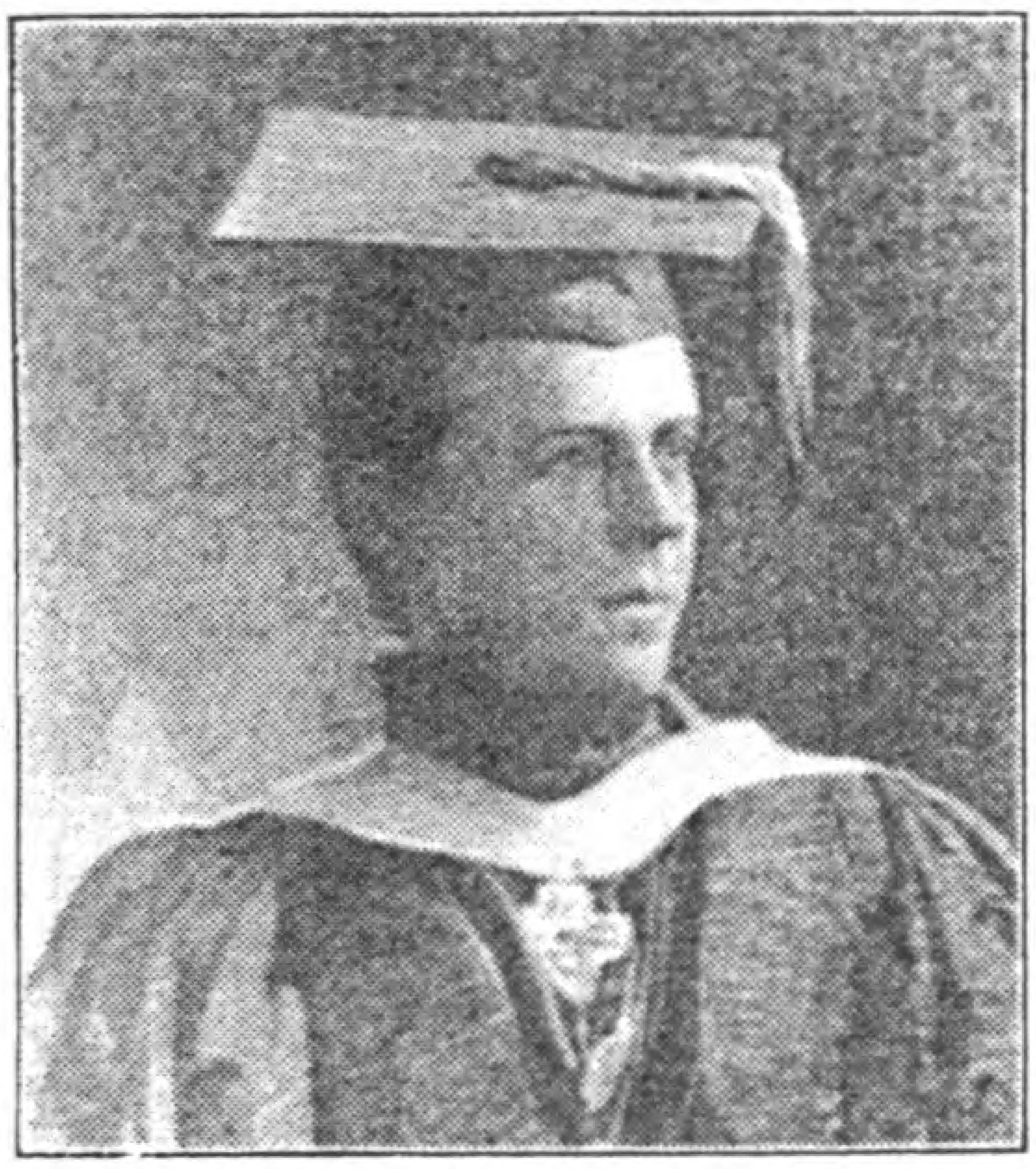
ウエルスレー大學

キヤロライン、ハザルト



プリンマー大學

エム、ケーレー、タマス



シカゴ大學

マリヤン、ターポツト



チバリン大學

アリスハンザム、ルース



ウエルス大學

ヘレン、フエルチヤイルド、スミス

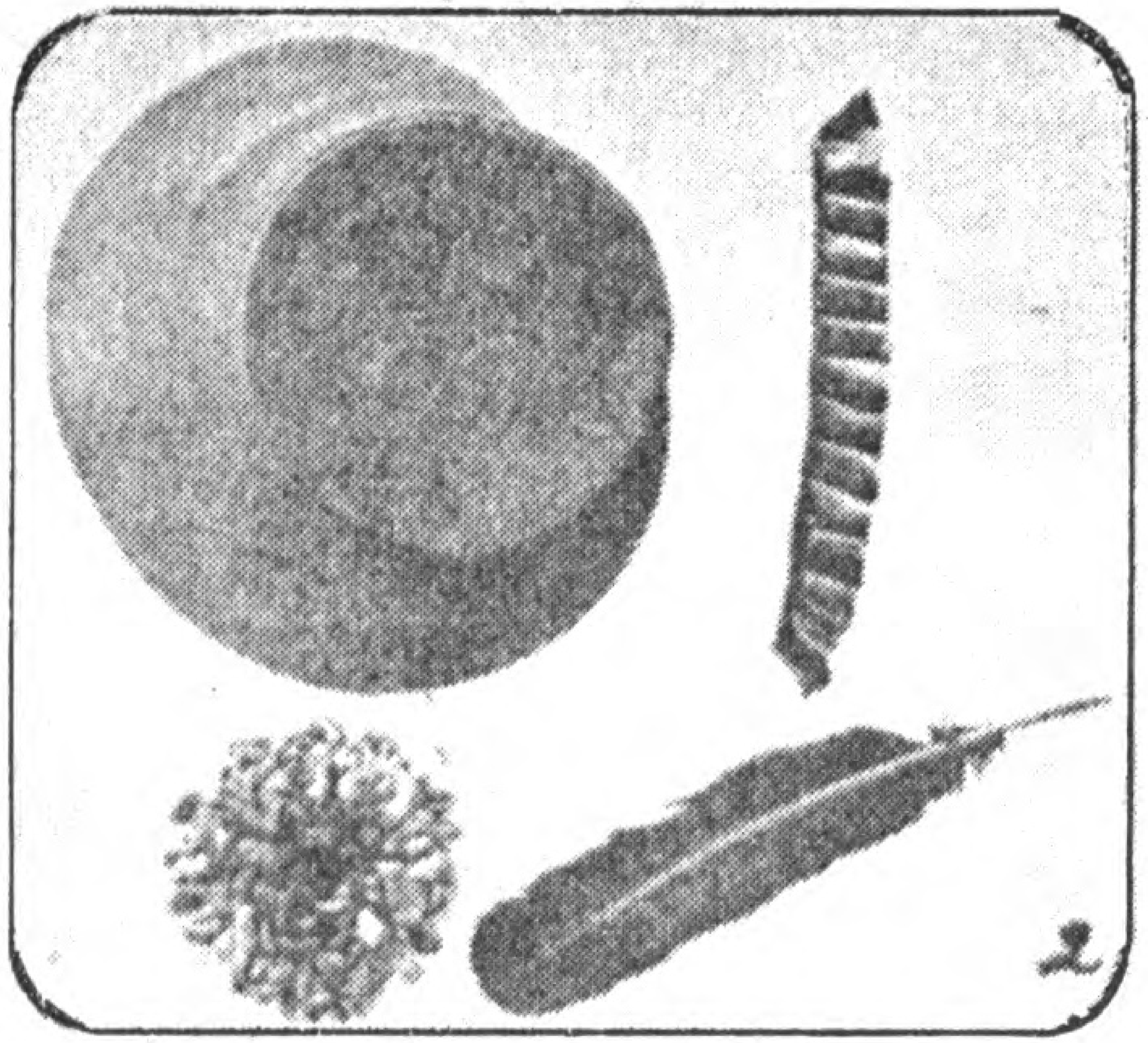


マント、ホリヨク大學

メリー、ウーレー

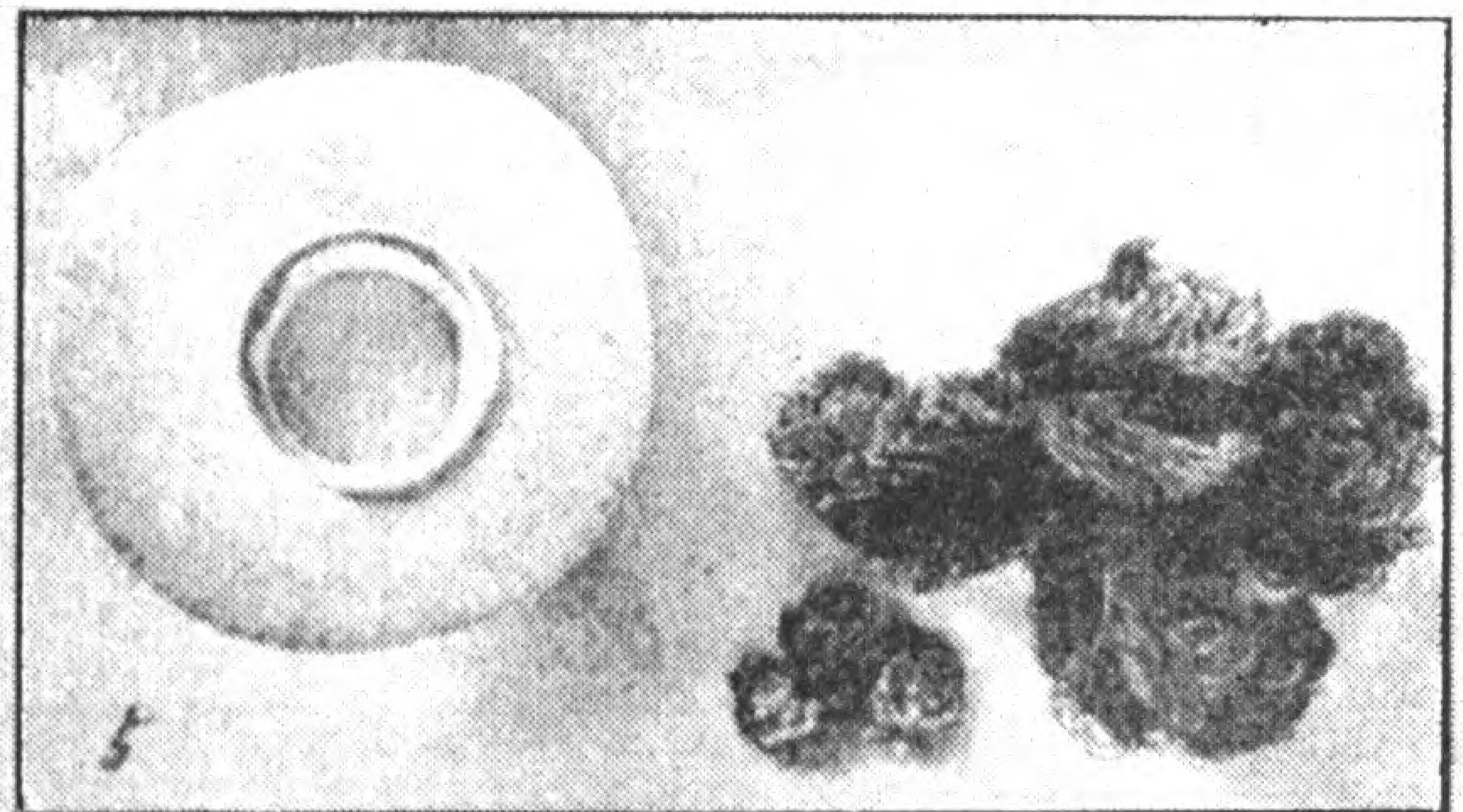
米國流行の自製粧飾帽











何れも新秋の只今米國費府を中心として附近に流行する婦人帽子、帽の粧飾は皆手製でやるのです(1)は尤も少女向きのもの(2)は(1)のを分解した圖、帽子の帶を始め飾りはフラシテンの様のもの(3)(4)は正面及側面の狀で粧飾は鷲鳥類の毛(5)は仝上の分解圖で些少の細い針線があれば粧飾は自在に出來ます、流行色は緑、草、鳶色等ですが黑が高尚で實用的でせう

誌友おもかげ





(麹町) 馬目さわ子

(羽前) 小林みわ子



(北海道) 松井長子





(上野) 金子尚子

(本郷) 土岡ちゑ子、仝もと子



(高知) 秋川登美子





(出雲) 買豆記道子

(福井) 淺見すゑ子



(美濃) 山内きん子

誌友諸嬢の肖像を始め風勝の優秀なるもの
は歡迎しますから其寫眞を澤山御寄贈下さい
(寫眞は御希望により御返しいたします)

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

第三回新學期開始

●會員大募集十月十五日迄の申込に限り入會金半減す、目下入會の好機

▲事情があつて高等女學校に入る事が出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いやうにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を每號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみてす、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事てす

▲本會講義錄は右に述べし通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都會一ヶ月の遊學費て優に全期を終る事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講[illegible]拔も可也

▲每日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全科程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義は總べて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併て有する事斯くの如きは稀也

上揭の批評を御覧にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲規則書▼

端書にて申込あれば直に郵送す可し

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

二卷拾二號目次

毎號　皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第二巻　第拾三號目次



第二巻第拾三號

十月一日發行
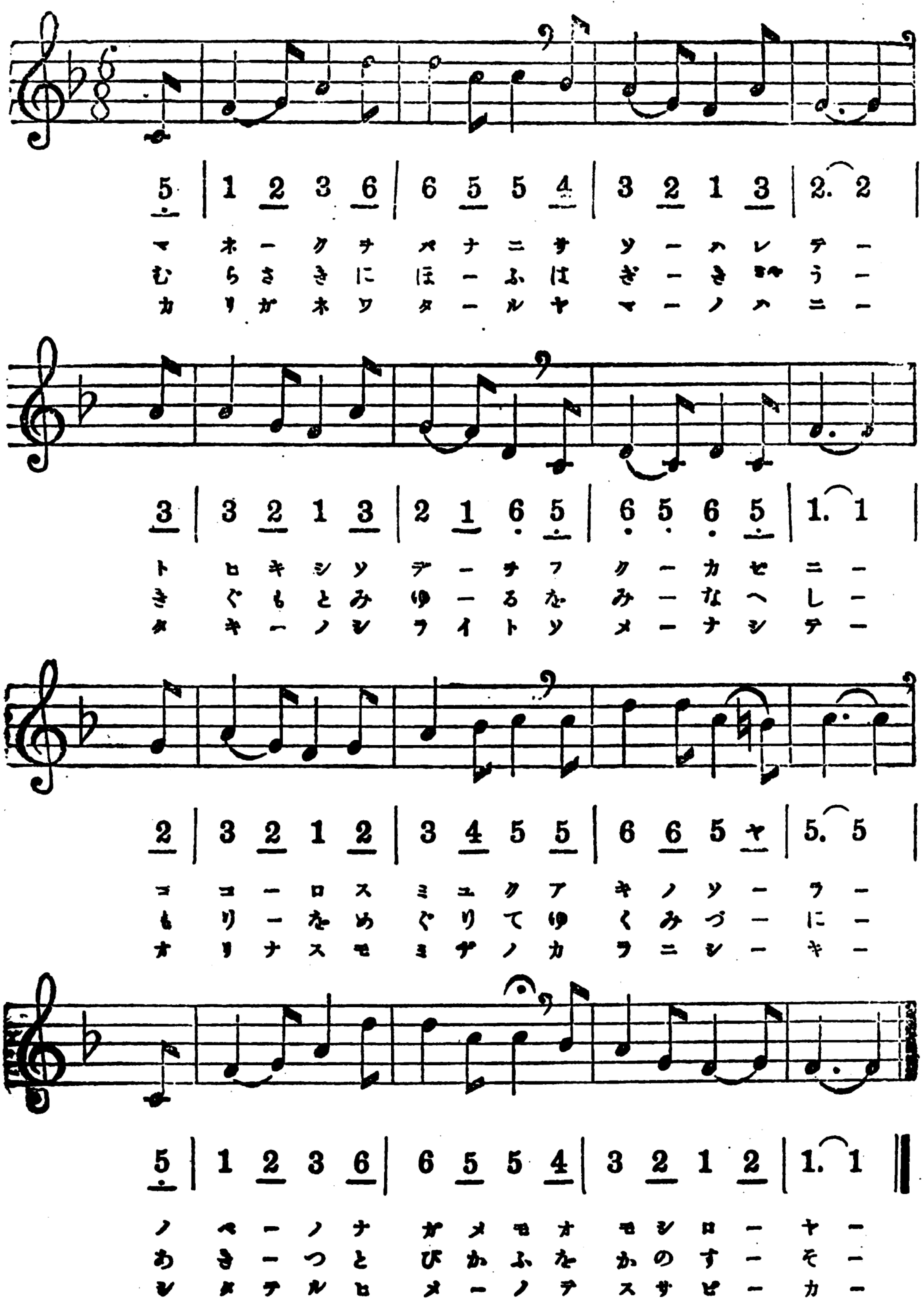


豐年

今年の米作豫想高は五千三十九萬石て、是を昨年に比べると三割二分弱の豐作て、一石十五圓としても實に一億八千三百萬圓の増收てあろさうてす、何と目出度い事てはありませんか。吾人のやうに都會に生活て居るものでも、偶に田圃へ出て、穰々たる秋の實の豐なるのを見ますと、何となく欣ばしい、況して早苗の頃から、風をいたみ、雨を氣遣ひ、伸よ實れと培ひ養うた農夫の欣びと滿足は何れ程てせう最も米が出來やうが出來まいが、收獲が多からうが少からうが、諸孃には直接何の關係もないやうてすが、實は大いにあるのです。諸孃が思ふやうに學問も出來、思ふやうな書籍も求められ、美しく粧ひ、花やかに飾る事の出來るのは、一家に餘裕があるからです、家に餘裕がなければ勢ひ諸孃も不自由を忍ばなければなりません。歳豐にして國も家も餘裕が出來る、是を思ふと諸孃は手、自ら耕耘らず、灌漑ずと言ても、深く農夫の勞働を感謝し、高く天然の惠みを仰がねばなりません。兎角深窓に育ったものは勞働の神聖を忘れ、歳の豐凶などは意に留めないやうですけれど、豐年には豐年のやうに、一層嬉しき心持を以て、御自分の修養に努められたいと思ひます。

秋野

ヘ調　八分ノ六拍子



マ オ ー ク サ バ ナ ニ サ ソ ー ハ レ テ ー
む ら さ き に ほ ー ふ は ぎ ー き や う ー
カ リ ガ ネ ワ タ ー ル ヤ マ ー ノ ハ ニ ー
ト ヒ キ シ ソ デ ー チ フ ク ー カ ゼ ニ ー
き ぐ も と み ゆ ー る た み ー な へ し ー
タ キ ー ノ シ ラ イ ト ツ メ ー ナ シ テ ー
コ コ ー ロ ス ミ ユ ク ア キ ノ ソ ー ラ ー
も り ー を め ぐ り て ゆ く み づ ー に ー
オ リ ナ ス モ ミ ヂ ノ カ ラ ニ シ ー キ ー
ノ ベ ー ノ ナ ガ メ モ オ モ シ ロ ー ヤ ー
あ き ー つ と び か ふ た か の す ー そ ー
シ メ テ ル ヒ メ ー ノ テ ス サ ビ ー カ ー

秋野

小森松風作歌
高井鳳南作曲

第一章

あまねく尾花に、誘はれて、訪ひ來し袖を、吹く風に、
こころ澄みゆく、秋のそら、野邊の眺望も、おもしろや。

第二章

むらさき匂ふ、萩、桔梗、黄雲と見ゆる、女郎花、
森をめぐりて、行く水に、蜻蛉飛び交ふ、岡の裾。

第三章

かりがね渡る、山の端に、瀧のしらいと、染めなして、
織りなす紅葉の、唐にしき、下照姫の、手すさびか。

遊戲と文學

文學士　佐々醒雪

和歌や俳句は、元來、作者の娛樂として發達して來たもので、同じ詩といつても、西洋の所謂詩とは大に趣がちがふ。だから、歌人や俳人と稱する人も、西洋の所謂詩人或は文學者とは、尠くとも、その著作の動機が大に異つてゐる。西洋の詩人といへば、かのホーマーの昔から、民衆を讀者とすることを豫想したもので、その作詩は、單に、詩人の娛樂ではない、それが職業である。畫工の畫に於る、役者の芝居に於ける乃至は狂言作者や今の小說家の小說に於る如く、その職業に對する熱心とか嗜好とかの爲に、自ら興味を感ずることはあらうが、しかし自己の興味のみが目的ではないのである。然るに、歌人俳人は、固より同好者の褒貶に苦心し、後代の是非を顧慮しないではないが、眞の目的は自己の所感を抒べて自ら樂み自ら慰めるのにあるので、社會の民衆をすべて讀者としようとは豫想しないのである。

從つて、又、社會の和歌や俳句を見るにも、小說や芝居とは同一視しない。常にこれを以つて、或る少數の社會の娛樂として、門外漢の窺知すべからざるものとしてゐる。譬へて見れば、和歌や俳句の集は、碁經のやうな、習字のお手本のやうな、生花や點茶の書物のやうなもので、其の道の人ばかりが有難がつてゐて、民衆には殆んど交渉がない。唯和歌や俳句は、比較的嗜好者の範圍が廣い爲に、時とすると、ある機會の爲に、例へば、古池の句や、百人一首のやうに、國民的となることがあるが、それは、殆んど偶然の事象である。且つ、歌人社會俳人社會に於いても、古の集などに對する考が、常人の小說や芝居に對する時とはやゝ異つてゐて、唯その詩趣を味ふといふのではなくて、

例の碁客や書家が碁經やお手本に對すると同じやうに摸範としようといふ考が常に先立つように見える。だから、又、歌の先生や俳句の宗匠連は、このお手本を如何に眞似るべきかを敎ふる人で、自ら民衆を相手にして文藝の創作を示す人ではない。いはゞ碁や習字のお師匠樣と同列にあるもので、かの二條家冷泉家が師範家と呼れたのは、至極適當な名稱といはねばならぬ。所謂る新躰詩といふものも、今日のところでは、これ等と同一の徑路をとるべき傾向をもつてゐる。一つも新躰詩を作つたことのない人で、新躰詩集を廣く讀んでゐる人は、殆んど見たことがない。

そこで僕が一つ諸孃に警告することがある。諸孃が、歌や句を作るに當つて、慰にするつもりであるか、或は宗匠になるつもりであるかを、明に意識しておかねばならぬことである。今日の文學社會は動もすると、生呑な詩學などをふりまはして、作詩といふことを如何にも、高尙な絶大な事業のやうに吹聽する、單に娛樂であるべき作歌作句さへも、人間の無上の光榮を發揮することのやうに騷ぎ立てる。そも〳〵人間には、種々の異才がある、歌の上手、句の上手、碁の上手、將棊の上手、花合の上手、或は糠糝の上手も、飯焚きの上手もある、皆天才といへば天才であるが、紫式部や淸少納言の天才とは頗る趣が異ふことを忘れてはならぬ。歌俳は必竟遊戯に外ならぬのである。

淸淨な遊藝、娛樂といふことは、實に人間の高尙な嗜好である、我等はかゝる意味で歌俳を皷吹しようと思ふ、ことに實務的に從つて無味乾燥に流れ易い日本の家庭に在つては、女性たるものが、淸淨な遊藝に通じ娛樂に興ずるは極めて結構なことで、月の夜の端居にも古歌の趣を思ひよせ、人力の音を待ち更してはをかしき句を示すことが出來れば、よしかたなりであらうとも、限なき興趣もあらう。中古の物語のことに優婉なのは、主としてその和歌の爲であることは、爭はれぬことで、ゐつき難い人心も自ら治る、と紫式部が云つたのも、かういふ用意であらう。だが、二百三高地半は破壞して、うす汚れた着物が意氣地なくだれ下つて

ゐては、「長閑けしな」でもなからう、懸賞俳句の勇者が、いつも試驗にびく／＼してゐるなどは、あまり有り難くない。

若し文藝を天職なりと信じて、一切を抛擲する勇氣があるならば、歌や句に拘々たることを廢めて、直に文學らしい文學に向ふがよい。さもなくて、小さな歌や句が面白いといふ丈ならば、自分の本務を盡した餘力を以つて、明に娯樂として遊戲として、樂しんで淫せずといふ工夫を忘れないがよからう。

僕の知人に歌氣違のお娘樣がある、俳句の爲に幾度か落第した生徒の實例は、僕の知つてゐるのばかりも、八九人ある。本誌の讀者の中にも、或は文學と遊戲とを混同してゐる人があるではなからうか、といふ老婆心から、一言を述べた次第である。

紛想録

文學士　沼波瓊音

病を得て寐付いてから、もう一月餘りになる。峠は確に越した積りだが、今日も醫者に聞けば、まだ／＼、油斷してはならぬ、身軀を安靜にして居なければならぬとのよ、厭になつてしまふ、もうこの頃では、早く癒りたいとか、何時癒るだらうとかいふとも考へなくなつて、たゞ一生斯う横になつた儘で生活する身のやうに思へる。情無いではないか、癒るといふ事の想像し難くなつたのである。

首だけ右の方へ向ける。椽側の傍の盆栽が目に着く大鉢の天竺葵、金泥と硃を煉合せた色の花が、眩ゆい艶を持つて咲誇つて居る。小さくはあるが威勢の宜い積極的な花だ。牡丹を閻王が吐くなら、天竺葵は鬼女ぐらゐが吐くであらう。それに隣つて、澤桔梗、枝も細く葉も細かく、綠色の烟が空に溶けなむとしてゐるやう優しく茂つた間に、淡紫の花が嫋々として咲いて居る。弱々しく媚を含んでる中に、どこか高潔な所がある。妓にして和歌の嗜がある女と譬へたい。凌霄蓮凌霄花に似て、葉のみが蓮のやう、尖つて尻尾の生へ

た妖怪めいた花で、辛つと更紗風呂敷の摸様ぐらゐになる形だ。但し蕾が瘦せた金絲雀の子のやうに見えるのは一寸面白い。孔雀草、分析的に見ると孔雀に似てる所は無いが、打眺めたところ成程孔雀の尾の趣がある。旨く附けたものである。草花の名には附け方の巧なのに或は奇拔なのに感服するのがなか〳〵ある。孔雀草や、螢草や、舞鶴草などは、巧な方で、二人靜、雀の豌豆、狐の牡丹などは奇拔な方だ。葉ばかりになつた匂菫、四季咲きの床夏、女中菊、松葉菊等、健康な時には出來ない程一つ〳〵叮嚀に視回した。

　雨がしよぼ〳〵と降て來て、厭な冷氣を感ずるので婢を呼んで障子を閉めさせる。頸も痛くなつて來たから、もとの仰向になる。上には何も見るものが無い。子規の日記に、龜井戸土産や、何か種々な玩具が、天井から下げてある事が書いてあつたが、成程左うしたら動けぬ病人は大いに慰められるとてあらうが、こゝには何も無い。見えるものは天井ばかり、淡黑い天井ばかりてある。

仕樣が無いからこれを見て居るうち、木理といふものはなか〳〵味のあるものだといふ事を覺えた。脂のやうに穩な川を船が徐に通る時におこる波文に似た所もある。風の無い春の曉、彼處から日が出るだらうと思ひ遣る山の、上邊に棚引いて居る横雲に似た所もある。理の流れが幾箇も狹く壓し附けられたのが、忽ち幅廣く迸つて、不動明王の火焔のやうな勢をなしてる所もある。光ある理の帶が快く伸びて、華嚴の瀧のもつと長くなつたやうな、寫眞で見た布哇のアカカの瀧に似た所もある、などゝ強ひて色々と象つて見る。併し、こんな風に見るのは強ひるのだ、他の物に似てるといふとが面白いのでは決して無い、實に何とも名狀すべからざる無茶苦茶な模樣になつてるのが面白いのてある。

　博物館に大理石の種々紋の違つてるのを集めて額に仕立てたのがあるが、僕はいつも其前に佇んで多大の興味を以て諦視するのである。大理石の紋などを見ると、人間の意匠の狹苦しいとをつく〳〵感ずる。

陸奥の信夫郡に自然に一種の紋のある石があつて、昔それで衣を摺つたと云ふ。「しのぶもぢずり」といふのは即ちこれである。この石が久しく地に埋れて居たのを、明治十八年に時の郡長が掘出してから、鮮明なる「もぢずり」が出來るやうになつて、今は帛紗手巾襟地などに用ひられて居る。この「もぢずり」といふ語はモヂャ〳〵摺といふ意であるといふことだが、實に其名の如く、獅子が文珠菩薩に踏潰された姿といはうか、朧月の夜半小さな魔物が一塊になつて飛んで行く影といはうか、何とも彼とも形容の出來ぬ紋をなして居る。そして其處に云ふべからざる風致がある。どうも斯ういふ。理窟の無い自然の模樣は、面白くて堪らぬ。

忽ち椽側でドタンバタンと足踏して、「チョーチョ、メー、チョーチョメー」、と子供が喚く。何かと思へば蝶が花を訪れたのを叱つて追ひ散らすのである。「靜になさい」と制したれば、止めた。

後で考へると、花には決して觸れるてないと常々子供を戒めてあるので、今蝶の花に觸れたのを見て、父樣の掟を犯すものと感じて叱咤したのらしい。さう思ふと其の子供心が詩的に思はれる。又蝶を追うたのを却て叱られて其の不公平を憤慨したらうと思つたが、併しそれは大人の忖度で、あんな子供自身には、叱られた事その事を不快に感じただけで、別にそんなコセコセした事で憤慨はしないであらう。

ニコライの鐘がいつになく近く聞える。圓遊があの音を何とか旨く眞似た。「ワーン、ワーン」か、左うぢや無い。「ワーン、チキチンチン、ワーン、チキチンチン」か、左うでも無いやうだ。旨いと思つたが、何と眞似たかどうも思ひ出せぬ。兎に角遠いから「チキチンチン」までは聞えぬ。「ワーン、ワーン」、厭な音た、近松の「鬼もわん〳〵鳴くばかり」を思ひ出して、あの響は鬼の鳴聲だと思ふ。

そのうちに、上野の鐘も響いて來た。「ボーーン」、善い音だ、實に善い音だ。顏で比へると、「ワーン」は横平つたい面で、「ボーーン」は面長な上品な顏である。上野に始めて鐘の出來たのは寛文九年で、天明七年に

損じて音が惡くなつたから更に改鑄したのが今の鐘ださうな。下に不忍池といふものがある所爲か、實に快く響く鐘だ。或男が妻を先立たせて悲みに堪へず、其冥福を祈る爲に、無給であの鐘を撞いて一生を終つたといふ話を綠雨子が傳へて居られる。鐘撞になつて亡妻の冥福を祈る、小說ならば平凡な趣向であるが、これが事實であつたのだ。其男の心根を思ふと身に寒さを覺える。慾ばかり深くなつて愛情は一時的のものになり、學問といふ道樂の爲に信仰といふことを爲得なくなつた人間には、斯ういふ美しい行はとても出來ない。

（未完）

短歌評釋（二）

窪田うつぼ

▲今號には此頃「明暗」といふ短歌集を公けにした水野葉舟の作を少しばかり紹介しませう。

▲葉舟の集を見て第一に氣の附くのは、此人の作風の他の多くの作者と異つてゐる所です、其れは此人の作には、態とらしく美しい境を描いたもの、優しい情を歌つたものは殆んどなく、全く自分の感じたまゝを率直に歌つてある事です。此人から見ると、歌といふものは、一に自分の感情の經驗した事を歌つたもので、歌はやがて我が感情の歷史だといふ趣があります。

▲今一つ葉舟の作の特色は宗敎的の色彩に富んでゐる事です。此れは新躰詩には往々ありますが、短歌の方では極めて珍らしい事です。此人が作歌について前に言つた樣な態度を執つてゐるのも、或は此宗敎の感化ではないかと思はれます。

○

君が彼の日わらべに似たる幼さを思ひ出でけり梅のかをりに

▲此歌の第一に面白いのは、梅の花の香を嗅ぎて昔を思ひ出したといふ所にあります。一躰物の香は思ひ出を誘ふもので、古い歌にも、橘の香に昔を思ふといふ樣なのは幾らもあります、此歌も同じ例ですが、何所

となく新しい所があります。斯うした感情は、何時まで立つても新しいでせう。

▲戀の歌ほど切實に歌へるものはないが、又此れほど厭味に陷りやすいものはありません。昔の作者の戀の歌といへば、必ず物に寄せて仄かに歌つたのも、大方此厭味に陷るまいとした所がありませう。此歌も戀の歌ですが、梅の花の淸らかに仄かな香を嗅ぎつゝ、そぞろに昔を思ひ出したと言ふので、少しも厭味に感じられず、そして眞實な所もあります。

▲「童に似たる幼さ」といふのは、言葉少なく聯想の多い言ひ方です。今は大人びて、物の表裏も見える人も其當時は覺めながら夢を見てゐる樣な心持であつたといふ事も判り、そゞろに微笑ませます。

○

木枯や若芽は皮につゝまれて呼息ひそむれど春の氣のする

▲意味は、木枯の寒い日、冬木を見ると、早くも小さな若芽が出來てゐ、仄かに春の氣を吐いてゐたと言ふのです。

▲此作の面白いのは、仄かに作者の主觀の表れてゐる所です。木枯は我世、若芽は自身で世の中の苦み悲みは絕えずも襲つて來るものゝ、自分は必ず春の來るべき事を信じ、心長閑に持つてゐると言ふのでせう。

▲「呼息ひそむれど」と若芽を擬人してゐるのも中々面白く、「春の氣のする」と言ふのは一層面白く思はせます。此頃の歌には頻りに擬人が流行るやうですが、自然に用ひてあると思はれるのは稀れです。此れなぞは巧みな方でせう。

○

今初めて心をさゝげて君戀ふと古き思ひも無みし言ひ得る

▲極めて單純に歌つてあるが、其中に多くの思ひが籠つてゐます。

▲今作者の心をとめて見ると、自分は永い間戀してゐた、そして眞の戀をしてゐると思つてゐた。然るに今に成つて顧みると。自分の戀と思つてゐたのは、誠に

卑しいもので、唯自分を樂しましめようとするに過ぎなかつた、それ程ならずとも、戀人よりも自分の方をば多く思つてゐたのだ。自分は今始めて眞の戀に觸れた我身も我心も、喜んで戀人の前に犧牲にする事が出來る樣になつたと言ふのでせう。

○

嚴かしき宮の中にも入るごときこの靜けさを我は歩むか

▲我々は見慣れると見慣れるほど、其物の本當の姿を知る事が出來なくなる、此不思議な世界の中に住んでゐながら、其不思議に驚かず、人といふ不思議な者を相手にしながら、其不思議にも驚かなくなります。そして偶々其不思議に觸れる事が出來ると、今更の樣にも怪むといふのが普通です。

▲平常は此世界を我々の家の樣に思ひ、我々の勝手に出來るもの丶樣に思つてゐたが、今見れば世界は其樣な所ではなく、誠に神の大御心を籠めて造られたるもの、神の住ませ給ふ宮殿である。斯く思ひつ丶自分は、仰いで其莊嚴なるに怖れ、靜肅なるに怖れつ丶も此中を逍遙つてゐると言ふのでせう。

○

こ丶にもまた戰ありき我が魂を暗き國より呼ぶ聲のする

▲神は明るきに居よと命じ給ふけれども、我々は其御言葉に背き、竊に暗きかたに行き、其所にある歡樂を恣にしようとする。彼方を見れば懷かしく、此方を見れば慕はしい。そして我々は此二つの間に立つて、迷ひ惑つてゐる。我は唯に劍を執つて戰ふばかりではない、彼の暗き國より卒然と襲ひ來る敵に對し、敗れじ負けじとすれば、我々は劍を執るにも優る勇氣を持つて戰はなければならない。

▲此誰しも持つてゐる弱點を、率直に理窟めかしくなく歌つた所に此歌の趣があります。

○

長しへにかくは咲きぬる花を見よ美はしき瞳の喜びを見よ

▲花は散れども復も咲く、見よ我世界は花である。我が君を見よ、其美はしき瞳は喜びに耀いてゐる。此美しき世に、喜び満ちたる人と共に生きてゐると思へば我生は感謝すべきもの、咀ふべきではない。

▲我々は悲みには感じやすいが、喜びを感じる力は鈍い、此歌の面白みは、喜びを感ずるに敏い所にあります。

趣味ある生活（上）

巴里　彩徒

▲幸福の生涯は如何

美を求めむとすれば宜しく笑ふべし、喜悦の聲は汝の前に光明と佳麗とを現はし汝をして美しき薔薇花の咲き亂るゝ庭園を逍遥せしむるの感を催さしむべし。との意味が泰西の書に見えましたが、まことや憂き世といふ此の世の中に毎日笑うてをることか出來たなら何様に美的幸福の生活でせう、笑は心の貧しきものを救ふ塗師である、笑は人の生命をして光輝あらしめ、人の聲調をして音樂の如くならしめ、人の精神を感應せしむる抔とも云ふてをります。

私は殊に女性の生理的情態より推しても、兎角沈鬱憂愁におちいり易い其不幸の福音として、常に衷心笑を催すことの工夫が必要であらうとおもひます。たとひ可憐なる女性は不幸の運命に遇ひましても、一度自分の趣味を有する或事物の興絃に觸るゝ時は、寧ろ反映の對照は玆に限りなき奮亢の精神を喚び起して、何となく歡喜希望の笑を洩すものであります、併し何物かにつき趣味を有せさる女性は、慰藉するものがありませんから不幸なる運命の爲め沈鬱なる顔色は永久に拂拭し去ることが出來ないで、家庭は常に暗夜の如く、引いて他人の快樂をも掠奪いたしますから、是より種種の不幸災難が段々重なつてまゐるのです、されば女性は如何にして常に愉快の精神を持し、品藻ある幸福の生涯を送ることが出來ませうか。

▲趣味の妙境は如何

人間は氣の持ちやう抔と俗にも言ひますが、是は一面人の精神修養の意を蔑むでをります。三十前後の細君の會話には「何ぼ金銀財寶があつたとて妾達の自由になるんぢやなし、それより氣樂にして生活すのが一番です」是も一面人は精神さえ愉快にしてをるとが出來れは幸福であるといふ眞理を言ひ顯はしてをりませう。私が今幸福なる生涯を送るの手段として陳べやうとする修養といふ意味は、直接の精神的修養を指すのでなく（結果は仝し事ですが）、或事物に對し趣味を持つことであります。畢竟或有躰物若くは無形物に就いて修養工夫を積み實行して參りますと、自然其中から美所やら可笑味やらを見出すとか、漸次進境の結果は茲に言に盡せぬ興味をもつものです。興三昧に入る抔と申すことが則ち夫なので、軈て興三昧に入るときは非常に愉快の時機、所謂趣味の妙諦が發揮されたのです、私共が一度此境に入りますと、人知れす「ほゝ」と獨笑を洩すことが數々あるもので、縦令如何樣な不愉快、苦痛、悲哀等の事件が生じましても、喜怒哀樂のバランスは容赦なく他の慰藉者の方に傾きつゝ、趣味を有する事物に觸るゝや、心緒の琴線は彈奏せられて憂愁の響は何時の間にやら歡喜の樂と代り、胸に鳴り渡る音調は恰も露滴に映ずる虹が旭陽を齎すかのやう純粋清高なる性情を喚起して何となく淸々しくなるのであります、斯くしてこの精神上の變化は、不愉快、苦痛、悲哀より脱して心靜に天の攝理に從ふと云ふ譯になります、乾坤一淸洵に幸福なる生活ではありませんか、日を積むと一年、一年を重ねた生涯は矢張り此通り、幸福の運命は茲に開けたのであります。

▲趣味なき不幸の女皇

世に趣味をもたぬ人程憐むべきはありません、是は又恰も水なく草もなき沙漠を行くやうなもの。縦令英雄帝者の心を惱ました美人女豪でありましても、さながら淡き夢のやう、艶姿色褪せ形消えては煙の如く迹

なきものでせう。婦人にして權威を振ひしもの、露國のカサリン、支那の則天武后、墺太利のマリヤテレザ抔有名のものですが、世界女性史には、唯我儘を働いた事丈け、其處に一つ高貴なる人格を認むる事の出來ないのは、所謂修養のない悲しさです、趣味を有たぬ原因です。之と反對に人道的大偉人リンコルンの母松下禪尼近くは東郷大將の母抔は、慥に修養のあつた婦人——書籍の智識は多くなくとも——皆能く或事物には熱心に工夫を積み精神的に實踐し、其趣味上の慰藉快樂によりて苦心力行を仕終せたのです、此等の人は多く喋らず妙に手首を振り動かさずとも、自他の意思は疏通し、同情同感の交歡を完うすることが出來るのです、詩星グレーは曾て貧人の死して荒村の廢寺に葬らるゝ情趣を謠ふた事があります、それは若し貧しき人々も修養ありしなら必らず幸福なる生涯を送り得たてあらう。といふ意味です、要するに此千古不磨の詩も修養の缺點を悲むだのに過ぎません、私はグレーの詩意よりして前三女皇は人格高貴の度に於て後三者におとるとおもひます。

▲女性の使命と美貌

男女各々天の使命といふもの則ち其特質に應じて、趣味を有すべき事物を撰擇せねばならぬですが、近來漸く女子の地位も進み、女子判任官登用の途や其他相應に職業の口が開けてまゐりました爲めに、獨立生活若くは男子對抗問題抔を唱へる方も、往々見えるやうですが、夫は女性の使命に背くといふもの、所詮女性は生理的情態から此等の問題は不可能に終るのです、女性本然の要求は甘美圓滿なる家庭を作りたい爲めに相當の時期に達すれば、異性の愛を吸收することに苦心しをるは疑なき筈で、是は固より人生における女性が正當の義務にして又權利であります、從つて女性が他の愛情保護を得るの必要上、風貌の美、裝飾の美に思を凝らすは已むを得ぬ事で、渠等が美醜は可憐なる運命を左右するの一大勢力を有してをります、歐洲第一の美人カミールやクレオパトラやジセヨフヒンや、

英國現代のラングトリーやは其美の力によりて榮えある運命を開いた著しき權例の一つであります、兎に角美は女子の性命、これ無ければ、社交にも家庭にも其勢力の一半は殺がれたことになるのでムいます。

新刊紹介

▲袖珍百科全書。　百科全書とは吾等の日用に必要なる萬般の智識を網羅せしものゝ謂ひなり、昔は和漢三才圖繪と稱する大部の書ありて這般の用意に具へたり本書は體裁を西洋の百科全書に傚ひ何にても吾人の知らんと欲する處は座右の物を探るが如くに直ちに發見せらる細目は請求すれば無代にて送附する由（定價一圓二十錢本郷西片町內外出版協會）

▲スケッチ秘法（太田三郎著）。　新進のスケッチ畫家として知られたる太田三郎君がスケッチに就いて稽古の方法をよく分るやうに解き明かしたる美しき小册子なり西洋名畫と著者の作とを彩色木版、コロタイプ、三色版などに刷り數十葉を別紙に印刷して貼附したるなど用意あり裝釘も流石に繪畫の本だけありて意匠を凝らしたり（正價五十五錢京橋區元數寄屋町二ノ十三弘成館書店）

▲新小說（九月分）。　卷頭夏目漱石氏の「草枕」は百五十頁に涉る長篇、氏の小說は思想界の產物として批評壇に上るべき價値あり漱石の作を讀まざるものは最近の文壇を語るに足らず（日本橋春陽堂發兌）

▲少年之友（第一號）。　少年界の雜誌ては一等安い割合に中々面白くて爲になります、見事の繪ハガキや寫眞版もあります上に、少年諸君の書畫文章が澤山載せてありますから、坐ながら文章書畫の研究も出來ます、珍らしい雜誌です（定價五錢神田旅籠町文光堂）

▲家庭之友（四ノ五、六）。　八月の號には「東京の生活と地方の生活」九月の號には「我見たる西洋の家庭」に就いて何れも名士の談話あり此雜誌の談話者は兎に角纏りたる意見と創見とを有し他に見る如き名前だけ竝べる斷片的訪問記とは別なり（六錢內外出版協會）

▲少女世界（一號）。　お伽噺を主とせる少女の雜誌にて面白き話や爲になる記事に充てり岡田三郎氏の繪ハガキ美麗なり海賀變哲君編輯の任に當る（十錢博文館發兌）

▲家庭女學講義（四）　小石川小日向臺町　家庭女學會

▲はまちどり（十）　本郷龍岡町　日本女學校同窓會

▲婦人世界（九）　京橋西紺屋町　實業之日本社

▲日本の家庭（四ノ一）　神田表神保町　同文館

▲女鑑（十六ノ十）　京橋築地　國光社

▲あはれみ（臨時刊行）　府下上駒込　動物虐待防止會

○女子美術學校の料理科

本郷區弓町なる仝校の料理科は暑中休暇中に於いて新に敎室の建築中なりしが悉皆落成したるを以て去月十七日より秋季講習を開始せり仝科は日本、西洋、支那の三科に別れ、各科とも一週に二日づゝにて午前八時より正午迄の講習なり。尤も希望によりては二科兼修することも得といふ。一季間の講習は三ヶ月にて修了し春夏秋の三季とも修了せるものには卒業證書を授與すべしとぞ。目下續々入學者ある由なれど新敎室廣大なるを以てなほ若干名は入學許可し得る由なり。

詩壇文壇

▲文章を作るのに正直に思ふ通りを書くと云ふ事が一番必要である、字に引きずられて書いた文章と、字を使うて書いた文章とは自然に價値が違う、文字は下女の如く思想は奧樣の如し、下女は奧樣の言ふ通りに働く、奧樣が善く指圖を爲ずに、下女に任せて置いたら一家は整はない、思想がお留守で文字ばかり人眞似に並べた處で、其は文章として何の價値も無い▲何んな書物でも讀み始めたら一冊讀み終ると云ふ習慣をつけねば不可い、一寸讀みかけては捨て、また次の書物も讀みかけては捨てするやうな癖が、兎角青年の間には多い、一冊讀み終つて後にこそ其味ひが分るので、途切々々讀んだのでは全體の味ひが胸に泌まぬ▲詩と謂ふ言語はもう漢詩とは離れて新體詩及び和歌を指して謂ふ事になつた長詩とは新體詩、短詩とは和歌の事にも謂ふ、未だ詩と謂ふ言語の意味の移つた事を知らない人もあらうと思うて一言する▲悉く書を信ずれば書なきに如かずと古人は言つて居る悉く新聞紙を信ずれば新聞紙なきに如かず、新聞紙は誰も讀むが經驗なき諸孃が是を讀んで悉く信用すると飛んだ誤解が起る▲繪葉書交換でも爲やうと云ふのに繪葉書の繪の上へ墨くろ〴〵と字を書く人がある、美と云ふ事を解さないでは繪葉書交換も無意味になる▲編物の交換などは至極宜しい、寫眞も宜しいが少し交際してから後の方がよかりさうである、造花も宜しいが郵送の途中で形の崩れないやうに包みに意を注る必要がある、以上の外に猶交換すべきものがあらうと思はれる▲一の貴婦人より百の良婦人ある方が社會の爲になる、世の新聞雜誌が擧つて記事に寫眞に、貴婦人を紹介する爲に諸孃は虛榮心を起してはならぬ、婦人の天職は身分や人爵に由つて高められる譯ではない▲三越吳服店の話では昨年來染模樣に胡蝶が流行るさうだ、元祿とか桃山とか舊い時代を繰返すより、花とか鳥とか自然を對象として、流行の根元が作られるやうになつたら趣味があらう。此意味に於て胡蝶の模樣などは最も面白い、蝶は實に千變萬化、彼の美くしい羽紋の色彩を圖按化したら何んなに優美な衣服の模樣が出來やう。少女の髮にかぎらずリボンも蝶のひらめくが如く、男子の洋服の襟に結ぶネクタイも蝶の形をかたどつて居る、蝶よ流行れ千羽萬羽。▲秋は書を讀む時、遠足を催うす時、詩を作る時、靜思する時、戀愛の醒める時。

山中古洞先生選

懸賞圖畫（其十）



○家庭料理（特別三賞）
下谷區坂本町
二ノ一九岡野方
田村鶴子

○薩摩びは（天賞）
府下南多摩郡
八王子停車場前
乙幡もん子

○あるばむ（地賞）
日本橋區
田川よね子

○橋の人（人賞）
三河國豐橋停車場
前山中鎌太郎方
加藤芳子

文學士　沼波瓊音先生選

論文

特別第二賞

○半日の敎訓

岩代　若草子

都に物學びし給ふ某の君誰の君達、夏の休みにとて袖打連ねて歸り來ませり。都振の異なるさま聞かまほしうて、一歳振りの間物語の樂みに訪ひ音づれぬ。

朝の仕事一通終へての後なり、門に立ちて音なへば母君出迎して案内し給ひぬ。嬉氣に勇みますお話承りて待つ事や丶半餉餘りにして、やう〳〵出給ひぬ。大層お早くと微笑みませる、おん臉の邊り、はれ太りて重げに見え給ふはいぶかし。兼ては朝起の疾きに興じ給ひし君にして……。

髮の結ひ態、身のつくりなど、かゝる田舍には見ぬ容なり。芳ばしき何やらの匂ひ得ならず馨ることの艶きたる、さては薄く淡く塗り給ひし顔面、口紅輕くさし給へる姿、あはれ美しのさまよと見惚れ參らせぬ。

かねては内氣にして、ともすれば物言ひ給ふ事も少なかりし君にして、妾などより物に羞らひて耳の根目元など紅なし給ひ勝のお卿なりしを、さても〳〵お話上手になられしこと、輕く張ある調子、時には妾など耳誤りて幾度か顔赤らめて額の汗、拭ふに遑あらざりき。時好の品評、學生界の狀態より、演藝界の噂などに至るまで、よくも詳しう見聞し給ひしものかな。居は心を移すとや、僅に一歳二歳が程にかくも變りますものと思へば？あゝ!!敎育は受けたきものよ、ホゝホゝ、女童の身の、何冷評と思ひ給ひそ。

田舍人は趣味に乏しからむ、然れど音樂を奏で讃美歌唱ふるのみが趣味にもあらじ。星菫にあこがるゝのみが趣味に非じ、田舍人は進取の氣象に乏しからむ、然し我身よかれ我兒可愛い、我家榮えよと祈らぬ人は非じ。紫袴輕く飜し楚々として歩を運び給ふが美しと言はゞ、簑笠着たる姿の。など氣高からざる。都には都の風あるべし。田舍には田舍の趣味あり風致あり、其所に品性あり、無限の力も存す。田舍をして都らしくせしめむは餘りに大膽也無謀也。妾等は與せず。故鄕に入りては其人たるべし。鄕に入りて鄕を罵る人や

がて其人自身を罵り恥かしむる人ならずや。あゝ一歳振りの問物語。かくて半日の良敎訓を得たりけり。實に友はほしきものよ。

（評）友の厭はしき態度を活寫せられたる二段の論の堂々として氣格ある頗る味ふべし結句「實に友はほしきものよ」は自ら友を罵殺するの力ありて妙甚し。

天

○活動力

兵庫　賤文

榮華の夢を結ぶ勿れ、花の色香に迷ふ勿れ、月に雪に樂しむ勿れ、漫に宗敎家然として線香の煙に醉ふ勿れ今日は生存競爭の世なり活動の世なり敢て蟄居するの秋にあらず、活動は吾人の生命なり財產なり、而して活動は人類の本領なり、人の萬物に長たるは活動するが故なり活動なき人類は何を以てか禽獸と異ならんや、夫れ諸子活動せよ職業に上下なし上は廟堂の政治家より下は一工場の職工に至る迄各其採る所の業を異にすれ職業てふ精神に到りては敢て異なる所なし、斷じて職業に貴賤あることなし自己の職を重んずる人は自己を尊信する人にして責任を盡し義務を全うし信義を重ずる有用の材なり、自ら職を卑しめて自暴自棄なるが如きは進取の氣象なき人なり、諸子よ我意を滿さんと欲する者は宜敷自己の職を重じ職責を誠實に盡せよ日ならずして現在に優る好地位の我を迎ふる事あらむ「天は



海水浴（頁外）　小樽稲穂町　梶水仙

自ら助くる者を助く」とは千古不磨の敎訓なり人の人たる所以は個人に備へたる品性なり活動力なり、若し夫れ才藝秀絶資財豐富なりとも品性なく活動力に乏しき者は人間の名を冠する一匹の動物のみ、又貧困を耻とし苦となす勿れ、賤苦貧困を苦となすが如きは自ら自己の無氣力を世人に自白するに等し、眞の貧困とは病の爲め衣食に窮するより外之れある事なし、されば人として貧困に生れたるは最上の幸福なり、何となれば之によつて偉大の刺激と苦痛とを與へられ活動の必要を感じ世に處するの道を自覺するに到ればなり、嗚呼絶大の富も偉大の功績も總て之の活動力によらずんばあらず、王侯將相何ぞ種あらんや必要なるものは唯

品性を備へたる奮闘力活動力忍耐力あるのみ貧困を嘆ずる勿れ微賤を慽むなかれ唯々己れの精勵と活動力と熱心の足らざるを嘆ぜよ。

（評）意氣壯にして語甚勁し所謂懦夫をして起たしむるの文。

（地）

○運命

横濱市共立女學校内　山口直子

嗚呼運命！是れ宇宙の命令者なり、人の生るゝや運命にして死するも又運命なり、鳥にも運命あるべく花にも之あるべし、然りと雖も誰か能くこれに敵し、之に打勝つを得んや、世に誇る權者富者も、一度恐ろしき運命の神に捉へられなば、如何に力を盡せばとて、幾多の黃金を費せばとて、到底其手を逃るゝ能はず、口惜の涙にむせびつゝも猶之に服從すべく餘儀なくさるるなり、又昨日迄貧に苦しみ、種々なる惱に心を痛め、袖の涙の乾く隙なかりし人も、思はぬ好運に廻り逢はば百事百物皆意の如く、世にも幸なる身となるべし、奇しき哉運命よ、汝は宇宙の支配者なり、我等は親に從ふ如く汝に服從せざるべからず、只汝が命ずるまゝに活動せば夫れにて足れり。

人若し己が全力を盡して業成らずとせば、そは定まれる運命なれば安んじて可なり、自然は人生に向つて決して運命以外の活動を欲せず、さるに强ひて之に逆らひ、求めて苦悶するは甲斐なき業ぞ、然りと雖も、世には運命の如くにて運命ならざるものあり、世人往々之を誤る、己が力の到らざるを思はで只管に其失敗を運命に歸す、何ぞ其誤の甚だしき。賢且明なる人は炳然事理に通じ、運命を自覺す、故に見よ彼等の生涯や常に平和の滿てるものなり、暗且愚なる者は之を解せずして自ら悲境に陷る、げに運命を解せざるものは哀むべき哉。

嗚呼奇しき力を有てる運命よ、汝は宇宙の支配者なり命令者なり、我や汝の命に滿足するものなり我は運命神の許す限りに於て樂しく活動せん。

（評）殆ど運命を說盡せり運命に依て運命ならざるものあるを說ける注意の周到なるを見る。

（人）

○避暑論

本郷區湯島天神町一丁目十五番地平田方　しらつゆ

淵に游ぶ魚、木蔭に囀る鳥は暑熱の苦痛を知らず、彼

等果して幸なるか、暑さを愁訴する人間の若きはあらず實に人ほど弱きものはなし、避暑を試むるの輩は、必ずしも高尚なる趣味を解するものに非ず、磯邊を訪へばとて、幽谷を見舞へばとて、夏は依然夏なり、暑氣を避くる由もなし、萬物變化あればこそ、趣味も妙味も添ふるなれ、夏暑からず、冬寒からず、一箇年中ダラ〳〵生活にては、此位不快なるものなかるべし、夏如何に暑ければとて、限りなく暑くなるものに非ず、時到らば秋も來るべく冬も來るべし、要は僅かの辛棒なり、辛棒の甲斐は必ずあるべし、斯くて秋は一しほ親しかるべく、冬も愈々樂しかるべし、由來識者は達觀す、目前の苦痛に狼狽するは、蓋し凡俗の徒なり。

世の所謂避暑は遊惰を意味す、如何にせば夏を忘れ口腹の慾を滿たし得むかとは、彼等の希ふ所ならむが何程の滿足も得ずして歸るもの比々皆然るに似たり、終日孜々としてよく勉め、夕陽雲を染むるの頃、凉風徐ろに青葉にさゝやく頃、椽先に夕飯の膳据ゑて、父母とゝもに箸を取る、ア、、此天惠よ、妾等の如き家計裕かならざる學生は、此快樂を外所にして、何を苦んで父兄に無理算段を乞ひ、虚榮を張るの要かある、されば妾は避暑を否定するものに非ず、事情の許すものは大いに之を試みて、異郷に目新らしき勝景を訪へ、あるは歴史に聯らなる堂舍佛閣を見などして、世相を察し見聞を廣め、夏の趣味を窺ひて、珍談佳話を吾が家に齎たらすなど、其功果の莫大なる、中々に量るべくも非ず。唯だ一見不幸なるが如き、避暑するには境遇あまりに不如意なる多くの人々の、己れを忘れて彼等を羨むの憐む可くも無識なるを云ふに止む。

（評）昔美衣を誇る人ありしが食時には屏風を立てまはして甘薯のみを食へりとぞ苦しき算段して避暑に見えを張る輩この人に類すこの論を讀ますろがよろし。



秋（賞外）　下谷中根岸　山本榮子

秀逸

○理想論

備中　岡　くにゑ子

人類特徵の最なるものは其理性あるにあり、理性あるが故に理想乃ち生ず、理想は人類の生命なり、活動の源泉なり。是あるが故に個人活き、家族榮え、國民興り國家起る、若夫れ一び理想を失はんか、個人終に枯木死灰たり、奚ぞ國民國家の隆盛を望むを得んや、然り人類の消長正に理想と相關すること此の如し、是れ理想論ある所以なり、

吾人は理性によりて眞善美の理念を認識し、因て以て一の理想を構成す、理想は絶對的に完全無缺の觀念なり、人若し我の理想を得たりとせんか、現實我は自省一番直に其欠陥を自覺し、不完を慚愧し、發憤努力忽ち理想我を喚起して以て向上の目標となし、奮勵の對象となし此を實現せずんは已まざるの意力を生ずべし若し能く其理想を實現し得ば理想亦進歩して一層高きに登り、遙かに吾人を招て其向上を促すこと舊の如くなるべし、進歩又進歩、かくて理想は永遠にあり、只追ふべく而して及ぶべからず、只登るべく而して窮むべからず、是れ理想の價値ある所以にして又人類無限の進歩ある所以なり、

人昭々たる理想を得ることなく、頑迷不靈なる盲念邪慾の爲に役せられ、蠢々として徒らに東奔西走惟れ日も足らざるが如く然り、今や徒らに泣くべき時にあらず、徒らに戀すべき時にあらず、徒らに悶ゆべき時にあらず、滿腔の精氣を振て大に進修努力すべき時なり人已に理性を有す何ぞ理想を求て此に向はざる、何ぞ着々歩武を向上の途に進めざる、記せよ醉生夢死は人生の天職を全うする所以にあらざるを、嗟々個人活きざるべからず、家族榮えざるべからず、國民國家興らざるべからず、今の時や理想を要すること旱天雲霓を望むよりも切なり。

（評）確言至論。

○夏の花々

愛知縣　白井やゑ

櫻葉となり、藤の花垣にさらぼひて、實に恨ある春の淡夢、淺き縁と春姫君の、はかなく行きて片身の花々緋桃白桃、紅白椿或は菫、蒲英公蓮華草なんど野路に園生に色褪せて、粧うたりな梅雨晴れに雫る許りの新緑、そこに夏花清くほゝ笑む。

やう／＼戀知りそめし少女子の、粧ひこらして立てるにも似し白芙蓉のうるはしさ。竹籬かき上げて、眉はくらん局々の夕の姿にも類うべき卯の花の美くしさ。まだ戀しらぬ京女の、袖ひきのべてほゝ笑むにも肖し艶の紅芙蓉。

緋牡丹の華、芍薬の麗、そはとり／＼に、天姫のお使、或は恥らひの姫君にもたとへんか。

朝に興多きは蜜柑の花よ。

夏の曉、遣戸おしはづして庭に下り立てば、天の扉未だ開けず、鷄小屋の闇きになく。未だ落ちやらぬ月の影清く、蜜柑の花そが光を受けて、白々と露の置けるやう也。やがて旭東皐を離れて、萬條の金線を放てば凉自ら身に泌み、朝風其處より湧くらんかと覺ゆ。

夕に趣深きは百合の花よ。

夏の暮れ、丘山にしよんぼり月の影ある宵なり。月に浮れて獨り後山に登れば、夕風青茅をそよがせて、其所はかとなき百合の花、朧夜の星にも似てほの白う暮れ殘るが見ゆ。夕山の香袂に滿つなんど、趣深かゝらずや。

夕顔に配合よきは、薄化粧せる貴公子、戀を思ふ手弱女、番茶の匂ひ。

櫻櫚の花に調和よきは、黑奴の群れ、夕の月、山梔子にありたきは、無口の女房か、紫陽花に興催すは寂しき住居よ。

實に百日紅の淋しく暖かなる、菖蒲花の艶に晴れ〳〵しき。雨に霑へる鷄足草は冷たきものぞ、塵にまみれし晝顔は暑きものよ。

茄子の花の小さく色濃きは、またせる少女にも例へんか凌霄花の目覺むる許り榮えある、いと心地よし。

撫子のなよ〳〵と、石竹のほゝ笑みやさしき、稚百合の罪なさ、何れおとらぬ夏花の數々、花を春とは誰が言ひそめけん、夏の花は又一入興あるものを。

（評）書きぶりいろ〳〵に變りて飽かしめず。

姉妹　（賞外）　長門萩　小國敏子



○敵

千葉　八木　美佐保子

敵は愛すべく且敬すべきものなり。

四海平和にして敵なくば人心腐敗し競爭進歩の心全く失すべく、我等に取りて文壇の敵なくんば、何時かは文の發達すべき。

實を以て論ぜんか、我國の斯く富强に赴きしは抑も何に原因するか、言ふまでもなく淸露の如き勁敵ありて强大に進み、英佛の如き商業上の大敵ありてこそ頓に進みしなれ。

我等は日毎に新しき文壇の强敵來る故に、此を防ぐ策をめぐらし、或は新しき想を浮べて以て有材文士と進み行くに非ずや。

世人は何故に斯く恩深き敵を惡むならん?!

或は謂はん、我々の子は敵の爲に斃れしと、嗚吁過てり彼等は教育のなき故か、否非ず、自覺心に乏しきが故なり。

國恩と子愛何れが大切なる。

文明の今日なればあまり人々を輕ずる怖あるを以て吾は敢て曰はじ。

再び曰す、我は大に敵を愛し、且敬ふものなり!!!



河井醉茗先生選

特別第三賞

○秋の賦

下野小山町　新井琴子

大理石聖き天壇に、
嗽ぎの水に解けし燕脂、
峯は眞紅にそめられて、
浄瓶さゝげ秋姫が、
風に乗りてや下るらむ、
花野に充つる露の玉。

月の聖燭光清う、
公孫樹の精は舞ひ出でゝ、
ひらり／＼と翳しつゝ、
秋風、樂を奏れば、
金の小扇百千片、
讃美の宵の興そゞろ。

神澄み渡る碧瑠璃の、
萬顆の星の閃きに、
湧き出し如き筑波嶺に、
天蓋飾る瓔珞か、
蟲の音清き尾花より、
姫の御衣と雲の流るゝ。

所謂手に入つたもので、造句も自在、想像も奇新、優に詩家として將來を期待するに足ると云ふものでせう（醉茗）

天

○蜘蛛

埼玉縣見沼用水の里　細沼藤代

牡丹のかげに巣をあみて、背あたゝむる蜘蛛の子は、
牡丹の花の落つるとき、短かき夢をやぶられぬ。
君がかひなに抱かれて、安息を得し吾身なり、
せめては夢に入らんまで、唯このまゝに手を解くな。

好比興、落想天の一方より來る（醉茗）

地

○まどひ

京都六軒町元誓願寺上ル　大澤こう子

朝戸によれば、まどひあり垣の朝顔
こぼれし蔓のびて、さく花水色のさゝ縁
終に是人の私、天の愛に劣るか
青玉の瓶にいつくも、葵の紅はこぼれたり。

理想もあり、句法も最新、隱れたる秀才の一人でせう（醉茗）

人

○悲しき日

綿貫滋子
千葉縣津田沼大久保石川方

闇の戸遠し白河や、合歡の花咲く草の野に、
夏は闌けゆくつきの夜を、淋しくうれひおはすらむ。

蟬のむくろに「これぞ妾が、
哀慕とうたひこし人の、
なよび姿は宵毎に、
枕にかよひねぬれども。

衰へつらむ黒髮も、
ひたひを掩ひ泣く日さへ、
眉根ひそみて言葉のみ、
華やぐ人のけふはまた。

夢おどろかす風のこゑ、
斷るゝ雲に秋立たば、
その思はするこほろぎの、
露はたもとに滋からむ。

悲しき日より悲しき日、たえず亂るゝその胸は、
かゞろき星やこぼれけん、雲よ一日は靜かなれ。

まだうら若き少女子の、勿悲しみそ吾がともよ、
運命をかこつ脣に、口紅さしたまへ夕間暮。

（醉茗）友に送つた詩、悲しみと同情とは溢れて美しい辭となつてゐる。

針仕事（賞外） 島根縣[illegible]松 須谷千賀子



秀逸

○朝逍遙

上總 田村瀧子

黎明頃をさとふりし
雨雲北に退きては
地より起る清凉の
朝の氣膚に透る哉。

滅え殘りたる燈の
窓に冷たき瞬きや
青葉を捲きて微風の
瑠璃溶く池の面走る。

夜の闇のこる木下蔭
煙ふるが如き薄靄は
入り際の月のほのすきて
夢をつゝみてうすれ行く。

濃靑に綴る白銀の　露ふりこぼす八千草の
萬顆の玉のむら照りに　地の香は搖れて裳裾をうつ

薄紅はける東に　織り亂れたる雲の綾
動くともなき漂ひに　大古ながらの影匂ふ。

淡星光れる遠方の　秀峰黑う畫かれて
峽より峽にほの白う　眠りさめゆく影見ゆる。

あゝ美しき天地の　物に穢れぬ、朝の氣の
崇高き自然の大景に　觸れては胸も淸らなる。

詩に彈力の無い弱々しいのは讀んでも感興は高まらぬが、此作のやうに生氣の充ちてるのは快い(評者)

○ほたる

上根岸　太田あきつ子

夏のみ神が春姬に　下界を讓受けまし、喜悅や
靈雲靉く天の坐に　御宴をこそは開かれぬ
春の姬神秋の神　冬の男神は賓客坐
天女が輿を扶けつる　樂の響や微妙にして
聖香薰ずる天上の　歡樂こゝに盡くさるゝ
やよ賓客にまゐらする　み酒を持て來と宣らすれば
あとぞ應へて天童が　捧げて出づる一つ甕
甘き靈酒を湛へたる　甕の手いかに辷りけん
發と思ふ間を取落し　あなや碎けぬ形もなう
靈酒流れて瑞雲を洩り　夏の御領の下界にぞ滴る
そが凝りて成る夏の果實の　味美きもむべなりや
許すまじとのみ怒りに　不禮の罪のいと重き
天童天宮を逐はれ出て　下界なる小蟲と身をなすも
晝は恐怖にとびも得で　葉蔭に暗く潜みつゝ
夜の戶張を引はえて　み神入ります黃昏より
あゝ〱天宮の懷かしう　天上戀ひてあてもなう
もと天上の者なれば　輝光は何も身にあれど
昔に變るよそほひと　姿裝悲しめばそのかみの
又罪忍ぶをのゝきに　泣く聲もなきあゝ螢。

後半は少し牽强の嫌ひありますが、前半は高い氣韻が動いて居ます(評者)

○流れ星

攝津　和久薰子

ふけゆく夜の空ぬひて、　たかく流るゝながれ星、
空のいづこと影追へば、　奇しき光の尾を曳きて、
暗き雲にぞ消えはてし。
希望の光あともなく、　やがて消えなむ運命とか、
あゝ何なれば今さらに、　靜けき闇を逃れいでゝ、
人の巷に入るべしや。
星は流れて消えにけり、　望よさらば捨てはてむ、

思ひ暫しのたゆたひに、　闇の鐘樓にわれ立つや、
夜は永久に靜かなり。

流星を主題とした詩は、今まで餘り接しませんでした、此作、沈着の態度、亦一箇の境地があります（醉茗）

○朝の夢　小石川　田中佳江

紅のふすまの夢まどか　蚊帳の人のほの白う
紫雲たなびく朝まだき　双手をくみし御むねべに
いかなる呼吸通ふらむ

あさつゆちらしそと吹けば
びむのけゆらゝほをなづる
化粧のまどの女郎花
緋しごきゆるうさしよりて
水に映せり朝姿

戀は十七うつゝなや
あら醉はしめよこのまゝに
思ひのまゝに醉はしめよ　天地永久に悠々と
美神のかもす酒甕に

あでやかな戀の姿、水に映っては朝の星も消えるでせう（醉茗）

○花に見入りて　京都　花埜女

姤ましの花の運命（さだめ）や、　ほのほなすくちびるは、
風うけてさゝやきて、　囁きぬ、「吾が世樂し」と
ひなげしのほゝゑまひこそ、人の子は、眼みはりぬ、
美しの花の姿や、　あふぎ見る眼の色の
わが心張りしもなき、　人の子はたゞ、吐息しぬ、
ひなげしは、又もさゝやく、「故里の廣野を訪へ」と、
姤ましの花の運命や、　露草の葉ぞしげる、
萱草のおどろしく、
野いばらの路こそふさげ、
人の子のなやめる眼に、
あゝ、ひなげしのほゝゑまひこそ、

花に見入りて虞美人草のさゝやきを聞く、好い詩材でもっと歌いたい事があるらしいのに、筆が一いき後れたので、想うて居る事が出ないやうです（醉茗）



こせ（賞外）　大森　井月田鶴子

○春のゆめ　四谷　さゆり

嬉しや日頃書きゐし、　うつゝ思の現はれて、
しろく透たる羽衣に、　わが現身はつゝまれぬ、
妙にゆかしきものゝ音の、　ひゞくみ空の彼方より、
薄くれなゐの花びらは、　見る目もあやに散てきぬ、

心空にもながめ居る、　折しもあれや色深き、
むらさき雲はさとたれて、　我身は下界を離れたり、
下界いかにとひらきみる、　眼さへぎるくしき鳥、
あなやと思ふひまもなし、　雲のかけはしふみはづしけり、

詩は皆夢を語るやうなものでありますが、此詩のやうに夢らしい、詩は少いです（酔茗）

○淺間山

信濃　大井靜枝子

行く雲絶えぬ峯の上　大空奔る風もなく
永劫の光りにほゝえめる　山の姿の崇さよ
人の世遠き野邊にして　草刈りくらす牧の子が
鎌取るひまに眺めては　自然の光り仰ぐらん
涙にたへぬなやみの子　紫匂ふ夕陽の
色美しき様見ては　希望の影にほゝえまん
千曲乙女がくりかへす　戀のせゝらぎたへぬとき
ちぎれし雲の帷より　愛の面ぞあらはれん

淺間山のやうな好詩題を捉へて、これだけでは殘念でありませんか（酔茗）

○夢

靜岡　こぼれ萩

戀も情も何かあらんと、　まつはる袂ふりはらひ
行手の花にあこがれて　只まぼろしの影追ひて
秋心結んで愁とや、　涙ぐまるゝ秋の色
芭蕉に雨の細き宵、　十九の夢はさめはてぬ

韻味（酔茗）

○春の歎

三河　すや子

家の寶と秘められて、　幾代かこゝに傳はれる
紅のしめ緒や金蒔繪　ふづゝみ姫は手にとりぬ
銀燭四方にてりはえて　白龍雲に舞ひをどる
金泥の屏風おごそかに　春をおごりの殿の中
七彩匂きふり袖に　緑なす髪なびかせて
妙音ひゞく舞の歌。　うるむ瞳のかゞやきや
優し御手の一打に　香はゆれてハラ〳〵と
銀瓶の花座にちりぬ

艶容、舞姫の姿活く（酔茗）

○蛇覆盆子

大阪　紅露

白き光りに初夏の、　空、碧瑠璃の若輝りや、
兵どもが夢のあと、　姿、誇らしの夏くさに、
口紅色とくれなゐに、　たわゝに實る蛇いちご、
母は採るなと教へたり。
夕づく日影華やぎて、　榮え美しうかぎろへば、
紅色さして唇に、　微笑みすなる姿なり
よし恐ろしき名なりとも、　覆盆子を摘みて蛇來ると、
誰が口よりや傳へけむ。

蛇いちごは幾度も歌はれましたが、此の詩は比較的に眞を歌ひ得ました(醉茗)

○一重垣　三河　つま子

黄金の花よ日に映えて、糸瓜は這へり一重垣
綠ひろ葉のひろごりに組む錆竹は隠れけり
春山吹の一重八重美々しう腰をめぐりては
宵さめ細きくちなしに
皐月の闇はせまるかな
これや仲結ふ垣ふれど
編む組竹の目をもれて
夕顔白き宵々を
隙間見てする戀もあるべき

着想てはありますが、捨てられない處は此作者に鍛錬があるからてす(醉茗)

○眠れる蝶　滋賀　辰井ふみ子

わかき血潮のあこがれに、誰れかよぶらん心地して、
金泥の扇、塗りの下駄、月の夏野に露しだく。
紫褪せて紅消えて、夜目一樣の綠野や、
黑ずむ小松のかげにして、一重花瓣、莖二尺、
奇し花ひとつほのめきぬ。小さきわが胸躍りたり。



せんだく（霞外）　松江母衣町　中村ちか子

たゆたひながらつとよりて、そゞろ心に手をふれぬ。
瞳み四寸に近寄せて、月の光にすかしみれば、
紅ゐの花芽を秘めて、若葉ぞ薫る萩の枝に、
何夢むらむ美くしう、黄なる胡蝶ぞねむりたる。

少し細工が勝ち過ぎたやうです、詩語は富贍(醉茗)

○銀笛賦　門司　岡芳子

夜風身に泌む星月夜、百合の香めぐる湖に、
歌口熱き白銀の、
手馴の笛をすゝぎては。
今宵天降りし夜の神の、
玉手や洗ふとまどふらむ。
低くき夜霧の中にして、
いと靜やかに歌へらく、
『綠にけぶる夜の空の、
星より星に傳ふべき、
崇き韻よ此笛の、
六つの穴よりほとばしれ』

川でもなく、海でもなく、全く湖水にこそ銀笛はそゝぐべきでせう、而かも百合の香廻る湖水に於て(醉茗)

○吾等は摘みぬ　下野　まゆ葉女

そは冬ならず君とわが、戀の運命を問はれしは、
そは薔薇咲く頃にして、われらは摘みぬゆきずりに

ものうき時もなほせめて、若きふたりを忌まざりし、
あらずわれらの過そめに、地は花もて裝はれし、
夕べ家路をかたれども、われを抱きぬ、君はなほ、
そは薔薇さくころにして、われらはつみぬゆきずりに
誰が涙にぬれそめし、わが頬とめしや君ならで、
戀のすがたをとへばまた、君ダマスクの芽をつみて
さて尙生ひむさゝやかの、蕾ひらきぬ打破りぬ
そはうばら咲頃にして　わはらは摘みぬゆきずりに

（フード）

譯詩とあれば然もある事ですが、新しい香に滿ちて居ます（酔茗）

○にい汐

越前　野坂まさを

ひかりの征矢か白銀の、弦を離れて地に充てば、
春、遠海に音たかく、湧きて漲るにい汐よ。
五百重の浪に香をのせて、靜かに來寄る春の海、
かの龍神がかづきます、それや亂るゝ海馬藻よ。
新らしき香を枕して、磯邊の岩に臥しぬべう、
午日をみなぎる新潮の、轟きをしも聽かむかな。
かの細腕に倚るべくは、こゝには若き歌を見む、
磯の眞砂路ひねもすを、小貝拾ふも興あらめ。

海邊の詩として、ありふれたものですが、別にあやまちの無い作である と云ふ事は出來ます（酔茗）

○とはの光り

麹町　山下里子

今宵の雲のをだやかに、つれ〲なれば窓により
眺めに遠を思ふとき、蝶姬(ひめ)はひら〲舞ひ給ふ
七日七夜の横笛に、さゝやき秘めてとはの光り
人なつかしと雨の雫、日毎〲に思ふかな
とはの光り天のさゝやき、つなぐ虹の七彩は
やがては消えてうつゝにも、ひとの胸にと入れよかし、

○小川の歌

赤坂　齋藤紫桂子

星影あはき曉や　しらべ涼しく人の子の
朝ほゝえみくしけづる　黒髮うつすせゝらぎは
牧場の童子そと流す　たばねしスミレすくはんと
柳の影の少女子が　ふり袖ぬらす我はさゝ川
紫雲の夕ばえや　枝ふり牛追ふ牧童の
草笛ひゞき影見れば　青き苔むす丸木橋
少女が戀のやさ歌や　かたみのえみを流し行く
われはさゝ川とこしへに　合さん歌に草ぶゑに

○森の氣

高尾　金子楓陰女

雲を凌ぎて幾百年
立つや古杉の幾百株、
我は思ひぬ神にして
やすらふ時のありもせば、
かゝる森をや撰ぶらむ
一歩を我の進むれば
やさしながらも力ある、
風先づ外面の穢れをば
拂はむとにや吹き來しと、
思へば奇かる冷氣さへ
身にしみ〳〵と襲ひ來て、
胸に聲なき響きしぬ
神の巷ぞけがれたる、
思ひ去れよと聞へけり。
心清みぬいざゝらば
神よゆるせと思はずも、
我れ高呼びて折あらば
神になりともまみえむと、
進むや森の奥深きかな。

○比叡の秋　　横濱　古川英子

山路興ある朝明けを、
うまし葡萄の蔓引けば、
露はこぼるゝ紫の
こまやかなりな山葡萄。
山氣脛巾にしみいりて
双の袂も爽かに、
低うさゝやく熊笹の、
比叡山秋は老いたりな。

○夕　虹　　福井　白崎萓子

あな美しの夕虹や、
赤、黄、紫、はたみどり、
彩麗はしき巻物を、
神の舒べさせ給ひけむ、
我世の物とも思はれず。
夕の虹よ、心あらば、
我を其の背にうちのせて、
この塵深き世の中を、
遁れ出でしめよ、空遠く、
清き光のある所。

○旅に興津を過ぎて　　三州　やぎえ女史

歴史に名を得し駿河路の、
夢の跡とふ旅枕、
興津をよぎる磯にして、
鐘の聲きく清見寺、
夕日ひたせる海原の、
紫紺の色に沈みては、
彼方天城の山淡う、
綾と流るゝ漁火の、
影長う引く夕べ哉。
夕月空にほゝ笑みて、
墨絵に淡き並松の、
疎の影を縫ひ行けば、
藻汐煙の末遠く、
船やる聲も面白ろき、
寄藻の花の香清く、
潮ゆるうさす濱舘、
かえよぶ聲もほがらかに、
舟うた浮ぶ夕凪の海。

○森の暮　　松山　山脇幸子

萬葉はゆる森の上
低く垂れたる金色の
雲をやぶりてサト放ち
我眉射たる金箭に
くらむ眼を手に覆ひて
ソト逃れたる森の陰。
白衣の女神坐す如き
大理の像の膝近く
小草に伏して老いふりし
血も若やげと渇仰の
罪なき願誦ずれば
精か梢はさゝめきぬ。
木立をもれて七韻の
靈ある鐘に起き立てば

森はいつしか夜の神の　紗衣のみ裾に覆はれて
靜に眠る萬象の　息の幽にもるゝ哉。

○裾野　長野　矢名氏

夕日薄く影匂ふ、　裾野十里の草の原
淡き花香に薫ずると、　興もそゞろのさまよひや
桔梗白くづ藤袴、　野菊撫子女郎花
結ぶ尾花の一穗より、　淋しき鐘は響くらむ
露をしとねの夢甘く、　秋の香吸ふて花枕
蟲に抱かれて美しき、　調や七音五樂の譜
虫の美音に促され、　いづこともなく迷ひ行く我

○椰子　淺草　大沼きさえ

ナイル河畔を彩どる雲の　金字の塔をかたうとざして
無象の夢のむれよぼう　げに莊嚴の裝ひや、
奇妙の力てもりぬる　夕のみ空は畫工の
神秘の畫筆ふるひしか　榮光や美し椰子の木の間、
見よや一日の戰ひに　敗れて落つる夕日影に
囁くかなたに椰子の木の　雲を仰いでいや高く

○旅中吟　豐前　みさを子

紀路の霞はうら〳〵と、　西に流れて和泉路や、
菜の花つゞく野を七里、　日はやうやくに斜なり。
穗麥の末にうすがすむ、　生駒、葛城むらさきに、
一筋野川うね〳〵と、　廣野を遠く流れつゝ。
畷づたひの淋しきに、　里の子が吹く麥笛や、
風にわなゝく一ふしの、　旅の愁ひをさそふなる。
ひとり彳む我が影か、　街路に長きに驚きて、
今宵いづこに宿らんかと、　脚絆の紐をしむるかな。

○海底電信　山梨　山田秋葉

あらなみ逆まく、　海の底、
か細き線に、　往きかよふ、
千里の外の、　友だより、
またゝくひまに、　知られけれ、

○ひじつき　信濃　山浦とく子

妾が手縫のひじつきを、　戀しき君に送るなり
色は冴えたり絹レース、　入れし眞綿はふくよかに
戀しき君が眞白なる、　腕の下にしきてませ

○雲の憧憬　麻布　廣瀬龍子

夏の色るりの色なる、　日の威あまり照る大空に、
今こそ聳え立出てし、　雄々し姿の雲の峰。
峰の連り巒々の、　幾許知られ盡くされぬ、
山の形の危さは、　實に天地のおほ工み。
古りぬ高塔丹の色、　褪せにたれどもてみどりの
神の祉は冷やゝかに、　塵の氣立たず苔滑ら。
梢の隙洩れて見る、　白き姿は夏なれば、
姫の纏ひのうすものも、　同じ色なるすゞ心地。

峯の松韵さら〳〵と、さゝら潺間の音に和せば、
妙なる地の奏でに、耐えてや揺らく雲の輿。
夕去り來れば茜さす、遠の湖畔に歸り去り、
今や萬衆生々の、生命得たらんおもむきに、
埃の汚れは里川に、洗ひ去りぬる泥にごり。
天と地との生み出でし、生みの儘なる雲の枝、
心なきこそ最大の、有心の德の權化にて。
頻りに紬の巖根扃を、
鎖ぢぬ開きぬ朝夕を、
往き來に蹤をとめも來で、
扨ても憧憬の雲の身や。

○行きなれし國　兵庫　田中園子

胡蝶の羽根に打のりて、
神の子これを引きゆくか、
あらず夜毎を只一人、通ふになれし夢のくに。
なみだもあらぬ夢の國。
へだても高きうつし世に、まどひがちなる身なれども
母が生みたる其日より、誰にもよらでたどりゆく、
ねむるの園よゆめのくに。
一とせ前の春の夜、母がうまひの床の上に、
我を忘れて行きにしか、ゆめの國にて夜毎見ぬ、
あゝなつかしき夢のくに。


雨あがり（賞外）　兵庫　はつれ

○平和の村　伊勢　三井陵子

螺鈿の卓に白檀の　薫りもゆかし父君の
離れ座敷の銀瓶の　梅もてまゐる妹が
飛び石つたふ袖をふく　東風がもてくる鶯の
聲も平閑にさえ〴〵て　平和の村に春たちぬ

○卯の花　愛知　清原子

山した小野の宵月に、
木陰路よ今は『追懐』の、
人待ち馴れしまがき根に、
卯の花はしも香に匂ふ。
峰越の風の吹くまゝを、
『需めよさらば與へめ』と
心知りなるさゝやきに、
ためらへばこそ垣間見し。
あゝ、其の花の片去りて、やがては失せんその如く、
わが思ひやも往き消えめ。

○蝙蝠に與ふ　尾張　おゝけ女史

汝が悲しみを神に任せよ、鳥と獸の堺にあるも、
晝の光線は視力奪ふも、神は等しく汝が身守らん。

さかしに身をば垂れし蝙蝠、一日暗きに隱れて棲むも、
神は汝がため輝く星の、夕を頓て與へ給はん。

○椰子　　下總 川島なみ子

七彩そむる天の戸に　あな壯嚴の朝日影
一ゆれ搖れて大椰子に　斑らの陰の面白な。
幾年となく水の面に　己が影をも知らずして
大靑空に突き立てり、仰げば空に雲もなく。
欝々茂る葉の陰に　無心に眠る黑奴を
護るが如く日を障へて　有心の椰子は私語けり。

○秋　　越後 金塚とし意

秋の帝の寵さめて、地に落されし秋姫が、
三輪にかくれし評より、悲し秋風吹き初めぬ。

雨音聞かむ盥して、芭蕉倒るゝ南窓、
夜風身に泌む秋の家の、御燈洩るゝ破れ壁。

○夕つかた　　小石川 木塚すみれ

湯浴の肌にきぬかえて　きざはしゆるくくる風に
搖ぐともなきうす袂　おばしま高き樓にかゝりぬ
ほのかに榮ゆる水いろは、またちからある空ながら
金絲むなしくみだれては　みどり褪たり野と山と。

今日の一日の人の世を　見しは罪にかはた幸か
囁きませのたゆたひも、自然はたゞ入る夜のうちに

○瀧に遊びて　　德島 小川なみ子

山氣しづかに胸にしむ　幾世か經ぬるあら瀧に
そだちて立てる龍が岩　銹びてや靑く黝づめる
なかに彫られし立像の　『不動』がほとり轟きて
くだけて騰る水けぶり。
靈ある山にぬかづきて　袂つらねて谿こえて
太古の姿、そのまゝに　白衣の行者錫つきて
とゞろき落つる荒瀧に　默して暫し立てるとき
風鈴の音遠く雲に入る。

○田草取り　　信濃 芳枝子

案山子か人かわかぬ氣に、笠きて立てる田草取る女よ
戀に狂ひてもつるゝ蝶の、行へ見つめて唯うつとりと
たとへば胸に想ひいだひて、もの思ひ居る若人の如、
おゝ汝が魂は果なき空に、消ぇ行く蝶を追はんとするか
空を見上げて輝く瞳、やがて和風田面を吹きて
靑波騷ぐ稻田の中に、姿は見ぇず蝶のみぞ飛ぶ。





特別第二賞

○舟路

茨城　中堂子

嵯峨の里へ下らんとして、一艘の扁舟は今しも保津の溪に入りぬ、艫に在りて艪を操るは若人也、年は二十を幾つや越せし、骨は太りては居れど肥えてはあらず色白く眉秀で、眼は嚴かに光り、口は賢くも結びて、思ふことの十が一までも言ふまじき相貌は、生れて恁る業を營むの柄とは見えず、棒縞のアッシに紺の三尺を固く緊め、津山縞の前垂れをしたり、舳に立ちて棹をふるへるはそが父なりとぞ、年七十に近けれど頑として衰へず、頭も一所とて禿げはせで、白銀の如き白髮皺少なからぬ赤ら顔によく相應りて、若人の深淵なるに引かへ、こは何時も莞爾と、苦と言ふものは知らぬげに見ゆ、舟には米を積みてその上に二人の虛無僧を乘せたり、いづれも白襟は黑羽二重の紋附を重ねて、形ばかりの小さき金襴の袈裟を　側には總美しき袋に納めたる尺八を置きて差し向ひぬ。

二人の同時に天蓋を除りたるを見れば、一人は三十前後の髯いかめしき男にて他の格小さしと思ひし一人は男にはあらで而かも容貌美はしき女性なりけり。

艫なる若人は寧ろ驚きてながめぬ、色の白き眉のやさしき眼の黑み勝ちなる何れは千人に勝れたる容貌なるに、黑髮は造作なくギリ〳〵と卷かれたれば一の氣高さは麝香の如く人を襲ふ。

さても氣高く美くしき人もあるものかなと若人は現なく思ひ入りぬ、舳に立つ老翁も棹を止めて莞爾として頷きつ、村長樣御秘藏の唐美人なりと、渠は心密かに稱へたり、夫なるは兩岸の風光を貪るに忙はしく妻なるは又しても來る急瀨を稍怖れて兩手をつきて只俯しぬ、偶言葉を交す時あるもそは優しく小さに更に水聲に搔き亂されて艫にも舳にも聞きは取れざるなり今し舟は溶々たる深淵を過ぎて宮下の瀨にかゝりぬ老水夫は棹を斜に身を搆へて、讐ら牙を鳴らして飛びかからんず猛虎にも向ふが如く、來たれ恁うよと眼を据へぬ、欻然舳下るよと見る間に音は無くて船は矢の如くにぞ直下すなる、殊にそが正面には巨岩牛の如く横はれり、あはや衝き當らんの刹那、丁と支へし手練の一棹、美事や船はスルリと逸れて、悠々と又瀨に浮び出でつ。

若人は又顧みて今急瀨を過りしを心づきぬ。不思議や渠は今日に限りて、ともすれば現なき心地のするなり、さはれ此の兩々相頼りにしたる夫婦の客は係る急瀨の幾度か來りて幾度か其の巧みなるに感じ入りつ、怖ろしと思ひたる女性も今は夫と共に頰笑みて一種壯快なる氣に滿ちつゝ四邊の光景の目醒しきを稱ふるまでになりぬ。

兩岸は近く迫りて截り斷ちたるが如く、迂回せる水路は行方もわかず越方も見えず四周は只亭々たる綠の松に圍まれたるのみ。

碧掃ふが如きの空は、狹き間に高く晴れ渡りて、下は地勢の然らしむる處か、早や暮の色仄めくよ、河谷をなせる秩父古層の横斷面は、幾千年の水に碎かれ磨かれて、音に聞えし奇岩怪石は、あたり一面聳えに聳えぬ、此の境に於ける此深潭に舟を浮けて、誰かは此の自然の翼に身を[illegible]せざる、言ひ合はさずして二人の笛は袋を出でぬ、四つの唇も歌口に吸はるゝが如くに、やがて孱々たる聲をなして、聲漸く咽々たり、又嫋々たり、げにや怨むが如く慕ふが如く、泣くが如く又訴ふるが如く、正に此れ神人七情の聲なるべし、山醉ひぬ、樹木又醉ひぬ。

啣軏たる艪聲はいつしか聞えずなりて、こゝに短かき晩秋の一日も暮れ果て、四面壁立せる此の溪谷に夜の帷は下されぬ。

折柄吹き來る風に和して又も微かに笛の音、一聲、二聲、三聲、縷の如く。

（評）美しき虛無僧夫婦は景に打たれ若き舟子は美女に憧がれ老いたる船頭は一意水と岩とに戰ふ、眼無き詩なり色なき畫なり山、樹木亦醉ふ余豈に醉はざらむや。

特別第三賞

○いとし子

靜岡縣藤枝町　わか榮子

「お母さま、乳が脹てきましたから坊をどうぞ」。起直つて胸を寛げる儂、見ちがへるやうに脹らんだ乳房からは、はやぽと〳〵とこぼれて桃色縮緬の裏襟をぬらします「さおっぱい」若いお祖母樣の手から、やんわり懷ろにうつされて、可愛い唇で吸ひついた生後五日目のゑみ子、十九歳の母が始めてもつた愛しいいとしいむすめで御座います「まあ眞に目許口許、靜夫にそつくりだわねー」お母樣は目を細くして、うつとり初孫の顏を見入て被居います、ほんとに淡紅羽二重のやうな肉につゝまれた柔らかいまなざし、花の苔よりも

もつともつと美くしいくちびる、不器量な儂に似たとも思ひませぬ。

前かた お腹の中で頻に動くのをこらへながら、拵へて置いた紅友禪のひとつみ、秋草摸樣の袖無、それを今ちやんと着せて、抱きしめたわたしの心もちは……、目の中へも入れたいほど可愛く、躰が溶けるほど嬉しう御座います。

「でも鼻はお母さんだなあ」いつのまに來て被居つたのか、靜かに襖を明けて這入つて來た夫は、笑ひながらうつむいて、濃い八字髯が痛く〳〵私の胸をつゝくのもお構ひなく、顏をさしよせて覗いて居らつしやいます「ホヽヽヽヽ」とお母樣は花やかに笑つて「でも此紅いところを見ると色はきつとお前より白いよ」、夫は聞かぬ振して居ります、眞に世間のお姑樣と異つて、宅のお母樣は實に儂によく爲て下さいます、併し儂はじぶんに似て、まつたく坊の鼻のひくいのを、つらく思ひます。「まあ何てもいゝさ」と夫も笑ひ出して、「どれ私にひとつ抱かせてくれ」覺束ない手付て、怖々抱へながら、又しても髯の顏を差寄せて、接吻しようと成さいました、儂は驚いて「あれお髯が痛いぢやありませんか」と、思はず擦寄りましたが、夫は障るまいとできるだけ口を尖らして、坊のやわらかい頬を、チユッと吸つたお顏付の可笑さ、儂もお母樣も袖を顏に當てゝ笑ひました。

わたしのよそ行着の長襦袢などは、それは派手で、奥樣と云はるゝはあまり不似合ですから、儂は肥立次第、坊の着更に縫ひ直してやらうと。樂しんで居ります。

（評）始めて子を持ちたる若き母の情のよく寫されたるはもとより父の擧動もありありと描かれたる經驗ある人はこの文を讀んで必ず微笑むべし。

郊界（選外）麻布　大午たけ子



天

○磯の夢

下谷區上根岸　太田樂子

能く晴れた瑠璃色の空には所々に白雲がふうわりと漂ひ、沖の方には白帆の影も隱見する。强い日光に波頭眩ゆくきら〳〵と光つて、波は靜かに寄せて來ては突

出た岩鼻に當つて、さつと珠を走らす。海水帽が彼方にも此方にも波の上に浮んで、こつちの岩蔭に二三人固まつて居ると、水から上つて來る者、飛込む者、歸つて行くのもあれば又燒けた砂に潛り込む人など……

お孃樣お藥と呼ばれて、ふと昏睡から覺め目を明けて見ると、何時の間にか電燈が點いて身は磯ならぬ十疊の間に。今見たまぼろしは跡なく消えた。横向きに成らうとすると頭がぐら〳〵として割れ相に痛い。オブラートに包んだ粉藥を漸つとの思で飲終ると、氷嚢は又すぐ頭に載せられた。

丁度別荘へ避暑に立たうと云ふ前日からゆくりなく發熱して、こゝに二日目、何ともなければ今頃はと、はがゆさ殘念さにそゞろ涙ぐまれる。思へばあの晩椽に端居の傍近く、魂のやうに飛んで來た螢を、螢と云つて捕へようとした折、袖を飜へした凉風の、常ならば快よかるべき其風が厭に身に泌みて冷たく、丸で厭な夢から覺めたやうな何となく云ふに云はれぬ不快さを覺えた其時、ふと病氣に成りはせぬかと妙な思が迸つたが、噫あれが俗に虫が知らすと云ふ物であつたらうか。目を閉ぢた儘聯想して居ると、あゝ又熱が上つて來たらしい。枕に預けた頭が自然に浮く、枕元に人の氣はひがするが誰だか知らぬ。熱い、苦しい、切ない恰ど身躰が蒸される樣だ。頭痛は斷えず仕て鎚で叩かれると云はうか、錐で揉まれると云はうか、今にも裂けて了ひさう。

死、冷たい死、ふと妙な氣がしたので手を出して電燈に透して見た、指先迄が顫へて居る。凝乎と見ると指先美しう透けて通ふ血潮の色は鮮かであつた、大丈夫と思ふと吻として目を瞑つた。

何所か遠くで微妙な樂の音が響いて來る。と身はいつしかに銀敷いたやうな月の眞砂路を逍遙うて居る。寄せ來る波は岸に白く、家や松の影や皆朧に黑い。靜かな磯に鷗一つ飛ばで月の光のみ只冴えにさえ……樂の音は殷々遠く幽に〳〵……あゝ濤の音……。

（評）何となう心細く恐ろしく文中の厭な風に讀む者も脈るゝ心地する文。

地

○舞鶴の朝

舞鶴　若溪

四時頃であつたらうか、書生下駄を突つかけて海岸へ出た。霧の深い舟！海は只濛々として四方の山は頭だけ出したものもあり裾だけ見せたものもある、雪朝の淡墨書を見る樣、中には昨夜の山の全く消え失せたの

い、もある。霧の中へ消える舟、霧の中より出づる舟、霧に呑まれる人霧に吐き出される人、夢の樣な景色だ、軍艦は薄き紺青色に其姿を顯し艦首は稍明に見える中にも菊花の金章と赤色の浮標とは微かな朝日の光に輝いて居る、水彩畫にしたら「海國の晨」ともいふ樣な題には御誂への景色！。

と見ると艦はゆる／＼烟を吐き出した、三本煙筒の一ッから。之でも沖は風があるか、烟は左に靡いて後檣の帆桁を葬つていつか霧と代つて終ふ。あゝ其の海、其の船に鷗を友に暮す人はさぞや樂しからうと思はれるが、でも海軍の人々にきけば「フヮはつまらぬ退窟だ」との御返事はて無趣味な御方ばかり。「ポー」と職工に今日の仕事を命ずる樣な汽笛がなる。海軍工厰のであらう。毎朝朝日を産む、恰度朝日の御母サンの樣な青い美しい優しい姿の山は今朝は白衣を纒うて、朝日にも同じ白い産着を着せてある。日はまるで山吹色の圓板そつくり。神の惠に浴する此青野は美花をかざし



讀者（選外）　安藝　石井千代子

感謝の涙を捧げてる。（人は此の涙を露とやら呼ぶ）其の中を百姓躰の男がはだか馬を引いて來た。馬はさも嬉しさうに露砕く足並さへもはづんで居る。やがて砂の汀へ來ると長い髮を打振りながら、足元に白浪の花咲かせて、飼主に先立ち、海の中へ……が主人が洗つて與れる間はヂットして居る。洗ひ終ると百姓は手を淸めて拍手高く、霧深き朝日を拜した日は此の眞底、心からの信仰を嘉してか光を增した。

（評）或は海或は艦或は陸或は百姓或は廣く或は狹く縱横自在に描きたる筆力驚くべし。

（人）

○女工日記

横濱市南太田町一六九八　長谷川花子

四日、朝から頭痛がします、十時頃器械の轟々する音で、益々烈しくなります、て側の小林松子樣に「お暇を戴かうと思ふのですが、如何したら良いでせう？」と問ひますと常々親切な松子樣は「其れはいけないのヨ、妾が言てあげませう」と言て立たうとしますと、意地の惡い監

督が見て「森樣と小林樣、話しをしてはいけません、規定の通り給料を引きますヨ」妾は頭から水をかけられた樣に、ヒヤリとする、それで頭痛が少し直る。妾は松子樣が、氣の毒でなりませんから、晝の休に監督の處へ行き、松子樣をゆるして下さいと、再三賴みましたが、如何してもきゝません。晝過ぎては、何ですかもう人間が嫌やになつた樣な氣がして、少しも早く亡つた父樣の後を、追ひたい樣な氣がします。

五日、何時もの樣に、早く起きて炊事をします、母樣は大分心地が良いと仰しやつて、珍く御飯を召し食がる。妾は朝飯後「自分は可憐の弟が、姉さん〱と自分を慕てくれるので、惡らしい監督の居る、嫌やな會社へも、弟の爲に行くのである」等とつまらない事を思て、知らず弟を抱き締め、彼の愛らしい、林檎の樣な頰に、强くキッスしたのです。二時頃例の監督が、何時に似ず、笑ひ顏で「一寸」と妾を、事務長の前へ呼びます、事務長は妾に「明日から貴婦は、事務の方をやつて下さい」と言つて、昇給の辭令をくれます、私は夢ではないかと思ひましたが、實際です。松子樣も妾と同じになります、其時から監督が急に牧師の樣な威がします。歸宅しますと、母も弟も非常に、喜んでくれます。夜、弟の着物を、縫て後女子文壇を讀む。

（評）喜の次には憂來り、憂の次には喜來る。世の態二日間の日記にも見ゆ。

秀逸

〇夕涼　　本郷　撫子

草葉もしぼまんばかりに照りはたゝく日盛りの暑さも一しきりの夕立にあとなく洗ひ流されて一輪の涼しき月は今しも山の端よりさし登りぬ月と共に宿りを出て繁りあふ夏草の露ふみわけつゝそこはかとなくそゞろあるきするほどにいつしか由井が濱邊にいでぬながめやる海づら遠く漁火のあまた見ゆるは夜すがら海士の釣するにやあらん光明寺のあたりかすかに琴の音の聞こゆるなどえもいはれず砂のあなたより夜目にはそれと定かならねどこのあたりに暑さをさくる都人にやあらん老いたる翁のいやしからぬが七八ッばかりの稚兒二人を引具してこなたざまに出で來りぬ學校にて習ひたりけん電車唱歌をふしおもしろく稚子らのうたふに我も思はず近よりて同じ方に歩みつゝあやしげなる聲してうたひ合すも物狂ほしくをかしかくしつゝ晝の暑さを忘るるほどに夏の夜の更けやすくはや月は稻村が崎の松にかくれて長谷寺の鐘の音岸うつ波にしら

べを添へていと物淋しかへり見ればさきの人々はいつしか歸りてかげだにもなし吾もすゞ風にたもとをはらはせて宿りに歸りぬ。

（評）新奇なる節あるにあらねどすべての調子優にやさしくなだらかなるが嬉しくて。

○樂しき家庭　常陸　百合子

庭の若葉は清い美くしい月に照らされてきら〳〵光つて居る折々訪れる風は實に凉しくよい心持で遠近には蛙の鳴聲が聞える東京とは云ふ物の靜かな事と云つたらまるで都遠く離れた田舍のやう床の間の薄暗い方におかれた蚊遣りは盛んに白い煙を出してゐるお父樣とお母樣とは座敷の端近に向ひ合ひてさま〴〵の浮世話をしていらつしやる兄樣は椽側で手風琴を鳴らしてお出になり弟は燈の下で本を見てゐる妾はお父樣のお肩をもみ乍ら面白い浮世話に耳を傾けて「有がたうもういゝよあゝさつぱりした」とお父樣の御言葉に手を止めて椽側へ出ると螢が一ッ燈籠の下の笹の所に光る「あら螢が」と云へば「姉樣どこに僕が捕へてやらう」と弟は本を投げ出してすぐ庭へ下りた「孝一捕れるかな螢にや羽があるから覺束ない」とおからかいになるはお父樣「およしよ罪ぢやないか可愛想に」と仰せらるゝはお母樣兄樣は手風琴の手をやすめて笑うて見てお出になる弟はやがて手を延はして捕うとするに螢はふわり〳〵飛んで行く「それ見た事か矢張り駄目だらう」とお父樣はお笑ひなさる弟はどこ迄もと追ひ掛けて行つたが遂に御隣へ行て仕舞つたお父樣や兄樣にからかはれるので弟は口惜しがつて居る折しも上り列車が通る音通り過ぎると又元のしづかに返つて兄樣は庭へ下りられた妾は椽に坐つて空を見上ぐると只一輪の澄んだ月が恰も微笑んで此の樂しい家庭を見守つて居るかのやう。

（評）平和なる家庭は夏なほ凉水の如し

○初秋の眺め　高尾　金子楓蔭女

この朝、日の昇るに先ちて野の外に坐ろ歩きす。忽ち吹き來る一陣の風、美しき露の玉もてる芋の葉はそを落さじと吹かざることを願ふてにや、頻りと首打ちふるなりけり。さるを憎くや、またも吹きくる一陣の風、露は悉く落ちにけり。あな心なの風かなと、過ぎ行く方を眺むれば、早やも彼方の山の麓の萱、こは又手招ぎ初めしと見る〳〵山に上り行きて何れへか過ぎぬ。顧みれば、芋の葉は何れも首うなだれて靜まりたり。

折しもいなゝく馬の聲、食をや呼ぶなるべし。さる程に家々より朝餉の煙の立ち昇り、日もやうく のぼりければ、桔梗女郎花など手折りて歩み出づれば、黄金となびく稲の間を、袷着たる愛らしき幼な子の、祖母に背負はれ來りしが、鳥居よりは背をおろされ赤きへこ帯打ちふりつゝやがて茂みにかくれぬ。今は石磴をや上りなやめるなるべし。

あゝ吾が小さき村は初秋の眺めみちぬ。さてもうれしや、秋のあはれを外にして、千町田に稲穂刈干す時も近よりにけり、近よりにけり！。

（評）風の渡る様大に興あり。

○松原

西参河　棲子女史

幾度か路に迷うて、漸くに探り當てた小名の社頭、松葉を一所に手の届くやうな井戸の水を、枝にかけてある刎釣瓶で汲み上げて、手を清めて伏し拜み、板敷に額髪を押し當てたまゝ、暫考へて居たが、思はず時を過した爲、頭を上げたらもう黄昏の色は、靄と四邊に迫つて居た。

はつとして引き返すと、早穂に出でた薄の中を南へ二町ばかり、入海をめぐつた一面の小松原で、濃青のしげみに被はれた瑞枝曲枝の枝下り松、根上り松、其の間を縫ふやうに蜿つた小路の先は、緑に染めた白い眞砂の濱に消えて仕舞ふ。

黄昏の色は遠く磯を包んだ、名殘惜しげに暫西に彷徨つた微紅も次第に消え失せて、瑠璃色の大空には、棉を投げたやうな一抹の白雲が流れて居る、と灰色の薄絹に包まれたやうな、淡墨の繪に透したやうな、夢とも現とも分らぬ幻の境は、それよりそれにと擴がり行くので、老松の黒ずんだ幹の間を洩れて、腹白く脊黒き浪が極めて物憂げな様で、のたりくと磯を打つが見える、大方海も一日の活動に疲れたので、之から夜の安息に入らふとするのであらう。藻の香を包んだ潮風もいつか止んだ。

松が次第に丈低くなつて、葉は葉と摺れ、小枝と小枝とはさし交して、小路が梢に狹められて行く、其所の根方に埃をあびた晝顔の花が寂しう匂うて、源氏香のやうな縞目の痕が、筋細く、木立幾重をめぐつて、見えずなつて行く、誰の業かと佇んだが人氣もない、其のまゝ濱に抜けてつと松原を出離れると、目くら縞の筒袖に、紅い襷を帯に代へて締めたが、束ね切れぬ黒髪を脊に亂して、白手拭に頭をつゝんだ、色の淺黒い漁師の娘らしいのが、小走りにすり抜けた、はつとして顧眄ると、松原をめぐつた小徑へ紛れ込むで、風

も死んだ、浪も死んだ、海は宛ら惡魔の手ずさびに『若い死相』を描いて、其れを彩る紺碧がこれぞと許り、凝結せる人の脂を湛へたかのやうに靜まつて汀には儚い泡沫が、胡粉を溶た如く漂うて居る。靜寂なる境！只眞砂に泌み入るやうな下駄の音のみが心靈でも刻みつくるかのやう胸に應へた。

（評）才氣ある筆。

○火事　和泉　島田須受子

歌がるた會の人々も一人去り二人去り果ては一同が辭し去つたので席をたゝみ父母上におあいさつを申し上げ床をのべ妹の春さんと共に寢についたのは午後拾一時すぎで世は早や死よりも靜かに眠り、四隣寂として人聲なく、只犬の遠吠ものかなしく聽え、ピユーピユーと吹きすさむ風は容赦もなく窓の戶ぼそを打つのみである。

今日の會の面白かりし事など思ひつゞけ行く中宵の疲れにて、いつしかうつ〳〵と眠りしと思ふまもなく、けたゝましき響に驚き眼をさませば、父上は非常用の灯燈ひつさげ、あわたゞしくてなたへ來給ふに何事やらんと驚き起き上れば父上は『靜枝早く春を連れ裏に出よ二番町が火事ぢや……』との玉ふにエッと計り驚きのあまり言葉も出でず、かくてあるにあらねば、急ぎ『春ちやん〳〵火事ですよ火事ですよ』と、ゆり起せば、ワッとなき出し『姉さん火事どこですの、お母ちやんは』と、あわてゝ奥にかけ込まんとするに『春さん氣をたしかにお持ち、さあこちらへお越し』と手をとりて裏より地つゞきの常明寺の境内に至れば早や祖母上母様の居たまふに、まづお無事で遁れ出で玉ひしかと、うれし涙とどめもめへず。

火事はと見れば、二番町のあたりは早や深紅のほむらにておほはれ烈々ともえ上り、こゝまでは數町へだゝれど何しろ烈風砂を巻く有様なれば、火の子のとび來る事雨か霰の如く、警鐘の力のかぎり亂打せらるゝ中に「火の子に氣をつけよ火の子に氣をつけよ」といふ聲、手に取る如く、さわぎどよむ聲天地も破れん計り。火は次第〳〵に近より棟木のドドッと崩れ落ちる音、グワラ〳〵と瓦のすべり落つる音等が、手に



靜なる湖（選外）　小樽　岩谷綠子

とるやうに聞える「ソレ火の子が横町へとんだ」といふ聲がするかと思へば、一臺の蒸氣ポンプ風を切つて走り去つた。

ア丶もう一町先きの旅館陽明館に火がもえうつり高壯の建物が恰も大なる火柱の如くもえ上つて居る。

かくては全市の灰滅せんも遠からじと、おそれ戰き、齒の根も合はず、一時も早く火の消えん事を神佛に祈り居りしが、いつとなく風もやゝ衰へ火も下火となつたかと思ふと警鐘も漸く〳〵まどほになり、果ては一ツ二ツ終に午前三時頃に至り全くなり止んで火もすつかり消えてしまつた、ア丶實に我が家は危き所でこの祝融の禍をのがれたのである。

而し昨日まで全盛を極めし二番町はあはれ黑土と化し去り、親を求むる子の聲、子を呼ぶ母の聲この寒空の朝かしこゝにきこえ得もいへぬかなしい感がするのである。」

（評）かゝる文は兎角形容誇大になりて却りて趣味を減ずるものなるにこの文は簡明にして要絶なり。

○鮫が浦蕪島　八戸　三浦いと子

茲は陸奥八戸町を距る東北二里絶景近邦に名たゝる蕪島のある鮫が浦一帶の海岸にして左手の砂濱には陸揚船二ツ三ツ右手は打續く磯岩にして低き處に釣を垂るる翁あれば高き處に獲物を臨んで海士の隙を狙ふ鷹あり淫佳と聽く洞屈を控へて海に面せる斷巖絶壁もある眺望明媚なる蕪島は一葦帶水を隔てゝ巨鯨の如く浮き現はれ無數の鷗右に左に飛交ふ有樣蒔繪摸樣にも似てをかし。

干潮なれば淺瀨と成るが上に無數の暗礁立現はれ、昆布、若布、松藻、布海苔、幾多の海草は是等暗礁の髮の如く蠶の如く現はれ殊に蕪島の麓にはふさ〳〵として浪打寄する磯岩に漂ひつゝ、妾は蛤を拾うて岩根に辿り海栗を探がして此所に到り見れば水深くして鷗の魚介を漁る處猶根方の無盡藏なるを誇りがほである。

眼を轉ずれば渺茫たる涯しもあらぬ海原に漁り船の眞帆片帆點々たる遙の沖に在て猶浮島の如く朦朧として烟波に織出す一丘は亞米利加に非ず北海道に非ず燈臺に暗礁を示す尻矢崎の突角であるが僅かに幾層の風致を添へてゐる。

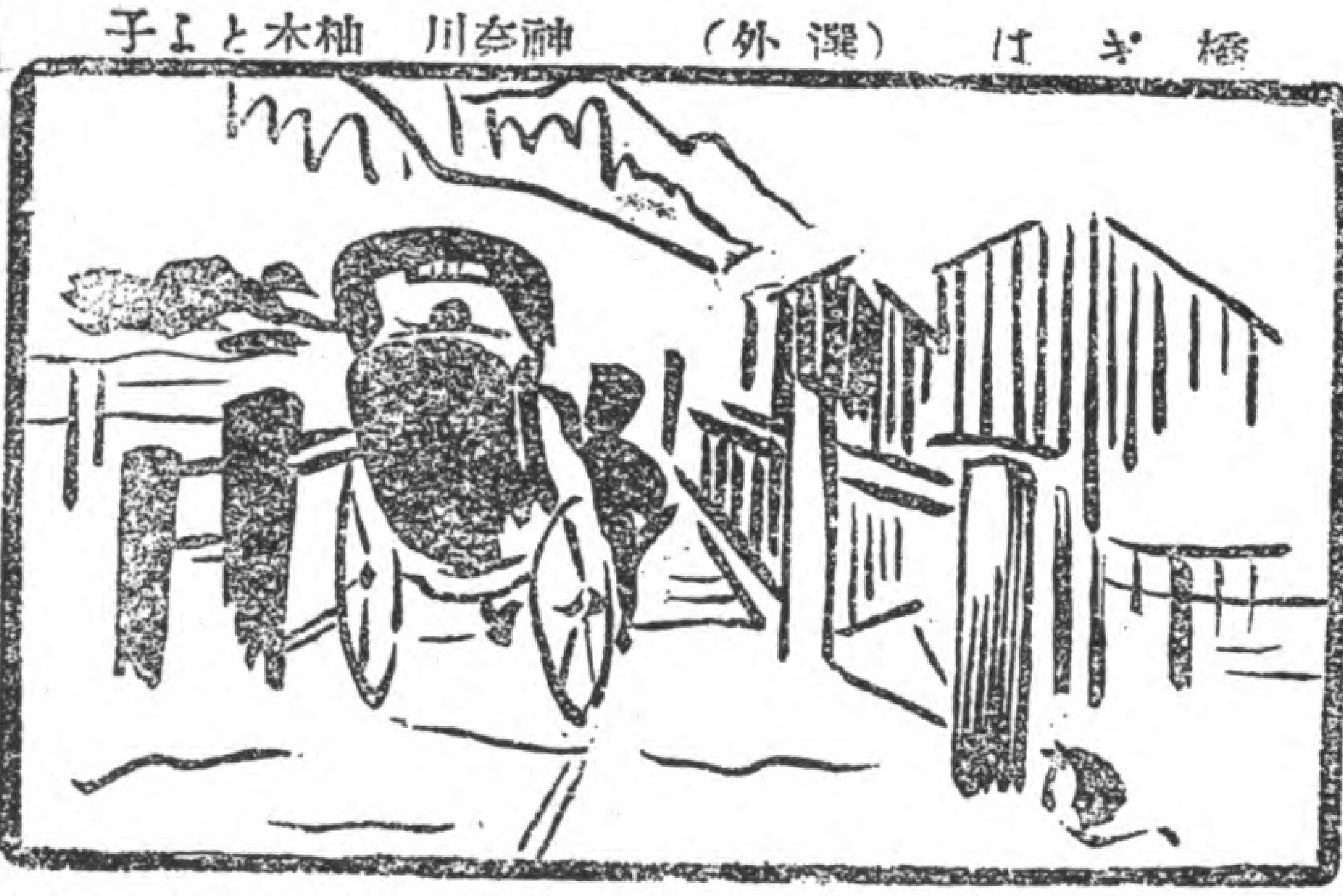
顧て鮫浦三百戸の小市街石を疊んで礎を築き海に瀕して建る一と構へ、汐干狩、納涼、鯖釣、雪見、と四季の眺景に石田亭の樓上を賑はすものは此蕪島の風景である、島の中央樹木の鬱蒼たる隙間より縱に辨天堂の石階を狹んでたてる赤鳥居は時ならぬ花と成て隱見し菜花の黃色なるは巖壁に淡濃を競ふあたり一層の奇觀をなしてゐる。

噫四顧の風景に眺め飽かぬ蕪島の絶景かな、花の都はいざ知らず春雨のそぼ降る晨に蛤の吹く蜃氣樓と謂ふは此奇觀ではあるまいか莊子の所謂無我有郷とは此の界隈ではあるまいか。

(評) 文にたるみなし。

◎夜の逍遥　赤阪　森ふさ子

橋を境に右と左に繋くとびかふ螢を眺めて其影追はんもうるさくゆるき流れを逆上りつゝあしの繁みに隠るゝ淺き水にぬらせし衣の裾もやう／＼かわきける頃螢火も次第にまばらとなれる水上近う來りぬ、此間何を思ひつゝたどつて來たのであらう？　小暗き別莊の縁で月あかりにすかせし畵中の景！　げに物淋しき夕ぐれの湖上に岸近うたゞよへる一葉の小舟、そが中に横はれる美しき人の姿を見たる時あゝ片時も忘れがたき姉上にと思へば身のうち俄に寒うなりて覺えずさまよひ出し川添の道、我はふと立ち止まりて胸に手を當てぬ、人の筆に成りしものとは思へぬ寂しき彼の景、オヽ、其物凄き一葉の畵は今我が懐に、はつと氣づけば俄に足すくみて覺えず來し方振り返れば音もなくてし


橋ぎは（選外）　神奈川　柚木とよ子

きりに暗を縫ふ螢のみ縦横に亂れて人影もなし、急に肌に粟するを覺えて小走りに走りて知らず知らず我家の裏手なる古池の汀に立ちぬ別莊には早や燈點じて其影鏡の如き水面に宿りて汀の松の倒に立てるが見える、あゝ明日は思出多き姉上が三回忌！と考ふれば又も身内の氷れる如く覺えて我知らず再び胸をかゝへぬ、花の如き少女のたふれ伏せる舟を浮べたる湖が周圍の其景によくも似通ひたる此池上のさま！と見れば姉上が沈み給へる淵も思ひ浮びて行くも物凄くかへるも恐しく果ては静かに眼をつぶりぬ、逝きませし母上をしたひて夜半の小路に姉上を泣せし我此深き情けに報ゆるはいつの日ならむと思ひつゞけし事もまた今は効なくなりぬ、母上のあと追ひて辛き浮世をのがれ給ひし姉上、今は優しき母上のみもとに侍り給ふらん、折しも彼方の暗の中より吠え出てし夜風は、老松古杉の梢を渡り來て蘆の葉の亂るゝと見れば玻璃板の如き水面は破れぬ。

(評) 深く凄く悲しき趣。

○涼夕

豐前　末廣初江

「生れ故郷を偲ぶの里に………」

あゝ又踊りが始まつた、何分田舎の事とて萬事舊暦なので從つてお盆も舊七月中旬である、それを唯一の樂しみとして居る十二三を頭に六つ七つ位な少女達まさかお盆の稽古といふにでもなからうが毎晩御飯後打ち集うてあどけない聲て歌ふのである。

いら〳〵とやくが如かりし夏の日も西の山に沈みはてて黄い赤い一塊の雲が其名殘りを見せて居るのみ、四面は薄暗く數歩先きの人顔さへ確かには見分けがつかぬ、空には一面星が蒔かれて、われても末に會ふといふ樣な天の河が其間を南北に横はつて居る。

風鈴の音が折々聞えるされどもまだ風はない、終日やかれた地からはぼや〳〵と暑き氣が立ちて、まだいやな蟬の聲もしさうてある。

「あゝ今晩も暑いな」、母と姉とがお仕舞して共に置き座に來てかくいはれたは餘程風も立ちて踊りの團扇の音も高くなり、何處の藪からかきり〳〵すの聲のした時であつた。

二三軒向ふの家も涼みに出て居るのであらう、復も蚊遣りの煙がいぶせく立ちのぼつて折り〳〵はばた〳〵と團扇の音もする、やがて其煙かとまがふばかり空が明るんだと見て居る内に次第に明るく次第に廣くなる

あゝ月の出るのかしらと仰げば星の數も餘程少くなつて、光りもいよ〳〵かすかである。

踊りの聲は一段高くなつた、月を喜ぶのであらう、西の空には最早や何の名殘りもない。

「お月さんが出た」、といきなり傍らの五つなる兒がさけんだ、見ると山の上に淺き皿をふせた位な黄白いものが見える、果して月なので、見て居る中に漸く大きくなる三分、四分、五分、月は山と接し、終には鼠にても片はしをかじられた餅の如きもの全く浮み出た、

今日は舊暦十八日

幼き天文學者の月の說明の後、寢に就きし頃は子供等の歌の聲も靜まつて居た。

（評）踊を以て文の段落をつけたる味ふべし。

○乙女朝顏

山城　石井ふみ子

葡萄棚の下蔭、築山のかたへ、琴の糸にもまして、細き、かよわき蔓のなよ〳〵と朝顏は、しほらしな花よ。肥えし葉の、いとゞ青々と大きく、のびやかなるは、日頃いたわりて、水や肥料をあたへたるしるしにや。

黄、赤、白、紫など數もいと多けれど、中にも、とりわけて、いつくしみし、名も美はしの乙女朝顏、葡萄

が棚の下蔭に、今日珍らしうも一つ咲きぬ。
日は昇りぬ。葡萄が棚はさへぎりぬ、花や如何に嬉しき思やすらむ。
風、ひとしきり吹きぬ、鉢の中なる乙女朝顏、風に搖られて、眞球の玉二ッ三ッ。
アレ、姉さん、此處にこんなに……。
何時の間にや來りけむ、可愛の光雄が垣根の際に！

＊＊＊＊

燒くが如き夏の眞晝のつよき日射を、覺束なき竹垣にて辛くも、しのび、一夜の露にて一日の暑さに堪へ、二十日の日旱に一滴の水も貰はで、いつも葉首の、うなだれて不運をかこちし同じ種なる乙女朝顏、垣根のまゝに、美はしの花、今日七八ッ。
父上も來給ひぬ、母上も來給ひぬ、兄上は書齋の窓明け給ふ。雜巾持ちし下女のお松もまた來りぬ。共に、美はしの花よとて、ほめそやすと限りなし。
朝風そよ〳〵と通ひぬ。露はら〳〵と聲なく落ちて花美はしく朝日は笑めり。
風また一としきり吹きぬ、ふりかへり見れば、鉢の朝顏、葉の重くて堪へ難きにや、風に搖られて根下より傾きつ、花は葉に蔽はれて見えずなりぬ。
思へよや、人の運命も、さならむを。

（評）さなきだに美しきを末段の意味に更に味を添へられたり。



秋の雨（選外）　東京　三瓶花郷

○飴屋　尾張　おけ子

川端の枝垂れ柳の涼しい木蔭に、いつもの通り飴屋さんが陣取つて、これから飴細工が始まり左樣と、言はぬ計りに例の大きな武力の喇叭をブゥ〳〵と吹き立てたので、近所中の子供らは耳を欹てた。
するとニ三ヶ月前から、此ブゥ〳〵と大分お馴染になつてゐた、幸坊、富ちやん、吉松の三人が、眞先きに驅け出して飴箱の前に並んで立つた。飴屋の小父樣は僅計りの飴を、鍋の中から摘み取つて日に燒けた赤黒い手で夫を練り始めた。箱の上には繪具を溶いた小さい汚ない小皿が二三枚と、穂先きの切れた筆が一本

蹲んでゐる。いつのまにか田舎者が四五人足を止めて少し口を開いた儘、ぼんやりと眺めてゐる。柳の枝はすらり〳〵と搖れて、電車は北に走つて行つた。

頓て白く練れた飴を麻柄に粘けて、いつが代にも磨いた事のなさ相な、黑い齒に夫を啣えて、嗅いだら臭さ相な呼吸を、一吹き吹くと、ぶッとふくれたので、あちらを伸し、こちらを引張り、切るやら曲るやら塗るやらして、見る〳〵犬、猫、狐、鳥、布袋、達磨など色々のものが作られて並べられると、田吾作らしい一人が『うまいもんだナ……』と獨り言の樣に賞めた時には、七つ八つの首が飴箱を圍んでゐた、可愛い六つ計りの小娘が『猫おくれ……』と一錢銅貨を一つ投げ出した。筋向ふの小僧が茶色の襦袢一枚で盛に水を撒いてゐる。人力車が五六臺がら〳〵〳〵と東へ。

隣りの子供は祖母樣をねだり始めた。富ちやんと吉松が見えなくなつたのも大方母親を、せびりに行つたのであらう。然し世の中には此飴屋の樣に、心の甘い人を見付けて僅少の金錢を卷き上げて、せち辛い浮世を面白可笑く暮す者も隨分ある。

（評）何ぞ觀察の緻密なる。あたりの景を所々に挿みたる大に働きたり。

○朝の一時間

韓國　平塚靜女

戀しい日本の土地を離れて異國に漂ふ身の友もなく唯友よりの消息が何より樂しいのである、もう七時過ぎたから今朝はきつと、戀しい重子さんやみさを子樣からの手紙を郵便配達夫が持て來て呉れるであらうなぞと、表の方に氣が入つてならぬ、待てども〳〵姿は見えぬので、堪へ兼ねて表へと出て見ると、朝の太陽は戀しい東の空から此小居留地の永登浦の町を斜に輝して居る。

東を向ひたり西を向ひたりして、待て居れど配達夫の姿は見えぬ。筋向ひの下宿屋から驛夫が三人急いで驛の方へと行つた、後から葱を背負うた韓人の野菜賣と五人連れの韓人とが見る影もない薄汚れた衣を着て何か大聲で語りながら西へと通り拔けた、東の日本町から京城の學校へ汽車で通つてゐる小學生が七八人學科の問答をしながら驛の方へと。異向ふの家から手に弁當を携た職人躰の男が、西の煉瓦製造所へと小走りして行つた。其後から十歳位の韓人の小供が泣きながら向ふの韓家へ走り込んだ、可愛さうにと、思つて居ると母親らしい婦人と前の子供とが門先まで出て何か指て居るので其方を見ると、東の角に米屋の坊ちやんが

立てゐた。

南から韓國婦人が幼子を抱いて北へと過ぎ去つた、それと行違ひに横町から配達夫が走り出て角の呉服屋へ何か投げ入れた、妾は新らしい勇氣でも得た樣な心地して其姿を見つめて居ると、後から「野菜は如何です」、と突然叫んだのは野菜を荷つた日本人配達夫に氣が入つて野菜處でないから斷つたら、又何卒と言置いて意勢よく東の方へと行て仕舞つた。

配達夫は追々近いて四五軒向ふの酒屋へも其の隣りへも何か投げ込んで置いて、一寸手紙の表を見て少し後戻りして戸毎に立てまご〳〵して居るので。妾への手紙ではないのかと問うて見ようと二足三足進むと、配達夫は何か心にうなづいて、足早に西の方へと走り去つた。

（評）面白く認めたり、配達夫が遂に通り過ぎたるが却て味あり、韓國特有の光景を今少し密に描かれてはいかに。

○野の朝

大阪　紅露女

心地よい春の朝、夜半の雨に濕つた野路を辿つて、妾は何處を的ともなしに逍遥ひ出た。すき透るやうな有明月は儚げに西の天、お寺の大榎に微笑むで、草裡にはジジーと鳴く蚯蚓の歌がさながらに耳の奥までも澄んでゆくかのやう……。

桃山中學校の前を通り過ぎると、突きあたりに「すぐ舍利寺」と彫た立石の半分埋つてゐる丁字形に路が交叉した所へ出た。さて何方へ行かうと考へたが猪飼野の美しい平野が眼に入るともう堪らなくなつてフラ〳〵と無意識に左手の方へ曲つて行た。



小川の畔（選外）　羽後　松田せい子

正面に聳えて勇しく南へ走てゐる葛城山脈は雨に洗はれて美しう、さゝべりはつきりと紫立つて菜の花の黄金と青麥の華やかな色とは斑に縞を織て、見るからに胸の透く樣に麓まで續いてゐる。遠くの寺から里の子起きよの生々した鐘の音が響いて來ると、まだ薄曇りのドンヨリとした重くるしい雲間を辷て金色の征矢眩しう雄々しい曙の男神が出御ましますと平安であつた此夜の世界は徐々として再び塵の巷へと戻つ來るのである南の方には黑々と立つた豐川稲荷の森眠たげで水蒸氣はそのあたりを罩め、小流は芹の根を深て[illegible]

深い方へと……。　避病院の前をダラ〳〵と下りると葦簀を立てかけた店を出した計りの茶店がある、馴染なので「お早う」と聲かけると竈の前に火吹竹を吹いてゐた主婦は此方向いて嫣然、默て又竹を吹く、大方朝餉の支度なんだらう。不意に鷄が高く鳴いた、裏へ廻ると鷄は今塒を出たばかりで夜雨にしたゝか濡れて櫻の花がいたいけに亂れてゐる邊りを、ク、、、、と鳴き乍ら餌を漁てゐる。

畦には畑へ急ぐ百姓が鍬をかたげて鼻唄でゆくと、其後ろから田舍乙女の凛々しう裝うたのが赤い襷に鎌もて二人、街道筋は牛車がだるさうにがたごと音して關西線の踏切を越えてゆく。と見ると太陽は益々登て空は藍碧、遙かの天王寺の塔は樹立の上に突き出て、世は遂に混沌たる塵の汚れの渦中に陷つて了たのである。かくて妾は朝の散歩の歸路に就いた。

（評）快き夢の如き春。

○日暮後

米澤　酒井うめ子

土用の牛の日から秋風が立つと云ふが本當に此頃の朝夕はめつ切涼しくなつた樣だ、早夕飯も終へたので吾は一人門に佇んだ、先頃の炎天にほしかつた涼しい夕風がさつと吹くと長い袂から膚にしみて思はず肩をすぼめる無造作に結んだ洗髪が房々と面にかゝるそれをかき上げながら空を仰げば日は今すでに沒した所で其殘光が邊の雲を輝して山の端は濃い紅それを上手にぼかして丁度頭の上は水色になつて居る、そして布切れの樣な浮雲は色樣々にたゞようて居る友に後れた夕鴉が五六羽さえ〴〵しく鳴きながら……今少し前迄はかしましく鳴き立てゝ居た蜩も木の繁みに夢を結んだであらう影も形も見えない、日はだん〴〵深く沈んで愛宕山は誰やらが書いた繪の樣に……やがては見えずなるのである。もう五六間そこらの人もはつきりは見えずなつた、子守であらう脊の子をゆすぶりながら守歌ならぬ唱歌歌つて居る……はるか向ふだみ聲立て流行節高々とうたつて行く、芳子さんの家からばつとランプの光がさしたと思ふとがら〳〵と雨戸閉める音やがてばつと廂の大きな影法師一つ筋向ふの花さんの家から蚊やりの白い烟がゆら〳〵風になびいて直ぐ闇みにまぎれて仕舞ふ、ざは〳〵と葉のすれ合ふ音がして蚊やりの家の涼臺にどつと笑ふ聲がした一本の夕酒に機嫌よき父がおどけであらうと吾も思はずほほ笑んだのである。

「姉さんもう御入りなさいよ!!!!」と云ふやさしい桃さんの聲にふと氣付ば先の子守も居ない遠くに提燈の光が一つチラ〳〵と……もう吾も木も草もやみにつゝまれてしまつたが桃子の御化裝した白い面とリボンはやみにまぎれて白う見える、そして此清い空には暮の明星たゞ一つピカリ〳〵とまたゝきせはしく……。

（評）寂しき景のうち言ふべからざる平和あり。

佐々木信綱先生選

和歌

天

陸前國本吉郡松岩村　尾形千代子

みだれふす白萩小徑露わけて
　孝女が墓をたづねけるかな

（評）いひさまは新らしからねど、やさしき作者の心ばへの思ひやられて。

地

岩代信夫郡平田第一校　春見子

羊呼ぶと口にせし笛ふと止めて
　思ひ出多き夕雲を見る

（評）牧童と笛と夕雲との配合しば〳〵見し事あるやうにおぼゆ。

人

靜岡縣藤枝町　石神喜惠子

とく〳〵と清水あふれて尼まさぬ
　ま晝靜けし白萩のてら

（評）清き歌。

秀逸

きび畑の黍の穂ひきくうなだれて
　小雨さびしき夕暮の道　羽州　うせつ戒生

（評）吾かつて詠みし歌に似たる心地すれどおそらくは暗合なるべし

鐘の音は遠くうすれて湯の宿の
　若葉すゞしき夕暮の雨　薩摩　東てつ子

なけよ君胸にひめたる憂きことの
　涙かれなばいたつきいえむ　德島　住友時子

舟に泣く子をすかしつゝ若草の
　露けき堤ひきのぼり行く　下谷　小林芳花

なき友と語りし夜半の夢さめて
　木枯すさぶくれたけの窓　信濃　里の子

山門をとざせるまゝに秋たけて
　萩の花散る里の大寺　茨城　酒葉花舟子

いくたびかさめむ御夢と思ひては　茨城　白萩

御顔のおほひそとりて見し、

○　群馬　飯塚美起子

くだり行く柴舟一つ見えずなりて
宇治の寺々夕鐘ひゞく

○　横濱　吉川英子

芒原月のみさえて戀塚の
いはれを聞かむ人だにもなき

○　伊豫　曉子

栟桃散る日なたの椽の蒔繪小櫛
髮洗ふ子の美はしきかな

○　神奈川　星戸花舟子

かり宮の警固の武士もしづまりて
篝にそゝぐ花ふゞきかな

○　大森　井月女史

琴の音のもれくる方に火影さして
秋海棠の花亂れ散る

○　上毛　眞砂壽子

よき人と歌かたりして初秋の
月をながむる白萩の窓

○　伊勢　三井陵子

羊おふ童の姿みえずなりぬ
霞こめたる菜の花の村

○　秋田　比良多慶子

み情に答へん詞我れ知らず
み膝に伏してたゞ泣きにけり

○　伊勢　大川早苗子

三年うき都の空にうらぶれの
われに泣けとや初秋の風

○　北総　富美江女史

鳥さしの翁去りたる垣根道
又歸り來て鳴く小鳥かな

○　羽後　前田久子

こけむせる石燈籠に灯して
友待ち居れば虫なきいでぬ

○　下野　江面眉葉子

ゆくりなく笛を手にして戸をいでぬ
小雨はれたる卯の花月夜

○　上毛　關口綠子

武夫のみはか淋しく萩ちりて
思ひて多し夕暮のくも

○　栃木　山口てい子

川添のすまゐ樂しき夏の日や
北する風に白帆生るゝ

○　武藏　琴子

静かなる神の夜あけて騒がしき
人の此世の朝はきにけり　千葉　田村たき子

○思ひわび放ちし鳩を見送りて
戸を去りあへぬ秋の夕ぐれ　京都　上羽琴子

○あやめ咲里の五月雨晴初めて
夕日の影に燕低く飛ぶ　越後　吉田たね子

○いと剛き夏の帝の吐息かも
夕の雲の眞紅色なる　麹町　紅子

○忘られし昔の戀の胸にありて
心惑はす薄月夜かな　上總　小川幸子

○栗落る秋の夕日に照されて
柩を送る古寺の道　群馬　飯塚幹子

○勵たてゝ望は遂げてかへる身を
笑みてむかへん母はゐまさぬ

○人住まぬ野寺の軒は傾きて時雨るゝ中を鐘低う這ふ　越前　清子



水車（選外）東京　芝野水江

○山深く遁れ住む身も都には夜な／＼わだす夢の浮橋　和歌山　早川りよう子

○清らけき迹の露もこぼれては同じ浮世の水となるらん　越後　金操年惠

○夕立の行きて涼しき月影に夕顔咲きて露の玉ちる　廣島　芳子

○泳ぎゝてしばし巌にたゝずめば千本松原笛の音ぞする　長崎　栗田壽賀子

○暮れて行く吉野の山のかけ茶屋にちぎれちぎれの雲を見る哉　八戸　名久井さえ子

○かくせどもいつかすぐ世の逢瀬川眷も紅葉のいろ染る顔　下谷　宇津木燕雨子

○大火事に軒端の古巣焼け果てゝこうもり迷ふ雨の夕ぐれ　紫　清女史

○涼みして共に手折りし此やなぎ過にし人のかたみとぞなる　山祝　岩本美月

○山吹に咲き込められし古池に人まち顔になく河鹿かな　紀伊　谷田峰子

○賤が家のまがきに咲きし夏菊を先づ君にとてたてまつるなれ　神戸　秋月百枝

○松かげに流るゝ水の音きけば千代をさゝやく心地こそすれ　羽後　TM女史

○いざさらばいく年月の後ならん唯身一つを守りませ君　雄谷野　芳子

○波の音たへず聞ゆる松影は涼しき風の港なりけり　尾之道　岩崎面黒女

埼玉　戸山うた子

和歌

降りつゞくあめに堀江の水ましてふかみにくゞる河骨の花
○　愛媛　瀬川きく

新墓は香の煙のたちこめてほのかに匂ふ姫百合の花
○　讃岐　政子

はらからの交り結ぶ君と我夜毎の夢は同じかるらん
○　萩町　小園敏子

螢は舞ひ蛙は歌ふ夏の夜の田の面の景色面白きかな
○　茨城　前原琴子

道の邊のひとむらすゝき夕ぐれはほのかに誰を招くなるらん
○　宇都宮　石井德子

昨日今日身にしみ初むる涼しさもまゝ三日月の初秋の空
○　伊豆　上原ゆき子

送られて別れをゝしむ青葉かげ夕立のふる磯のまつ原
○　福島　村井むら子

流れ行く身のしがらみとたのみてし小山のかげはあだとなりけり
○　越後　瀧澤みつ子

月清く花美くしく開く共君と別れて何かたのしき
○　周防　森田翠子

小川の波のまに／＼花ぞ散る水邊の童子輿に微笑む
○　日本橋　正子

かろき身に重きほまれをになひつゝ今日ぞ嬉しき春にあひけり
○　和泉　野中ゆき子

つれ／＼に出て行く濱の夕まぐれ女波男波に心ゆらるゝ
○　姫路　船戸ゆき子

つゝみ得ぬ涙は袖に雫して柩送りぬ秋の夕暮
○　韓國　奥田ゑい子

瑠璃琥珀紫金沈れなく築きます天のみはしに伽羅の香くんず
○　仙臺　鈴木とよ子

黄金それも名も何かせむ吾れはたゞ君によるべき女郎花かな
○　王子　熊谷千枝子

まちもあへず琴ひく襟もにくき哉まづかきれより月をすかせば
○　長門　式子女史

松が枝のゆるうゆるげばハンモクに眠る少女の團扇落けり
○　阿波　犬伏夏江

白玉をうつ響して秋雨は金沙銀沙の磯を降るかな
○　肥前　白萩

雨戸うつ夜牛のしぐれに夢やれてほかげかすかにコホロギのなく
○　白梅女

暮れて行く春の行末は知られども青葉の上に夏は來にけり
○　播磨　長谷川文子

野晒の風呂に湯浴す少女子の肌白う夕顔笑めり
○　篠山　石原糸子

夏の野の草葉のかげにうるはしく露にほゝゑむひめゆりの花
○　上野　宮田のぶ子

浪の間を聞く磯寺の宵鐘に亡き魂よりく夢も曳かれ來
○　美作　草加とみ子

月ふみて友をくりきつ里橋の柳のかげに遠砧きく
○　尾張　渡邊霞石子

何となく佐屋の夕日の淋しさに涙こぼれぬ昔し思ひて
○　秋田　比眞多慶子

故郷にかよふみ空の雲を見てたゞ／＼沈む我が思ひかな
○　羽後　けい子

そと抱きて雛の頬に口つけぬ笑み美しき雛の如き君
○　飛驒　高小夜子

汽車を降りてたどる松原道三里君在す里のたゞ急がるゝ
○　大阪　優子

程もなく歸りまさんと知りながらなほ忍ばれぬ我が涙かな
○　靜岡　福井道子

炎天の空にさまよふ雲晴れて榎にかゝる月の影かな
○　尾張　野田寒子

野の寺の畫いとしづか緋牡丹の咲ける籬やまゆの干しある
　　栃木　岸よし子

過ぎし松原とほる旅人の菅の小笠に夕日さすなり
○　横濱　秋野子
夕月の冴かになりて江の南笛の音するよ小琴乍らに
○　美濃　木村竹雨
我が戀を消しとつげし神の子よさめて眺めば空に星二つ
○　丹波　奥村まさ枝
物思ふ身はうつ蟬におとるらんなくに聲さへたてられもせず
○　栃木　小堀ゑき子
何となく涙そゞろの夕暮を風も薫りて高輪の里
○　野州　惠起
待つ宵はいつしか更けて月影の傾く空に雁なき渡る
○　栃木　池澤雪睦
さらぬだに秋は枕の露しげし心してなけ峰のさを鹿
○　常陸　大和田清子
只さへも淋しきものをこの山路君とわかれて鹿の聲聞く
○　横濱　白百合
涼しさに一人まよひて畔道をたどる足もと鈴虫のなく
○　淺野撫子
ほと〳〵と水鷄なくなり小山田の森の梢に月傾きて
○　越後　松風女史
山青く水清かな田舎路の村子集まる土橋の上に
○　上毛　汀すみれ
憂き事も樂しき事もよな〳〵の皆まぼろしの夢にぞありける
○　津田瀧子
なき人の昔思ひて今もなほそゞろにしのぶ秋の夕ぐれ
○　奈良　筵鉢女
すゝけたる觀音樣に紅椿活けて仰げば若やぎ給ふ
○　千葉　紫陽花桂女史
朝夕に開くも樂し玉章の中にこめたる朝顏の花
○　近江　宇野蓮女史
玉の實のなれりとばかり見ゆるかな雨のなごりの露の月かげ

○　神戸　小半子
降りつゞく梅雨の夜頃を母君が昔語りに興深きかな
○　靜岡　深谷岩子
屋根はすけ障子破れて月清く有明知らす廿日月かな
○　秋田　菫村女
聖堂にひとり頰笑む夕暮を啓示の星もきらめきそめて
○　滋賀　辰井文子
面やせは夏やせ故といつはりぬ年老いましゝ母の前にて
○　尾張　野咲菫子
澄む月に調べもいよゝさえにけり舟なる笛の主はたれぞも
○　名古屋　香久子
柿盗む烏見あてに礫うつ豎兒止めし秋の暮哉
○　赤坂　齋藤紫桂子
許しませ磯の小松の歌きゝて君が腕にとはにれむるを
○　下谷　西川千どり子
かげろふは右に左に繪日傘の子守鄙うた木立へ消ゆる
○　神田　佐藤柳子
懐しき師の君歸へる夕まぐれ朽ちにし杭に鶺鴒の鳴く
○　大阪　潮子
かへり來ては靑葉若葉香にみちて我が世幼きこや夢見空
○　芝區　加藤延子
病む窓に落行く月の影細く今宵を月に何に語りする
○　小石川　さゆり女
みわかれを言ひよる垣に手をとりてはげみ給へと友はやさしき
○　淺草　大沼きさ江
郭公月をかすめて過ぎりけり庭の芭蕉のさゝゆれの音
○　埼玉　和久井きん子
夏の夜の月に誘はれ川端に笛吹き居れば友も來にけり
○　石見　磯千島
かきくらし降り來る雪のこゝちして風のまに〳〵散る櫻かな
○　四谷　さゆり

風狂ひ雨ふりすさぶ沖の方に人のさけひす船やくたけし
大阪　みどりは

○さゝ川の草の葉がくれ照しつゝ水のまに／＼螢流るゝ
播磨　小林竹子

○出るいきは入るをもまたぬならひなり世のはかなきを思ひ知りぬる
香川　青葉女史

○美しき戀やかたれるましろ百合月にかざして江を下る舟
伊勢　西川鈴子

○歌低う楼の鈍音窓に洩れて雪にふけゆく川ぞひの村
秋田　佐藤ひさ子

○ふみ見ては何を怨ずる少女子のおくれ毛ゆらぐ月のおばしま
南葛飾　中里きん子

○橘の香ひは高し江戸川に涼しく宿る夏の夜の月
周防　桔梗子

○譽れある白衣の君の愛てましゝ朝顔咲きて思ひ出て多き
岩代　山野邊星子

○飛ぶ鳥の羽風に月のかげゆれて天のとはたる雁の一群
佐賀　江副梅千代

○別れにし後はかたみのうつしゑに君を忍ばむ朝な夕なに
南湖　なでしこ

○今日も又まちし音づれあらずして夕暮れさむく春の雨ふる
秋田　黒丸　花溪女史

○吾が思ひを瀧にしなして千だゝみの千曳の岩に打碎くかな
宇都宮　大岡春子

○里川に釣たるゝ翁顔やけてひげのみ白し夏の夕暮
上野　なみ子

○秋入ると長老かたる律院や柿のうれ實に夕日の落ちて
豊前　春塘NN生

○祈るべき神の御前にひざまづけばゆらぎに百合の香高きよ
大阪　高原千代子

○更わたる月の朧になるまゝにいとゞ昔の春ぞ悲しき
山口　田中美子

○月清き白百合かをる野邊に立ちて雄蕋の一つかみて見しかな
下野　梅月子

○顔に笑み心に泣きてわかれたる姉君こひし春の朧夜
福井　白崎菫子

○濁るともしばしのみなる山の井の水よ心の鏡とはせん
宇都宮　芳野春子

○夕ざれば植木に水をそゝぎつゝ月まつほどの風の涼しさ
伊豫　小崎延子

○あづまなる都もひなもあきはてぬあまつみくにゝ冬ごもりせん
東京　芝野水江女

○野邊ゆけば野菊はな咲き打まれく尾花が袖も薫る比かな
横濱　山口直子

○月の露硯にうけて見守れば詩想はたかし夏の夜ふけて
群馬　飯塚美起子

○古郷の母おもふてはなか／＼に今の我身もつらしとおもはず
武藏　躬子

○朝雲は雨ともならではれにけり山路一里たゞ雉子の聲
相模　楓子

○木菟のなく聲ばかりして霜枯の木立あらはに月いてにけり
京橋　若松翠蔭

○法燈の今宵ともらで蟲も鳴かで木魚の音のひゞきもれ來る
千葉　林よれ子

○新衣送りこされて母親のあつき情に身を思ふかな
千葉　林久米子

○やゝ癒えしわが姉君の御手とりて湯の宿あとに海を見にゆく
靜岡　堤坂みどり

○なつかしき友のまします東北の空なる雲ぞいとゞこひしき
伊豫　小崎のぶ子

○今はとは思ひきれどもたまのをなき母君のつなぎますにや
近江　宇野民子

○

むらがらすねぐらもとむる聲やみて夕ぐれつぐる山寺の鐘

○　神戸　田谷一枝

しづけさの限りなるらん里の子のかへりし野べに螢とぶ夜は

○　茨城　青柳愛子

病む母のくすしむかへにわれゆけば山又山にほとゝぎすなく

○　東京　とき子

心にもかゝろうき雲はれてけふまつに嬉しき月をみるかな

○　兵庫　賤文

星きらり〳〵の空に橋の如く雲横たはる天の川つら

○　佐賀　内田泣菫女史

心さへ晴れ行く空の涼しさに思はぬ夢を結びける哉

○　三重　西井久枝子

生まるれば死ぬるものとは知りながらなほ恨めしきこの病かな

○　伊勢　くえ子

室居辺の二見ヶ浦の夕まぐれ流るゝ人の唄も涼しき

○　上野　佐藤露子

草ぶきの屋根新らしく百合咲きて駒鳥飼へる家を訪いませ

○　上毛　殘月女

二つなき薬屋のかげに日は落ちて白きもくげの芝生へと降る

○　大坂　ひろ子

何の光榮何のほまれぞ世を捨てゝ花の二十をうらぶれに泣く

○　飛驒　あやめ子

遊瀬なき思ひを胸に秘めつゝ門にいづれば鐘の音細き

○　和泉　島田あや子

筆にやせん歌にや読まん夕立の空にかゝれる虹の浮き橋

○　愛知　熊谷つや

川ぎしの棚にわたる夕風に玉とみだれて螢とぶかな

○　新潟　吉田たれ子

三とせぶり露草しげき丘の辺の母の奥津城泣くをゆるせよ

○　播磨　藤谷いち子

さ夜更けて音も涙にしめるなりいづくの里の砧なるらん

○　福岡　古川春子

夕さればひるのあつさにのりかへて松風うれし志賀のうらぶれ

○　武藏　はなふれ子

ゆく春のこのごろやせて笛の音もいたう弱りぬうき懸のうた

○　宇都宮　石原星月

さやかなる月の出潮に風なぎて靜によする瀬戸の浦波

○　安房　らえ子

のり捨てし入江の舟に露おきてしばし宿かる夏のよの月

○　小樽　水仙子

あか星の消えなむとする有明の涼しき空に啼く時鳥

○　安房　智慧子

赤や白の蓮の花の咲き初めて小波かをる田面涼しき

○　安房　錦織千枝子

訪ふ人のあらむものをとはかられて咲き亂れける山吹の花

○　上毛、磯貝すえ

飢になく稚子はいつしか夢に入りて宵を待つ夜半を雁なき渡る

○　上毛　和田興志子

去年共に植にし人は世にまさずひとり物思ふ白萩の窓

○　白百合女史

葉の花の雨にぬれては流れよる皐月濁り江水鷄鳴くなり

○　上総　小川くに子

温泉の宿の窓による身に秋風のつれて吹きけり鹿の聲々

○　越後　花菫女

河鹿聽くと二十の人は川添の夕風かほる朱の欄干に

○　紀伊　阪本春子

思はずも小川堤に出でにけり月涼しさのそゞろあるきに

○　周防　姫意血女史

月そむく片山影の我部屋をなさけ照して飛ぶ螢哉

○　丹波　奥村まさ枝

白露を結びそめけん今日よりは庭のさかりの花と見まごふ

○　神奈川　あづさ

草はかれ鳬はうたはず冬枯の野邊にもにたるわが心かな
○　横濱　源勝子

柴の戸はかたう鎖されて人よべど人のこゑせず卯の花の宿
○　和泉　野中紫花

西むかひ東にむかひ北にむき南さしゆく大空の鳶
○　若狹　長谷川英尾

水細き筧の下のくもの巣に五月雨白くふりかゝりけり
○　牛込　谿子

野桔梗の色にも明けし初秋の淡路の島にうつ砧かな
○　羽後　前田久子

松風の音しづかにも小夜ふけて月すむにはにくひななくなり
○　愛知　熊谷つや

夕立のはれたるあとに月すみてこよひはいとゞ涼しかりけり
○　栃木　かく子

くさ〳〵の牡丹の花に置く露を繪の具の皿にうつしてしかな
○　北總　富岳女史

山鳩のふみこぼしたる紅葉に初しも白し神の朝庭
○　伊勢　菊田秋季子

冬枯の野にうすれ行く夕照雲のそれにも似たる我が運命はや
○　相州　波多野清

夏三月破れる迄着しかたびらをまだ捨て兼れる暑なりけり
○　兵庫　森井せい子

學ならず望みも失せて夢のごとうつら〳〵と日を送くるかな
○　安房　弘足靜子

夕日うけて豆の花白き山畑の柿の木高う鵙の啼く
○　千代子

ゆうだちや柴かる人を急がするかへれば晴れて露しろう見ゆ
○　白金里　のぶ子

何事も胸に秘めて文机にそと寄りそへば紅薔薇の散る
○　常陸　ふじ子

相摸の海波に沈みし吾妻はや碓氷の嶺にとはまくもうし
○　下野　新井孝子

さりげなう涙かくして別れにし宵の花月人なつかしき
○　芝　加藤のぶ子

花の香になほ去りがての野に立て夢見るらしの君美しき
○　小石川　木塚蘇美

ひく波にあなやと胸のおどる時寄りて縋りし御手はづかしき
○　能登　つる子

里道木の下陰に文を讀む放ちし牛は時を得顔に
○　長崎　彌富あさ子

弓張の頃より今を初音そと月のかなたにまつ郭公
○　備後　市岡露蓮

あか棚にあまた亂るゝ花見ればこゝも人あるいほとぞ思ふ
○　徳島　岡田くま子

なつかしき故郷近く見えそめて足の疲れも覺えざりけり
○　濱田　三明千鳥

其の刹那君を思ふて戸に倚ればいざよひの月にほとゝぎすなく
○　石見　ちくりん

美しきつゝじに吹くや凉風はまねく妾の優君にして
○　宇野入重子

風涼し青田三里人見えず夕日の影に燕むれとぶ
○　埼玉　小林園子

何ごとか語りやすらん月ふけし青葉の影に咲くおみなへし
○　相州　伊藤富久子

わかなかごそばに少女の居眠れるおもをかすめて蝶一つまふ
○　小石川　吉田斐子

美しき姫が御衣にそとふれて白萩散りぬ夕榮えの庭
○　周防　きちこう子

草小道桔梗姫百合こきまぜて持てる少女の姿美し
○　淡路　伊藤紫涙

風薫る山の御堂にいとし君と月を賞てつゝ歌語りする
○　澁谷　雅芳

吹く風にたれし蚊帳のゆら〳〵と月すむ夜半なやむ友みとる

○ 宮城 蕭風女

夢なれや君と別れの盃に片破れ月のやどる今宵は

○ 笑岡 白葉

山寺の紫陽花の花一つ落ちて遠くひゞきぬ馬子唄ふ聲

○ 広 子

月の桂手折りてきます友の君よ我も同じく人の子なるに

○ 安藝 政 子

湯上りの秋も輕き離れ家に月仰ぎつゝ詩集繙く

○ 京都 竹葉女史

歌人が調べきかんと立寄ればにくや垣根に白ばらの關

○ 磐城 すゞき ちとせ

母の文のせし机に木間もるかげもなづかしいざよひの月

○ 豐後 大野今子

牛車續づく小村に日は暮れて眞白き百合に雨細く降る

○ 西播 土井かつ子

老ひし尼ゆかりや深き古寺り旅のやどりの蟲の音かれぬ

○ 北越 武 子

別れにし君を忍びて泣く夜半を一しほ淋し夜鳥の聲

○ 上野 今井好月

打つ水の涼しき庭に月あびて妹と二人歌思ふかな

○ 上野 月光子

赤心のうつろかゞみの世にあらばうつしみまほし君の御心

○ 麻布 花子女史

鶏なきぬ夕日落ちたる村のくれ青田十里に風のなぎ行く

後姿（選外） 伊勢 平松直子



○ 仙 子

なたかれと心くだけどいつはりのかぎりしられぬ此世なりせば

○ 尾張 奥田久江子

馬の鈴遠く聞ゆる桃の村眞晝靜かに花散りみだる

○ 愛知 小川千代

草の葉に昨日も見えし露ながらけさは身にしむ秋ぞきにける

○ 磐城 鈴木紫子

白百合の花の香迷ふ搖籃の夢の行くへかうすあかりしぬ

○ 加賀 常盤子

憂き此身語る君なき我宿にもだえ増せとや月さえわたる

○ 群馬 新井菊子

君來ませ我が花園に父君の心づくしの萌蘂る窓

○ 上毛 新井よしの

荒れはてゝ僧なき寺の破れ芭蕉夕雨降りて蛙なく宵

○ 上毛 綠子女史

しと〳〵と逝秋寒く時雨して萩ちる窓に兄君想ふ

○ 鷺宮村 新井きち子

穗すゝきの亂しかみに夕雨の細降る夜にこほろぎのなく

○ 德島 笹川益子

色深き千草の花の數々に思ひみだるゝ露の玉蟲

○ 小倉 山田すみゑ子

たそがれの鐘のひゞきに思ふかな君の出てます八丈島

○ 土佐 中山翠美女

み言葉の胸にひゞきて昨夜一夜泣いて明かしぬみ心安すかれ

○ 淡路 伊東綾子

にはとりの餌あさる庭に日はたけてそよろ風なき小山田の里　埼玉　柿沼麗子

○

はつちぎり結びし晨ホーネムンいでたつ友の頬のほてりや　小倉　立花きをゑ子

○

去年の夏小舟浮かせて戀人と月にうたひし時は來にけり　柳河　清子

○

なつかしき君が姿のしのばるゝ思ひて多き今宵の月に　但馬　菫子

○

尺八の音はいとなだならかに澄み渡る月は涼しき河添小村　小石川　森本早苗

○

春暮れて思ひて多き夕まぐれ木槍はるかにほとゝぎすなく　下總　福田清子

○

夕まぐれ月を待間の高樓になみの音はこふ風の涼しさ　堺　白桃子

○

君故になやめる胸の此いたてあはれをきみはおぼしめさずや　紀伊　福本かをる子

○

賤が家の朝食のけむり立ちそめてほの〴〵東空は白み初めけり　熊本　入並喜美

○

夕立の降りて過ぎぬる夏山に遠近になく蟬の諸聲　芝　秋野露子

○

亡き父のおくつき詣へばひら〳〵と手向の花に飛ぶ小蝶かな　伯耆　太田益江

○

ほとゝぎすみ空に響く鐘の音に雲井の空におごそかに鳴く　愛知　宮田房子

○

鐘の音の一つ二つに日は落ちて霧ひく奥に小鳥啼くなり　羽前　佐藤芳子

○

伽羅衣かゝれとてしはあらなくになほぬれまさる今日の別れ路　上總　小川ふみ子

○

玉ならばともに送らむ君にやる文かくまどに鳴く虫の聲　駿河　村上節枝

○

鎌月も西の山にぞ暮れにけるされどわがせこ姿みえずや

○

海士の子よ舟をつながば心して岸の白萩あたにちらすな　廣島　石井千代

○

此夕べ音もなく影もなき大野に雲のさま〴〵を見る　上總　桐谷まさ子

○

八千草のさきけむ秋を猛へとて小野の枯葉に露はおくらむ　讃岐　林靜子

○

生けをへて花の香に醉ふそのをりに玉しだりするさゝがにの糸　和歌山　磯村靜子

○

云ひしらず悲しさ思ふ秋の宵蟲のなく音に涙ぐまるゝ　福井　積並保子

○

君去りて獨りさびしき濱の夜半磯打つ波のしらべかなしき　周防　春月

○

宵月に絆のひも小笠かざしつゝ小萩が岡を順禮の行く　美作　孤蘭

○

一葉ちり二葉こぼれてわが庵に母はかへらず秋の風來ぬ　神奈川　鈴木みれ子

○

碧ずみて水舞ふあたり魚はれて蜘蛛の巣ごとに白露やどる　小倉　君代

○

奈良の初夏大日輪のゆるめけど朝のみ佛片ねぶりして　福井　赤松たか子

○

江にのぞむ茅屋のあたり黄昏て百合の香低う夕風の吹く　常陸　酒葉つれ子

○

起き出てゝ船の行手をながむれば朝霧うすれ唐山ぞ見ゆ　清國　林正子

○

少女子の雲かきわけて若菜つむ袖より蘼ずはるのいろかは　山口　さい子

○

曾根崎や掛行燈の軒づたひむかし戀しや紙子の歌に　大阪　江川のぶ

○

進み行く世の有樣に後れじと學びの道にはげむ樂しさ　千葉　内藤みよし

○

徳島　坂野白露

はろ〳〵と踊り來れば我が園の緑葉茂るゝ月は隱らじ　長野　阿部八重子

○夕立のはれて凉しき川の邊に我れの思ひを月に語りぬ　深川　伊藤芳枝

○尾花さくやどのわたりに日は落ちて琴の音あはれほのかにきこゆ　岩代　玄葉花子

○難波江の入江の蘆に霜冴えて浦風寒き朝ぼらけかな　能登　北島久子

○一時雨流れた後に月冴えて松のぬれ葉に照り渡りけり　伊豆　加藤爲子

○芒野の末に御堂の遠見えて月かげ淡し鈴虫の聲　下總　鯨坂秀嶺女

○岩かれの淸水むすべば夏ながら氷るばかりの心地こそすれ　和歌山　津田久子

○あな懸ひし故鄕に似たる村ありて景色眺めつ村過ぎて行く　河内　萩子

○茂りあふ柳の梢打ちなびき風にしたがふ蟬のもろ聲　富山　露江

○汐干狩をとめの袖のながき日をうさわすれ貝拾ふうれしさ　きよ子

○眞帆片帆浮給さながら紫にまさご路暮るゝよき夕哉　南總　御園生かつら子

○苦寒きゝざはし近うゝまいせる猿飼の面に秋の日淺るゝ　栃木　菅谷とく子

○うつし植ゑ柴垣までもめぐらせし君はゐまさて閼の花さく　石狩　小川初子

○さらぬだに寂しき庵の秋の夜を父ましまさば哥惡みまさば　安房　高梨重子

○熱き日も厭はず蟬は木の枝に聲をかぎりに鳴き呼ぶなり　紀伊　谷田みれ子

すゞ蟲のなきつる方をながむればたまりの水に月ぞやどせり

○おりたちて笛吹く人の面白しろし落花まれなるおぼろ夜の庭　埼玉　むらさき

○小夜嵐賤屋の軒寒くすさびいさりび更けて雁鳴き渡る　岡山　殘月子

○すみわたる月をこゝろの鏡ともたのみて聞かむ人の世の道　大阪　越智滿壽美

○窓の戸をひらくかきれに見ゆるかな朝めすゞしき朝顏の花　備中　武綱勝子

○忍び音にしらぶる主は何處ぞととぼそによれば琴の音ぞ絕ゆ　周防　秋貞樂

○春の野は綠りにあけてむれ遊ぶ山羊の毛和う霞流れ來る　伊勢　蘆の舍女史

○磯寺の鐘の音遠く昏費れて離れ小島に雲流れよる　岩代　春見女史

○かくれては雲間を走る夕月の影のまに〳〵こほろぎのなく　名古屋　高橋富子

○母上が伊勢に詣でし物語り今宵ひまなく村雨ぞ降る　越後　登勢子

○小百合さく秋の夕べに風そよきゆらゝにゆらぐ眞玉白露　長野　豐田たかの子

○朝夕へながめさびしくなりぬればこゝろもそらにしめりはてぬる　東京　好子

○枯尾花荻の上葉を吹く風にほろ〳〵おつる櫨紅葉哉　紀伊　紫菫女史

○紅雲の潮にうつりて石垣のすゝきそよぎつ鷗むれとぶ　姫路　森田まさ子

○新道と舊道つゞく桑畑路かすめる富士を見てあかぬかな　新潟　波子

○夏姫の絹の小扇そめまさむ紅のこぼれか地に罌粟咲く　讃岐　齊藤女

○　越後　中村淑子

蘆枯れてみぎは淋しき野の川に人なし小舟ゆられゆらるゝ
○　福岡　大神濱子

花の頃惜しき秋を分ちたる戀しき君は今は何處に
○　長江尚子

情ある君はいまさず只一人春の眺めもいとぞ淋しき
○　神奈川　森きん子

かりがねのなきつる方を眺めては君のつかひとひとりほゝゑむ
○　牛込　阿部絹子

立のぼる蚊遣の烟りいとゞしく雲かと見しは遠の一村
○　美作　杉山ゑみ子

あづさ弓ひきてかへらぬとし月をあだにすごすな庭の撫子
○　失名

なる神はやはしのそらにとゞろきて夕立わたるからさきのまつ
○　大阪　都留子

虫干や金糸まばゆきふり袖におうなのおもは紅のさす
○　信濃　さとの子

入り日かげ月にかはりて里川の小浪にやどるさまのさやけさ
○　山口　藤田政子

麥刈りて馬に積み行く村人の歌に暮れ行く追分の道
○　鳥取　坂本朴樹子

母君の棺送りてかへりくる朧月夜を逍遙り來る
○　丹後　玉萩女史

小はぎちる月の小窓に琴かなで君まつよひの長くもある哉
○　越後　あさがほ

なつかしき君が御姿うつさんに習したゆたふ我が絵の筆や
○　鹿兒島　木原よれ子

湯浴はて涼しき小川にさまよへば水の小浪に千々の月影
○　長崎　彌富あさ子

朝な夕な淋しき秋を吹風のつれてしいなば嬉しからまし
○　安房　安西悌子

ひやゝかに草葉にかゝる露さめにすだく虫の音かすかなりけり
○　芝區　安室千代子

里の子が尾花の末をはらひつゝ馬ひきかへる夕月夜かな
○　京都　吉川淺枝

いく秋はさみしかりしよ灯をほそめ雨夜の雁をひとりきゝしか
○　芝區　岸本智惠子

あされする人の心をいましむるつゆを命の朝顔の花
○　京都　島本久惠

しろがねのさゞ波よする月の夜をかもの堤にきゆる笛の音
○　近江　西村悅子

たがすゞむふれにかあるらむあを簾かけわたしたる中ぞゆかしき
○　越後　すみれ子

茂りあふ青葉若葉に露見えていつか落つらん加茂の谷川
○　栃木　波多野さゞれ子

あらためし髪なぜて行く京の子の帷子すゞし萩の朝道
○　飛彈　十六夜

いざゝらばさらば別れん惜しけれど名残りはつきじ君さきくませ
○　三重　帆山靜子

君が文を得し夕べより何となく胸さわがしくなりにけるかな
○　姬路　船戸幽規子

久方の雲井ににほふ望の夜の月恥かしく歌あらぬかな
○　周防　芳子

緑冷やき苔の細道つくるあたり螢火ふけて縦踊しもどろ
○　淡路　あさひ

ながめては雲のゆき來に我が運命はかなむ窓の黄昏れて行く
○　石川　濱田芳子

秋の野の千草におけろ露の玉ひとつ〳〵に月ぞ宿れる
○　宮城　川村ゑな子

曇りなき鏡を見ても思ひ知れ心は人のとぐべきものをと
○　仙臺　飯塚たゑ子

霧低き緑大野の朝あけを流るゝごとく風の吹くかな
○　名古屋　原田寧子

たのみつる我が子は逝きぬいかにせん老のこの身はあゝいかにせん

○　秋田　高階てつ子

老たるも若きも田にぞむれたるはいま稲かりのさかりなるらむ

○　長野　田中みき子

れぶの花咲ける小川の小流れに小魚集めて遊びつる哉

○　西多摩　坂本貞子

暑さをも知らず田舎に只一人糸取る業の樂しかりけれ

○　静岡　杉山うめ子

夕風のそよぐ叢二つ三つ消えつ光りつ飛ぶ螢かな

○　陸中　若生なか子

琴の音の淋しくきこゆ夕ぐれに亡き母君のいとゞ忍ばる

○　芝　星みや乙女

あらひ髮清き十四のわが姿そのかげかへせさゝ川ながれ

○　備中　佐藤露子

楓紅き斜日山路さまよへば鹿の子吾れに物乞ふらしき

○　千葉　八木美惠子

朝起きて庭の朝顔眺めては徐ろ思ふは余が友の顔

○　山　茶花

なき母が面の寫を眺めつゝ昨日も今日も涙もて行く

○　品川　近野小枝子

美はしき晴衣求めていつの日か笑みます母のみ顔拜まむ

○　青山　高地秋子

しのぶ草しのぶばかりに音づれて秋と名乘りし萩の上風

○　日本橋　栗山紫柳子

小羊のせゝなぎ渡る影搖らゝ鈴の音涼し朝月夜かな

○　横濱　齋藤とし子

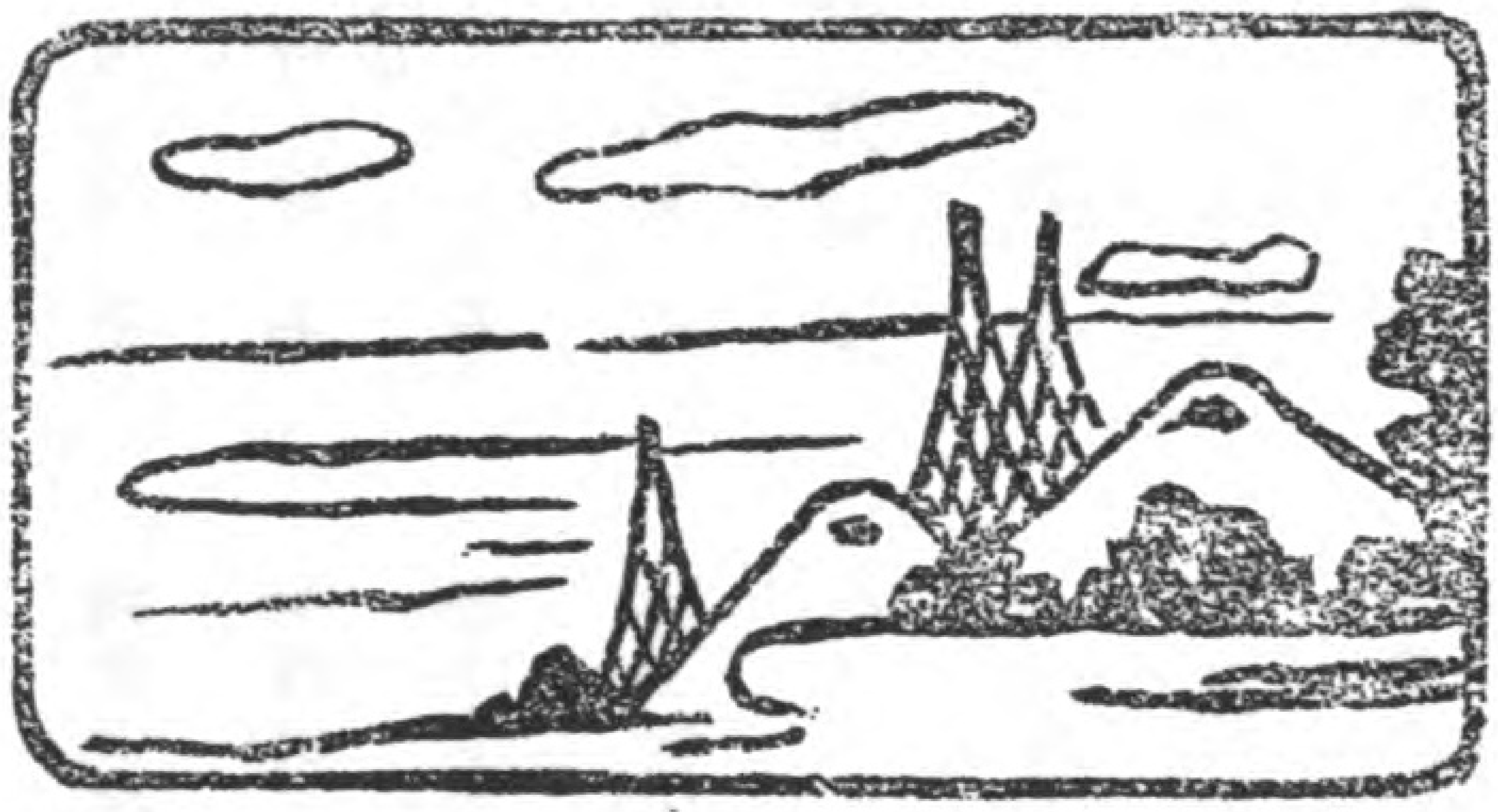
蝶と呼び花と御親のはぐゝめる過世思へば涙こぼるゝ

○　長野　山田くに子

行く春や琴の手とめてみす卷ておぼろ月夜に花の雪みる

○　備後　田邊雪枝

行く秋を我が家の古跡尋ぬれば尾花咲きみち鈴虫のなく



漁村（選外）　常陸　酒葉貞子

○　磐城　三部波子

都なる人に見せたや月出づる我が住む里の夏のけしきを

○　千住　宮崎ゆき

霞みより浮びていてしま白帆のかすみに消ゆる春の曙

○　豊前　末廣初江

笠しきて行脚の夢やまげからむ眞晝しづけき夏の森かげ

○　陸中　遠野すみれ

なつかしき友と別れてこゝ三とせ又何時の日に逢ふて語らむ

○　麴町　淺井千鳥

春の夜や月の宮居の詩の宴牛飼舍人おくれて越しぬ

○　羽後　渡部宮子

今日よりは秋になるみの纐染につかはしくもあらずなりなむ

○　備中　稻本千惠子

はる〲と旅立つ友の影消えて夕日淋しく秋風ぞ吹く

○　上總　白扇子

きり〲す聲もちぎれになくかごのなかのきうりもしぼれたりけり

○　龜井戸　菫子

狐鳴く聲ばかりして霜枯の嵯峨野の月に行く人もなし

○　青山　わかば

東の空に彩雲たゞよひて朝の大御子今あれましぬ

○　德島　住友時子

とやいはむかくやかゝんとたゆたひの卯の花小怨なくほとゝぎす

○　愛知　渡邊かせき女

雨細き萩垣添いて傘一つなに思ひてかほゝゑめる人

○　東京　詩樂女史

忘れよの君がみ言に夜すがらを宿世淋しと思ひぬ泣きぬ

○　姫路　三木喜代子

いかにせん杖と頼みし君逝きぬ誰をたよりに暮す憂身か

○逝きまし〻父君慕ふ夕まぐれとぼそに寄れば小雨そぼふる　姫路　三木君子

○夕ばへの色もいつしかうすらいておぼろに暮れし螢の一村　田子浦　山田清子

○鷓鴣の夜毋に連れられ野に行けば青田にうつる月のすゞしさ　常陸　武石繭子

○うつゝなき思ひを乘せて秋のゆく流れ淀まぬ野の別れ水　陸前　猪股きつ子

○肺を病む人物思ふ夕暮を糸瓜傳ふて秋の雨ふる　金澤　大地波子

○文机にちりこむ桐のひとひらに秘めし君が名そと書きて見し　岩代　岸野常子

○音信を絕えてせざりし故里の友に文やる秋の夕ぐれ　千葉　卯月だへ子

○すみわたる鹿の鳴音に出て見れば梢に高し有明の月　安房　金木ふみ子

○友仙の袖うつくしき妹が桔梗の窓にふみよむ朝　千葉　高梨美矢子

○萩桔梗尾花に送りむかへられ山路たどれば月さし登る　尾張　梶田愛子

○草も木もかれんばかりの夏の日にいとはて咲ける夕顔の花　備中　唐井とみ子

○いかなれば踏み迷ふらん世の中に只一すぢの人の道をば　伊勢　松本しげ子

○君とわれのさゝやく戀をや聞くならん見ませみ空の星のまたゝき　弘前　翠坡子

○君がみ歌いくたびとなく出しみて雖悔い泣く夜を雁の聲する　弘前　佐野てる子

○水の上にきらめき初めぬ夕月のながめ涼しき川つらの宿　大阪　花すみれ

○みどりこき山のあなたに日はおちて紅ふかく田の面てらしぬ　越路　白菊の露

○紫の牡丹の若葉吹く風に黄金色なる蝶たちにけり　富山　雪江

○松青き大磯小磯の濱づたひ雪の肌の都人哉　伊勢　伊藤織衣子

○戀ひ初めし少女が袖をひるがへすふりして吹きぬはつ秋の風　堺　竹叟文子

○秋草の花のいろ〳〵とりあつめはなれの窓に一と日給を習　越前　野坂まさを

○夕雲のうすれてきえし寂寥やもだえのはての君と相似る　佐渡　谷川桂月

○明け殘る星に嘶く駒の聲野末はる〴〵霜ましろなり　金澤　山田政子

○稚子髷の後姿よ似たり〳〵夢に忘れぬいとしわが妹　上總　關たけ子

○夕立ちの晴れてさやけく夏の月野の面は星のかゞやきにけり　高知　武市はん子

○ふと出し古きうつしゑ眺め入りて涙ぐまるゝ蟬時雨かな　東京　高柳みつ子

○乘る駒の足かきに露ぞみだれ散る嵯峨野の秋のあけ方の月　信濃　奈美子

○嶺の上に山鳩二つ飛ぶ見えて朝日靜に山はた昇　千葉　林よね子

○うたかたの消えてはうかみうかみては消ゆる運命のさてもはかなき　上毛　得子

○夕立や稻妻ひかる雷がなる共におそれて雨戸引きけり　磐城　鯨岡照月子

○人しれぬおもひにふける乙女子の胸とゞろかすいりあゐのかね　京都　山川すみれ

○夕立の過ぎ行く森の梢より名殘涼しき蟬のもろこゑ　富山　石割知賀子

○　茨城　馬場うたを
ひとさわり靜にもせよ風吹かば落つるばかりに崖の白百合
○　越後　山本あつ子
逝く春を惜みて泣ける天津女の涙と思ふ五月雨の降る
○　埼玉　中村紫香
たけ高き方や君にかおはすらむ白百合片手にほゝゑみませる
○　香川　合田まがれ
雨やみし空うちあふぐ夕ぐれをあはれ梧桐のつゆの音する
○　上總　一笠女史
卯の花や夕照雲にあこがるゝやさ姫を待つ夕野道哉
○　九段　よし子
金色の羽根ゆたかなる蝶一つ園の黄菊に安くねむれる
○　群馬　竹のふし
五月雨のはるゝも惜しき心地してなほをしまるゝ友の歸り路
○　尾道　樋野須賀子
ほゝ笑みのあやなく水に消えしより水は幾年秋流し行く
○　豐前　增田一子
我ために一枝手をれいかたしよ岸のかなたの山吹のはな
○　伊豫　星川千賀惠子
暮はてゝ濱路はるかにおぼろ夜の月のみふれに歌おもしろき
○　南總　綾子
愛猫のくびの鈴の音高く低く少女のそぶり忙しく見ゆ
○　三河　清華子
夕雨は大蛇に似たる音たてゝうすくらがりの街を過ぎりぬ
○　淺草　小野もと子
被衣せる姫紙燭して夜の雨にくづるゝ牡丹見る廊下哉
○　愛知　柳枝女史
寄藻香る磯の松原黄昏れて船うたしるき夕凪の海
○　下總　萩原花子
河添を螢狩りする夕まぐれそゞろ歩きの人笑くしき
○　兵庫　文子
掻き曇る迷の雲は吹き晴れて眞如の月の光りまばゆき
○　駿河　香畑春子
田の畔の木蔭に寢ぬる賤が子のいかに凉しき夢や見るらむ
○　薩摩　木原きくの子
あゝされど上京きます君に希望あり涙ふきませ吾も意氣の兒
○　群馬　吉田きみ子
越し方のさてゆくすゑのおもはれてゆふべの空をあふぎみしかな
○　鹿兒島　前田菊子
愛でまし、百合の盆栽今朝さけど都の兄に送るよしなき
○　常陸　青葉女史
馳せ行きて少し掬ひぬ布瀧の銀と亂れて白玉の散る
○　越中　清女
かきつばた池の清水のかげゆれて二ひら三ひら花瓣のちる
○　大阪　吉岡君子
世のうさもわすられはてゝ樂しきは雲雀なく野の遊なりけり
○　下總　新橋きみ子
時ならぬ花と見るなり磯ふちの柳に螢やどりけるかな
○　仙臺　孤蝶子
朝まだき茂る夏草分ゆけば姿優しくゆりの花さく
○　栃木　さすらひ女
夕立の晴れ間を急ぐ渡し船ひとまつほとも凉しかりけり
○　大阪　三千代
美しく咲きし朝顔に見入りけり書よむ事も忘れはてつゝ
○　徳島　阿部保嘉
櫻散る黄昏時や少き僧の行春惜み鐘つきにけり
○　赤坂　森ふさ子
行きくれておぼつかなくも踏み出さば萩の枝立ちて虫なきいでぬ
○　長野　田中みき子
時鳥なくや今宵もうら山に雨を一人の吾に淋しき
○　福岡　澁山きち子
我家は人里はなれし片田舍訪ふ人なきに梨の花散る

○　上総　小川園子
百合畑東に遠くつらなりて西は富士影見ゆる庭かな
○　品川　近野小枝子
沖遙か漁船の灯ゆらぎそめて月朧なり品川の海
○　志摩　小林敏江
ながし行く按摩の笛に夜はふけて產土の森に月澄み渡たる
○　石狩　小川初子
何となう亡きおもかげの偲ばれて夕べ寂しく牡丹くづれぬ
○　島根　卯花女
そゞろ歩く川ぞひ小道日は暮れて見えみ見えずみ螢飛ぶ哉
○　東京　宇津木蕭雨子
尋ね見る人もあるやと思ひてしちり殘りたる山櫻哉
○　麹町　藤紅
思ふ君別れてたどる川添の蘆の花ちりそゞろ冷たき
○　麹町　山下里子
帆に宿す月かげ消く夜は更けてさびしき中にくひなゝくなり
○　麹町　山の雲
母病みて醫師が許に通ふ子の面わやつれて夕日つめたき
○　播磨　吉田翠子
白き花の雫あつめて書く文に赤き心のあらはれにけり
○　横濱　千秋子
よべは野に虫の宿とし咲くものを今日は伏屋の床にやどれる
○　德島　紫濃子
赤き毛に角おそろしうふりたてゝ桑の實落ちし道走り行く
○　上総　翠葉女
別れてもまた逢ふことのあるものをなほ袖ぬらす今日の旅立
○　丹後　孤舟子
五月空歌をもふ夜にうたならず庭の青葉に雨しづかなり
○　上総　藤女
隈ちなき望の月夜になどてかくくらき草叢に虫のなくらん
○　兵庫　みずゑ女
雨に濡れて燕とまりぬ賤の女が根芹を洗ふ河岸の柳に
○　明石　みどり
百合の香のゆるう流るゝ野の晨よゆめに追はるゝうらわかき畫師
○　岐阜　山田はぎ子
嵐の神が此世うばひて去りぬかと胸さわがせて稲妻を見ぬ
○　下総　渡邊つれ子
旅人の迷ふ野原にわびしくも小雨そぼふる木曾の夕ぐれ
○　篠原はつ子
誰が爲に彩りなすか菫花うす紫の小蝶舞ひくる
○　下総　佐久間よし子
高樓の琴の音絶えて五月雨の空に聞ゆる夕ぐれの鐘
○　長谷川なつ子
覓てし深山の奥の友問へば萩の雫に袖はぬれにき
○　下総　渡邊みよ子
悔ゆるまし妾より強いて別れしを雲井に高く君座すとも
○　武田たき子
山遠ろ夕立霽れて山里の東の空に虹はかゝりぬ
○　下総　渡邊かつ子
河中を流るゝ花に慕ひよる小蝶見るにぞ思出多き
○　渡邊たか子
夏の日も只一色に暮れゆきてそよ〳〵蘆に水鳥の鳴く
○　小石川　明石光子
みくるまの音することになつかしき君かと思ひいてゝは見れど
○　福岡　濱中たか
旅僧の袖吹き流す秋風に尾花靡ぎぬ粟津野の原
○　遠江　中山ふじ子
早起の耳に果報かほとゝぎす啼く聲高し曉の空
○　谷山村　松元しづ子
らんかんに見送る舟の陰きえて海よりせまる夜の色かな
○　陸中　阿部富子
なき母に手向けんものと少女子が手折る秋に萩散かゝる

沼波瓊音先生選
文學士

抒情文

天 ○霞が關

麻布六本木町三　高島八重子

樂しい一日の業務を終へての歸へるさ、丁度傾むきかけた夕日が薄い光りを音樂堂の頂きに投げた頃でした轆々たる轟と共に二輛の御馬車が背後から大地を響かせて參りました。馭者の帽・御紋章、直にやんごとなき御方なる事を知りました。薄い浮き織の純白の御洋傘を斜に、御下げ髮を白のリボンで結ばせられ御揃のひわ地に御胸の邊り紅に織り出せる有織模樣の御召物後の御馬車には白髯の老翁恭しく侍りて。私は洋傘をつぼめて遙かに電車の線路をへだてゝ御挨拶を申上げました、噫此處に至つて私は何と申上げて好いか譯りませぬ、丁度其の時此方を御覽あらせられた常宮樣には直に御會釋を下された計りではムいませぬ、御存じあらせられなかつた周宮樣に御仰せ遊ばしたものと見え忝じけなくも宮樣には此方を態々向かせられて御姉宮樣よりも猶御丁寧なる御返禮を賜はりました。、其の瞬間私の胸の内は如何て有つたと思召しますか？丁度「肉彈」の著者、櫻井中尉が畏しこくも御前に於て樣々なる御下問に奉答し破格の光榮を擔つて其の兄君と共に感泣されたと言ふ、其の時の中尉が心地と同じで有りましたらう。御影の見えずなる迄御見送り申上げて私は唯、兩殿下の御上に幸あれかしと御祈り申上げました。

あゝ、田園生活！如何に樂しくありませう、けれど私は其れを羨みますまい、此の幸多き都――恐れ多くも宮樣から御丁寧なる御會釋を此の賤しき身に賜はるといふ――に愉快に樂しく幸福に安全に何日迄も、私の命のあらん限りは居りませう。今も今私は霞が關を歩いて居ります。何かなしにぞつとして、遙かに見上げた高輪の空、薄紺の樣な雲が、高く、廣くなびいて居ます。

（評）余中學生たりし時伊勢參宮の途上宇治橋の此方にて　有栖川熾仁親王殿下の御馬車に逢ひたり、余は歩を止めて敬禮したるに殿下は折から御口にし給ひし烟草をわざとはなして御答禮あらせられたりこの文を讀みてその折の感を思ひ起しぬ。

地 ○夏の曙

堺市大濱通四丁二八　竹臾文子

ある朝蓮の花の開くを見ようと思つて家を出たのは四時少し前であつたらう、まだ東の空は何處にも白みかかつたところなく、二十日あまりの月は淡暗い光を投げて、國の四方は淡茶色の霧に包まれて居る、雞がただ一聲鳴いたばかり、寂寞の氣は天地を罩めて、遠くに聞ゆる波の音さへ寂しさを增すばかりである。

池の畔に彳ずんで見渡すと、細長い池は向ふて左に曲つて白い花がほんのりと見える、近くのてさへどれが咲いて居るのやら苔やら容易く見分け難い。

暫らく夜の白む迄と石に腰かけた。月影はだん／＼暗くなるやう小さな星は長う尾を引いて流れた、嗚呼寂しい事、天地はまだ眠つて居るのであらうか。若しも自分に父なく母なく兄弟もなく友もなく否下界に人とてはなく、草の生ふるまゝにてゞづくの國を訪ねても千里の東も千里の西も、只廣寞たる野原で草は身よりも高くて、光りとては今の樣なうす暗い月と星の光り斗りであつたならば、自分は何うするだらう、能う活きて居るだらうか、寂しいからと花に語つても花は只默する斗り、月に思をのべても月は語らず、草も水も海も山も皆何の音もなく寂寞の中に突つ立つて：：嗚呼何うして自分はそんな寂しい處に活きて居る事が出來よう、きつと貧しい淋しい胸を抱いて泣いて泣いて涙が涸れたならば死ぬだらう……、と不知空想に耽つて妙に胸が結まつて來るやう、自分は眞に無人の寂寞の境に居るかの樣な氣がして、夜の明けるのが待遠しう、ほんとにいつ迄も天地も人もこのまゝで眠りより覺めないのではないかと取り止めもなき疑も起つた、……ふと空を仰ぐと白雲の影ほんのりと夜は明けかゝつた、甦つたやう勇んで立ち上つた時明らかに蓮の花の開く音。

（評）「白蓮に人影さはる」前の幽趣珍らしく面白し。

（人）

○木をやく薫

靜岡　たか子

なつかしき父上はうせ給ひぬ。秋は高き稻村山を出でて流れ三十里海に注ぐ廣く淸く深き板屋川にて。そは五年昔の秋の始め其頃は常にもまして心地よげに出で給ひしが思へばかなしそが此の世の別れなりき殘暑烈しきに役場よりの歸り途此の川に面そゝぎ給ひし折、折惡しくも病の出でゝ陷り給ひしを人もなかりし爲遂に逝き給ひぬ。

夢にもましてはかなき心地の中に野邊送り果てぬ。初七日の夕母と共に父上が御身失ひ給ひし場所を訪ひぬ

母の肩に手を置きて眺めやれば月なきに風さへ死し岸を打つ水の音の靜にかすかにそれも折々中流はいやが上に深ければ音をも立てゞ唯々下へ下へと流れ行く。あはれなつかしの我父を奪ひ去りし水それや今いづ地に行きし、川は同じ川なれど昨日の水は今日の水ならず、水はあれど我父のみたま奪ひし恨みある水はた何地如何なる處にか行きし、ゆきしは水のみならじ我等が幸も共に。夫なき妻父なき子を殘して、水やいづち何所にかある水、心あらば我に返せや我父を我幸を。かなし思ひに沈める折しもふと心地よき香の薫ずるに心しづめて尋ぬれば後の方より來るやうなるにふりむけば小やかなる薬屋の軒より薄霧の中を通して眞白く這ひ出づる煙の香なりき。よき香淸き香快き香人を醉はしむる香何の香なるや我しらず。靜に母上の肩をゆりて「母上何の煙か母上」と云へばふり仰ぎ給ひて「いづ地」と問はるゝに薬屋が方をさせばうなづき給ひて「木をやく煙よ民子よ」とのたまひぬ。げに木やく煙かなつかしの香は木をやく香木をやく薫



おや子（選外）　上野　滋澤たみ子

其香にはやさしき父の御聲も面わもみたまも失ひし我等が幸もこもり居る心地して、神が我への賜かはた水の賜か何とも云ひしれぬ香は深く〳〵我心にしみぬ。其香よげに世の常のとは異なり、問はるとも似たる香のなければ答ふるに言葉もなしや。これより五十年六十年生くる身なるかを我しらねど奇しき彼の香を又かぐ折のありや否やあらばそは如何なる折にやあらん。かなしき折苦しき折かいつも〳〵一度板屋河畔まⅰ白き煙を思ひ出づれば胸の奥にしみし香は胸に滿ちて限りなき快さを我に與ふるよ。あはれ奇しくもなつかしき木をやく薫よ。

（評）まことに斯る感あるものなり、木をやく香と亡父の何等の關係なけれど其香獨特の魅力と其折の感想と相結んで永く忘るゝ能はずなれるなり、（西詩人よく嗅感を寫す、藤村の「破戒」も著しく嗅感を寫したり）

秀逸

○あゝ月よ

豐前中津諸町　みさを

あゝ月よ、月の光西の空に消えて世の中暗うならんとする時、山の端にほのめきいでゝ遙に道を照らす月よ何ぞ其姿の淸くたふときや、イエスもかゝりき、ソクラテスもかゝりき、さるにかの人々のあるは、十字架にかゝり、あるはひとやの露となりしはいかに、さてはこの明るき月の雲にかくさることあるはいかに。

あゝ月よ、見渡す限り眞白なる雲の野を、空のたゞ中より照らしたる月よ、何ぞ其姿の淸くたふときや、夷齊もかゝりき屈原もかゝりき、さるに彼のひと〲のあるは山に、あるは川にはかなくなりしはいかに。

されば此の淸き月の浮雲にけがさるゝ事あるはいかに。吾れは知りぬ、雲暗くと月あかるきが故にかくされけがらはしくてかの人淸きが故にけがさるゝなり世のにごれる時かの人にごらば、けがさるゝをおそれず、雲くらき時この月くろかりせば、かくさるゝ事を憂へじものを。

さはいへ、月のあるところは高く、雲のあるところはひくし、隱さるゝも月の光にかはりあらむや、月はとこしなへに明き月にて、雲の散らむ時此世をてらしこの道をてらすなり、うべや、かの人々の光世をへていよゝかゞやくごと。

あはれ、月よ、たえずおのれを高く持して、たえず今の人におしのけらるゝ、若きひとの友となれ、淸き月よ、うつしよの塵にえ堪へで常にたゞ一人行く若きひとの友となれ。

あゝ、たふとき月のあらざりせば、はたひじりのあらざりせば、友なき我身をいかにせむ。

（評）一時を輕んじ永久を重んず月とともに淸く月とともに高き想といふべし。

○夕波

長崎縣北松浦郡平戶村　江上順子

古代紫の服紗包、からき潮に葬るべく、妾は今、こゝ夕波の花ちる巨巖の鼻に立つてゐるのである。暮れかかつた海の面には帆影一つあらず、冷けき波の上より今あれたかのやうな秋風がつと流れて、向ひの山頂に星影一つ、淡くまたゝいて直消えた。左手を松の枝に賴らせてつと延ばした右の手！そこには古代紫の服紗包があはや潮に躍り込まうとしてゐる。あゝどうして〱思ひ切りよう此荒ぶる夕波に投げ入るゝことが出來ようか、けれど明日をも知れぬ病の友はわが此の大役遂げて歸るをやるせなうも待てるであらうに：

…「つれなきは浮世のさがとかねては聞けど、かばかり辛き我が運命とは思はざりき、明日は此の世を辭せむ身故」と枕の下より取り出だされた古代紫の服紗包、「病の源因とも云ふべきもの此が中に記しあれば親しき君にのみと思へど、恥しきことゞもなれば、君よゆるして、中見給はで夕波に葬りてよ」と、あゝ實に悲慘ではないか、波のまに／＼沈んでいつた古代紫、又波のまに／＼浮いて上つた。

かつては共に同じ海水浴衣を浸した此の夕波、ォヽ其折は碎くる波も荒ぶる風も永劫に自然を讃美の無限の曲とのみきいてゐたのに、あはれ／＼今よりは秘密を包んだ古代紫の謂はれをさゝやく悲曲とのみ長しなへに響くのであらう。思ふ、昔からの悲慘な物語りは多く此の暗碧深き海底にひそんでゐるのではあるまいか巖が根に打ちよする波の音いよいよ甚う、漁火一つ見えぬてゝ暮の海、遙かの渚を夕波にたゞよひゆく古代紫、そも／＼いづくに流れゆくであらうか？。

（評）厭らしき節も交れど光景流石に趣あり。

○お春

西播揖保郡大津校　酒見村子

呼べば此方向く花賣娘、娘買ひたや花添へて。

此歌が夏の朝霞を破つて何處からとなく聞えて來た、たしか村一番の歌上手お春さんの聲らしい。

あゝお春さん、私はあの聲を聞いてはいつも涙がこぼれるのです、お春さんは年は十七、目のパッチリとした、鼻筋の通つた、口のしまつた、色の白い、髪の黒いそれは／＼美しい方です、聲のよいことは村一番、お春が唇を震はせた時には村中の人は皆耳を傾けて聞く位、世の中のあらゆる樂器を合奏したつて到底あんなよい聲は出まいと思ふ位。

お春さんはお父さんがない、お母さんもない、兄さんも弟も財産もない一つのからだきりです。

もとは勿論お父さんもお母さんも兄さんもありましたそして家計も豊かでした、所が一朝の父の失敗のため財産はなくなる家もなくなる、悲しいことにはこれがため暫くの間に父も母もなくなられました、それが丁度五年前です。

その時兄さんの俊郎さんは二十三、中學を卒業しなされて一年志願も滿期になつた時、お春さんは私と一しよに村の學校に通つて居た時でした。

兄さんもお春さんも非常に悲しまれましたがどうもしかたがありません、お春さんは學校まで止めて兄さんを助けてよく働いて居られました、ところが明治三十七年日露戰爭が始まりました時、兄さんは豫備少尉と

してたゞ一人の妹を殘して涙と共に遠く滿洲に行かれてあちらこちらで立派な手柄を立てゝ居られましたがあの奉天、奉天の戰に遂に名譽の戰死を遂げられたのであります。

あゝお春さん今早田草を採つてをるのであらう、私は過去五年間のお春さんの身の上を思つて涙をとゞめることが出來ず、只茫然として青葉の下に立つて居りました。

その時、郵便と一葉の端書が私の手に渡りました、差出人青木淑子、私は是を讀んで二度涙をこぼしました青木淑子、これはお春さんと共に同窓生でありますが今は都の女學校に勉强して居られます、今日から夏季休暇故鄕へかへるとのしらせ。私は直ぐ程遠からぬ停車場まで出迎へまして立派なお姿を見ました、家に歸つても夜寢ても私はお春さんと青木さんと自分の身の上が胸に浮んで寢つかれません。

折しも時計はブン／＼と一時を報じました、目はいよいよ冴えた。

（評）美しき同情。

○たそがれの記

はりま　湖畔

世の冷酷人の冷酷になきて／＼泣き盡したるこの身人よりも多しと思ひし涙もかれ血汐の色もあせはてにけん凋落の影さびしく迫る南洲の里に父もあらず母もあらず身よりもあらずさまよひきてなほ人戀しと思はぬ今宵、ゆくりなく得し友の玉章にいさゝかむかしの夢動いて開かじとちかひし過去の胸の扉いつとはなしに開かれつ。

凍えはてゝはかつての榮華もなつかしからず末の望や計畫やをこの極みと笑ひし胸の今日は怪しうをのゝくに封筒の裏見つむる思ひの堪へがたければ人目さけつつ畔づたひ黄昏宿をさ迷ひいでぬ。煙よ糸よと歌ひし柳の葉はのびて下に釣する影もなし雑草交りの名なし小草は花さへ葉さへさびたるかな。子飼渡の渡守が家は夕の色に閉されてわびしげなる姿は見えず棹さす毎の闇ならんか、翁が晩年の淋しさを訴ふるごとき水の音のみ幽なり。こゝに暫汀はなれて桑畑小屋たどりゆけば彼所に笑ひこゝに激しつる白河の水は油の如く蠟の如くさゝやかず逬しらずそのかみのすべてを知らぬ影なる傘淵なり。青苔なめらかに地の香たかきところ一株の松樹あり常にをろちの影を其水によこたへて凄涼の氣を漂はす。赤き鼻緒たてたる雪駄ふみしめ／＼松が根近う進みつゝ唖々となきさる晩鴉見送る折しもあれ色なき雲の何方よりかふるへし／＼鐘の音す

るにあゝかゝる時此松影の靈を得て九天高くまひ昇るにやと思へば身にしむ冷風の袂拂うて颯々たるに恩愛のきづな再切れて靜げくなりぬ魂も身も。

（評）聊朦朧の嫌あり。

○斷　絃

福井市寶永上町五十四　榎並保子

一

蟲の音、しきりと聞えつ。

今、永く癒え難き病の吾れを殘して君は、君は遠く行きまさんとす、あゝ、父なき身の、母なき身の、たゞ君をこそ賴りたりしが、あはれ今、別れなば、又いつ逢はんとも。

癒え難き病の床に臥してより三年、月ごとに、花ごとに優しき、み言葉をこそ賜はりたりしが、僅か五年の別れとは、思へども、病める身の、たゞ今を限りとのみ、いとゞ悲しく。

二

いでさらば、別れの一曲、今を最後と打ちすさばんかな。

琴の音、吾れながら悲しうも響きつ。

あはれ、君の御傍に琴彈くも、今を限りと思へば、あゝ、絃の音の、いとゞ淋しいかな、

ゆるう、ゆるう、悲しき曲奏で終りて、君が御膝に泣きに泣けば、熱き君が、御涙も瘠せにし吾が頸に落ちつ。

三

さらばいざ、行きますか君、悲しうも響きにし十三絃、これも今日を限りと斷ちきらんかな。

一絃、二絃、つらき胸の思を、絃ごとに、こもらせつ、あはれ、はかなき姿が玉の緒の打ち絶えんもやがては此の絃の如くに……

あゝ、君見んも、これが最後なるものを。

一しきり、蟲の音、いとゞ高う……。

（評）あまりにほのかなれど。



子守り（選外）　加賀　波佐谷晋子

○亡き姉

堺　浪江子

今宵は何だか逝かれた姉樣が戀しく床に入つたが。姉樣の姿が髣髴と目に入るので少しも眠られない。腦はボーとして夢の如く心のせいでもあらうか何處かで姉

樣の聲で妾の名を呼んでいらつしやる樣だ。浪さんとオー今も。妾は餘り姉樣の御聲がするので寢床をはね起きて聲する方へいつた。四邊は眞の闇で何處を歩いてゐるのか分らぬ。浪さんよう御出だつたね姉さんは見えないでせう。妾は死んだが靈は此通り殘つてゐるのです。浪さん後生ですが二人前の孝養を父樣につくして下さいあゝ妾がも少し生て居れば………」姉さんは見えませんが涙の含んだ聲でした。妾は無言涙をかみしめて。浪さん宜しいね妾はモー心殘りはありません心安く眠ります左樣ならとスーと消えた樣です妾は姉さんと大聲で呼ぶと目が開いた妾は何時の間にか眠つたのであつた。そうしてそは夢で！。四邊は寂然妾は目が冴えたので靜に戶を明て脊戶を通り庭へ出た。丁度十二三日位の月は雲もなき空に見てくれよと云はぬばかりに照してゐる附近の草原芝生には淋しい秋を告げる哀れな虫の聲。あゝこんな好い月夜だつた姉樣と嵯峨野へ虫を聞きに行つたのも。御琴を敎はつたのも今宵の如き月夜でしかも此庭。今の夢が髣髴として現はれるのである。妾はオーと芝生に泣きくづれた折しも月は雲に入つて虫の音は一層哀れを告げるのであつた。

（評）今少し雅を强く使はれたし。

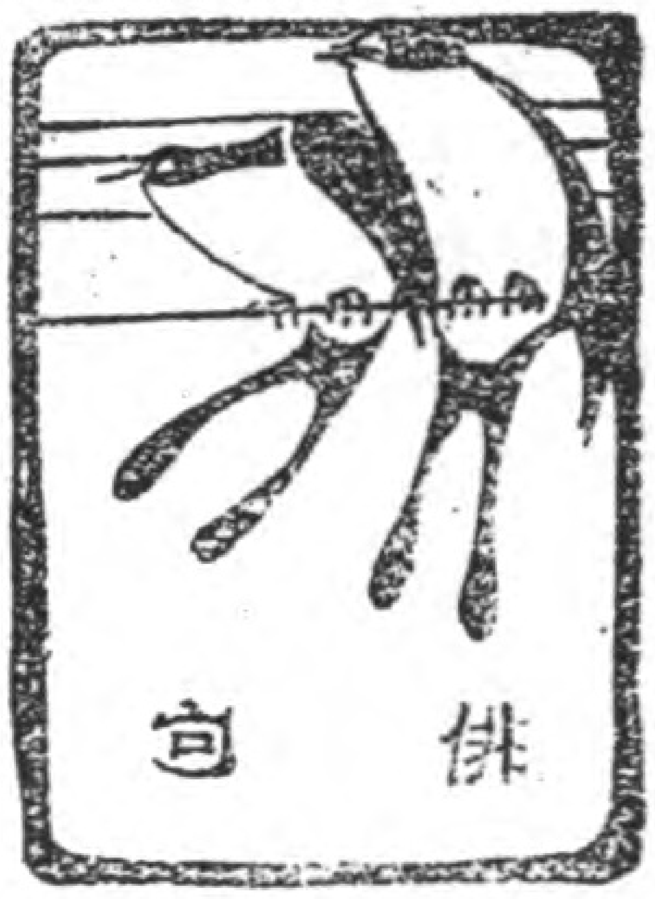
○或る夜

滋賀　辰井ふみ子

我れは今、月の夏野に立てり。ふと黑ずむ松の木蔭に一輪の奇しき花を認めぬ、春姬百花をかい抱いて靑葉の森に入りてより、われは花にあくがれし身の、漫ろに嬉しく、たとへば漠々として果しなき沙漠のたびに綠したゝるオーシスを認めたる如く、つとよりて莖五寸に手をふれぬ。——八日の月は山の端高く登りて、夏の夜の趣ある光は松のこかげを覗けり、花は月にかがやきぬ、われはこの凄艷の花に眸を近づけぬ、意外あゝ意外、奇しき花と見たるこそ道理なれ、花に後れし黃胡蝶の身動ろぎもせず眠れるなりき。我れはこの活きたる詩に接して恍惚たる事しばし……見渡せば綠の野を分くるいさゝ小川は銀蛇の如く輝きて、靜かに更くる夏の夜、鳴く虫の一つだになし、蝶や如何にとまた打ちまもれば、何夢むらん、その安らかなる樣天津花園にねむれる蝶もかくと計り……。あはれ九十の春光老ひ易く紫あせて紅消えて、たへがたき五月雨もつきて……、我は牡丹くづるゝ音を病の床にて聞きたる折春のゆくへのうれはしくて、蝶の身を氣づかひたるなりき。計らざりき今宵玆になつかしき胡蝶にあはんとは……おゝそれよ昨夜の夢と……。我れは筆にも言葉にも顯はし得ざる一種のあるものゝ胸底の琴線にふれたるをおぼえぬ。

（評）製る勿れ。

巖谷小波先生選



特別第一賞

張板の更紗に散るや柿の花　東京市麴町區土手三丁目一二　大島恒子

〔評〕着想新らしく、叙景風を寫せる、女性の作として殊に妙を覺ふ。

特別第二賞

夕顔や繭煮る女美しき　牛込區市ケ谷　鶯子

〔評〕中七千金の價を示して其句其女と共に美なり。

特別第三賞

よき人のあくび小さき扇かな　廣島縣高田郡甲立村　中村東雲

〔評〕機警にして而も優美、扇に金色の光を見る。

天

六波羅の緋梅あせたり古瓦　豐後國竹田町四百四十番地　田中糸子

〔評〕古畫を見るが如し。

地

なにはがたあし間を水鷄叩けり　常陸國新治郡高濱町東大橋　酒葉つね子

〔評〕古歌集を讀むに似たり。

人

涼しさや柱にうつる洗髪　福岡市東職人町　山崎蝶子

〔評〕人情本の口畫にやあらん。

秀逸

萩の路雪洞一つ過にけり　伊豆　加藤爲子
萩の風灯に袖を覆ひけり　伊勢　中西梅廼子
繪日傘の後を行きけり乳母車　埼玉　和久井きん
夏羽織人氣役者の通り行く　尾張　野田棄子
絽の蝿やよき人やどる京の宿　奈良　白藤子
水打て高き梧桐の雫かな　奈良　鹿守子
花瓦斯やいちごもりたる銀の皿　横濱　勢子
螢飛ぶ河原の院の小雨哉　王子　熊谷千枝子
名月や螺鈿こぼるゝ君ケ殿　常陸　田村くま子
廢園や螢淋しき艸の雨　越後　藤原黒子
秋暑く蚊に汚れたる團扇哉　神田　中川千代
夕映に馬嘶くや草紅葉　群馬縣　飯塚幹子
汲んで出すお茶聞し召せ萩の花　九段　よし子

庭もなき家に牡丹の盛りかな　横濱　清水千秋子
蚊やりして軒にわら打つ翁哉　志摩　小林敏江
砂山や二尺の松も蟬の聲　下総　渡邊みよ子
夏痩の鏡なぬらす涙かな　下総　長谷川なつ子
繪日傘や鳩の寄くる淺草寺　淺草　小野鏡子
馬引て百合の徑なたどりけり　下総　萩原はな子
兒のあゆむなりに附添ふ日傘哉　駿河　香遊春子
大空に月しづまりぬ砧うつ　神奈川　落花一片
蔦紅葉崖十丈をぶら下る　上総　みゆき子
栗笑みし森に夕日のさしにけり　千葉　小川幸子
つり床や顔にふせたる物の本　千葉　鎌瀧だい子
夕顔や越後に戀す京詩人　加賀　松原美津惠
畵たくみの繪絹を洗ふ秋の川　南総　林くめ子
文字とへば紅指しゆびのすみれかな　阿波　内田しげり子
なとこならビールも飲まん夏の夜や　福井　白崎菫子
夕立や土橋の上に行きかゝる　周防　芳女史
蟬啼や釣瓶から呑む水の味　攝津　和久瀟子
白壁にトンボの止まる暑さ哉　静岡　伊藤秋雨
虫賣の哀れな買ふて泣く夜哉　越後　金塚としゑ子
夏祭町名々の傲奢かな　奈良　元子
川上の若葉に迫る白帆哉　安藝　繁子
禿山の切石光る暑さかな　淡路　伊藤紫浪
茅屋の屋根のふとんや雲の峯　安藝　箕岡義子
帷子につとめて暑き行儀かな　近江　原野征子
琵琶の湖見添へて廣き青田かな　滋賀　大宮きし
新墓や人待顔の宵すゝき　丹後　城下孤舟子
白蓮や香の煙りのほのゆらぎ　小石川　吉田斐子
燕や飯炊く船の夕煙り　廣島　箕岡壽々賞
草茂る處清水のわく音す　神奈川　星戸琴子
荒馬の繋げばれむろ柳哉　安房　千枝子
鹿鳴くや月に狂女が高笑ひ　長崎　江上順子

朝顔やきれいな垣のうら表　羽後　前田久子
螢呼ぶ子な又呼ぶや里の闇　福岡　古川春子
凩の暇に出たり豆腐賣　伊勢　大川早苗子
雲の峯崩るなみつゝ午餐哉　上毛　眞砂壽子
給すだれな虹みんとしてはづしけり　上毛　磯雅井菫子
雨乞ひの太皷ゆゝしや雲の峯　上毛　五十貝すゑ子
馬ながら柳折行く舎人かな　郡山　玄葉花子
惜む夜は更くるにやすき涼哉　越後　瀧澤香月女史
瓜喰ふて次郎は出たる泳ぎかな　岡山市　横山亭子
抱た子に持れて重き日傘かな　滋賀　兒島糸子
炎天も冷たき寺の疊かな　岩代　春見子
稲刈りて寂しさ増せし小村かな　周防　奥田麗子
しぐるゝや古き都の檜垣茶屋　常陸　酒葉花舟子
心地よき百萬石の青田かな　神奈川　鈴木みれ子
石橋の下にうづまく紅葉かな　越後　中村淑子
田な植ゑて湖水に足な洗ひけり　新潟　きつ子
蟬鳴や高う架したるハンモツク　阿波　内田良子
白百合や徑たどり行く馬草刈　岩代　まつ子
夏の夜の月に返しの歌もあれ　佐渡　谷川桂月
露散れば瀧の口あく葉陰かな　茨城　中堂子
松風の門に忘れし扇哉　東京　菫女史
寒月や梟が鳴らす宮の鈴　芝區　星のや乙女
花さきて酒屋の多し桃の里　福島　面川正子
師の影を三尺退つて月見かな　仙臺　飯塚たへ子
蜩や雨な含める樹のそよぎ　栃木　池澤露畦
卒塔婆に群るゝ羽蟻や椎が本　上総　秋溪女史
夏の山百騎はこもる砦かな　播摩　酒見菊香
夏の月寛性の女美くしき　伊勢　岡本しげ子
鴫なくや水田の上のうす明り　三河　長坂あさ子
天津風雲踏分けて富士詣　本所　伊藤紀美子
村はまだ一里餘にして雲の峯　伊豫　泡舟子

文學博士沼波瓊音先生選

消息文

(天)

○田園生活

三重縣桑名町大字宮通　帆山靜子

寄宿舍の藤棚の下に、暫時の別れを泣きてより既に一旬、單調にして、而も都には知られぬ興味ある生活を致し居候。日課とても朝風涼しき窓に、暫し教科書の復習をいたすと、母の手助けに、料理の出來損ひを作る外は、大方散歩に暮し居り候。まだ薄暗き頃、朝げの代にと、籠と鋏を手にして、紫の色よき茄子畑に立つ事も珍らしくは之なく、或は花の露に怪しき水彩の筆をそめ、葡萄の葉もる月に、罪なき妹の歌をきくなど、只管靜かなる田園生活の趣味を貪り居り候。波の歌面白き、磯邊の御起伏はいかに、汐風に御袂ふかせ給ひての、そゞろあるきに御歌も得給はゞ、海くる風に傳へ給はずや、日毎背戸にいでゝ風の囁きに耳傾け候はん。あゝ思へば笑聲あふるゝ此平和なる生活の樂しからぬには之なく、誠樂しうは候へども、小さき寄宿舍の窓もる月に、再び君と歌語りに耽らん日の、何へなうまたるゝにて候よ。

聞えあげ度事は、まだ〳〵つきず候へ共、只今誰やら背戸口に訪れし樣なるは、大方畑一つ隔てし家の娘が今宵も、都の物語きゝにとて參りしに候べく、こゝに惜しき筆をとゞめ候。かしこ。

(評)田園生活のおもしろさを十分に說きしかもなほ君戀しといひそえ更に末段に隣の娘の都物語聞きに訪れたるを記してその田園生活をまのあたりに見せたる、文法も筆致も優なり。

(地)

○磯の友へ

下谷上根岸百廿五　太田樂子

昨日今日は夕立のけしきだになく暑さ一入に候を、伺ひたきは砂輝き松吟ずる其御あたりの御消息、御水莖の跡匂やかなるを切にこそ願ひ候へ。扨此頃の私が朝毎の興、ちと許り聞上げ候。御存じの通り此所は田も近し畑もあり、朝夕の有樣これが都の中とは思はれぬ閑靜の地、朝かなる「いんこ」の聲に曉の夢破られて遣戸繰乍ら眺むる上野山のあたり、朝霧立罩めて木立の影淡う、日まだ昇らぬ大空に朝日の影白う候。衣更へ

て庭に下立てば飛石を廻り咲く松葉牡丹の絞りや緋や見る目飽かぬ美さに候。岸の常夏池に優しき影映し、露草は石垣に濃き瑠璃の花今盛りに候。庭を一廻り竹藪の前に出れば、池よりの細流れちよろ〳〵、塵捨場雑草に埋れて、一いんこに與ふるはこべは毎朝此所より、之は私の役にて候。小褄取り雑草の中分入れば零るゝ露足に冷たく、若葉に起る清涼の朝風に後もそよぎて云はん方なき心地よさ恍として立つ目先に竹に搦む晝顔の花三四輪、お早うと笑みて迎ふる者の如く候。はこべ摘取り家に入る頃は朝日にこやかに照して家々の戸を繰る音も聞初め候。又日當りよき所に祖父が手すさびの小さなる畑、茄子も實れば生薑も出來候。濃紫の艶々しきは夕餐の膳に上る事毎日、自慢の種は中中盡きず候へど今日はまづ之に筆擱きて、磯の御便り得たらん折に、私が晝の興夕の快、又委しく自慢申上ばやと。

（評）細やかにしてわづらはしからず美しくして厭味なし。

（人）

○清國より妹に

大連市磐城町八十三番地第十一號小泉方　林正子

取敢ず電報にてお知らせ致しました通り、二十八日正午無事着致しましたから御安心下さい、汽車中の事は下の關から差出した手紙で御承知でせう、初めての海上旅行ですから御兩親始み敏ちやんも御心配下さいましたが、御蔭樣で海上も平穏てしたから、小しの恙もなく着、其後も疲れも出でず日々暮して居りますから御安心下さい、早速手紙差し出す筈てしたけれど、忙はしいものですから延引致しました、許して下さい、別紙航海日記お目に掛けますから御兩親にも御らんに入れて下さい、當地へ參り晝は用事がありますから氣もまぎれますけれど、夜分などは故郷の事が思ひ出されて仕方がないの、見るもの聞くもの皆珍らしいけれど、其がちつとも面白くないの、之が御兩親や敏ちやんと旅行をするのだと、聞くもの見るものが樂しいけれど、一人では涙の種計りてす、月を見ても敏ちやんと丸窓の側でお琴の合奏をし、手を引いて招魂社へ散歩に行くのも、こんな月夜であつたと思ッては涙を拭き、桃實りが來れば、あゝ二人で桃畑へ行き四つの袂に重き程取つて、叔母樣に差上たと思ひ出しては泣いて居ります、敏ちやんも私の事を思ひ出して居て下すつて。毎夜空を仰いで、思へば遠し故郷の空、を歌つて居ります、敏ちやんも月の夜は、椽に出て西の空を

眺めて下さい、空中で二人の思ひが逢うて話をするでせう、お話したい事は澤山ありますけれど只今來客がありますから筆止めます、當地の面白い事は次便にお話致しませう、暑さ嚴しい時ですから御兩親始め敏ちやんもお身を大切に遊して下さい、左樣なら。

（評）さら〳〵としてしかも涙あり涙ありてしかも確乎たる所あり。

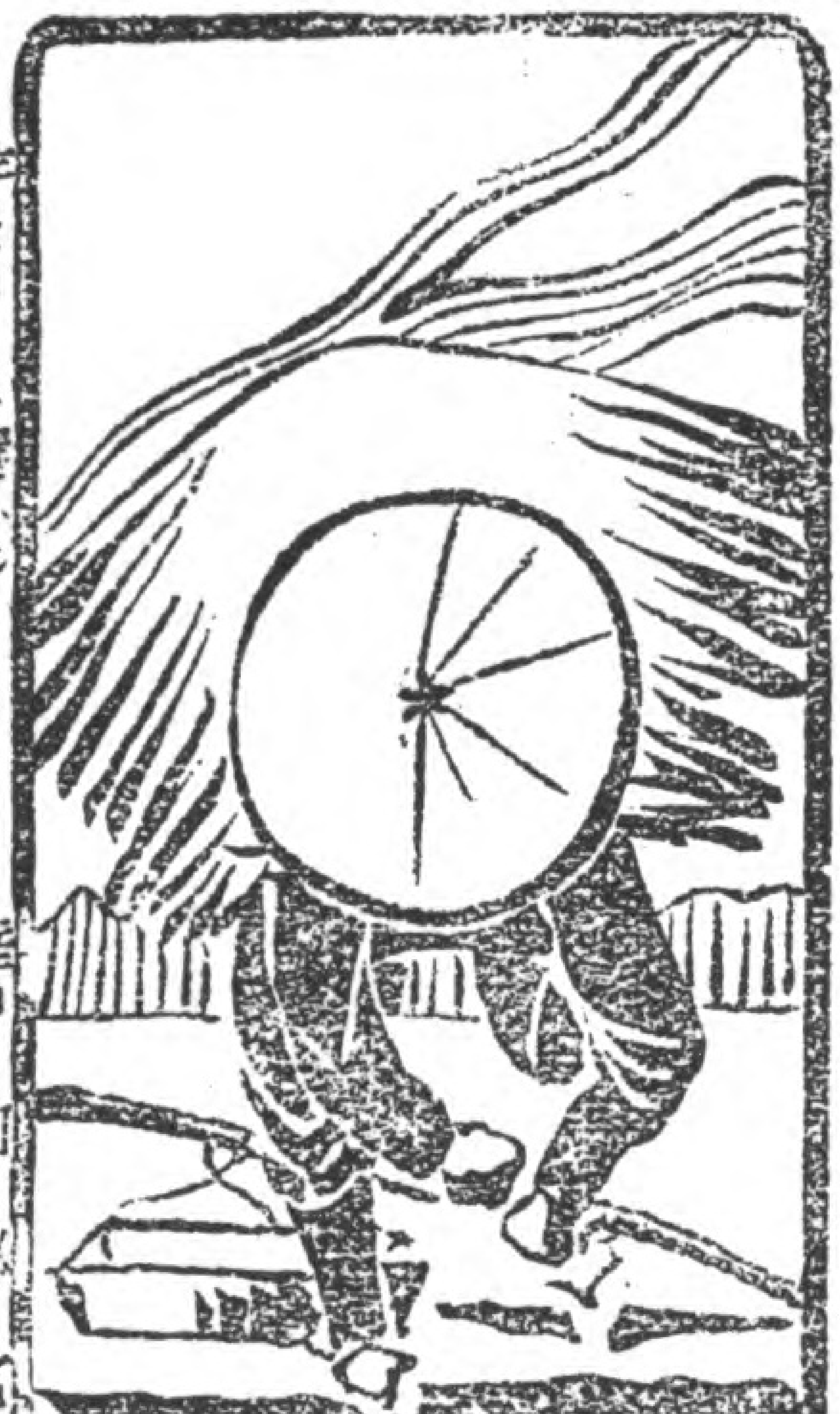
秀逸

○故郷の友へ

京都　濱部郭公女

花子さん眞實に夢の樣ですわ、昨日の朝はまだ貴女と手を曳いて彼の柳の下を歌ひ乍ら樂しく散歩して居りましたが今日は早やあづまの空の寄宿舍に住む人と成りました、百三十里の長い旅も文明の利器の有難さ道中何事もなく今夕五時過ぎ新橋へ着きました、扨て昨夜は夜更にもかゝはらず御親切にも遠い路を御見送り下さいまして例に變らぬ御心根の程何とも御禮の申上樣が有りません。貴女と停車場で泪とともにお別れしました時丁度彼のプラットホームの傍の繁つた櫻の葉の間から片破月が洩れて美しい貴女の横顏を照して…噫々其の時のお姿が未だ眼の前に判然と見えます、寄宿舍へ着きましたのは七時頃でした、御心こめられし御手製のお菓子は舍監樣を始め室長樣やら皆さんに差し上げましたら大層珍らしいと云つて大悦び茲に私が皆さんに代つてお禮申上ます、さて二ヶ月間も放つてあつた机に向ふと妙に故郷が懷しい樣な氣がして樂しかつた有樣やら嬉しかつた事が次々と浮んで何だか胸が一ぱいに成つて來ました、これから一年間を茲に暮さなければならないと思ふと…花子さん隨分長いわね、萬望手紙は時々ね私の一番樂しみなんですからね、申上度ことは盡きませんが最早消燈時間も近く成りました今夜からはまた白い寢臺で窓から差し込む月を眺め乍ら故郷の夢を見るのです、いつもながら故郷に妾の成功を便りに淋しく暮せる母と妹の身を何分宜敷伏して御願ひ申上ます、先は安着お知らせやら御禮やら。

（評）久しぶりに寄宿舍に歸りし時の珍らしさ悲しさ、實にこの通りなり。



芋ほり（選外）　陸中　阿部富子

○友の許へ

孤舟子

長しと思ひし休暇もはや半ば過ぎ申候あなた樣には御

さはりもおはしまさずや定めし日頃御したひなさるゝ母樣の御そばにていつぞや寫眞にて拜見致しゝ彼の可愛き妹樣と御たはむれ遊ばすらむ實にその樣の目の前にちらつくやうそゞろに獨りほゝ笑まれ候耶馬溪宇佐などへ御出でなされ候ひしや御許樣の御文才もて何卒絶景壯嚴の樣御知らせ下され度候私事はいつも申す通り生れてより一度も親のもとはなれし事候はねば休暇中とて別段樂しき事も候はず只每日〳〵母の傍にて料理縫物など致し候夕方になれば弟と二人海邊に散歩に參り候が只此處のみ浮世の外の心地致し候夕映の色もいよ〳〵うすれて日は西山に沈み果て候へばいつの間にか妾が腰かけし松の梢に淡月は出づるにて候あゝいつもこの月になつかしき御許樣を忍びては眞心より語らふべき友もなくかゝる處にたゞ一人さまよふ身のいともはかなく候あゝ芳子樣よ御母樣や妹樣の御そばにてさぞかし御たのしく候はんがこの塵多き町內にて獨り御許樣を待つ妾ある事を思し出で給ふとならば一時もはやく御歸り遊ばしてよ誠に千秋の思ひ致し候御かへりの折には先日御賴み申しゝもの必ず御持ち下され度御願ひ申上げ候。

（評）さら〳〵として快し。

○銚子より

日本橋　高柳みつ子

一昨夜終列車にて當地へ參り申候、暫時の我宿たる假屋は朝日館と申し銚子の町より半里ほど隔ち鷲岩にて有名なる黒生とて頗る眺望に富みまた歷史をもてる漁村にて候、往古江戸の人北川某此所に港を築きし由、また維新の際幕府の軍艦美加保丸の北海に脫走の途中この沖にて暗礁にふれて沈沒しあはれ多くの兵士が海底の藻屑と化せしとかや、磯草茂れるがうち濱晝顏の花さびしげに磯風おとづるゝ鷲岩のほとりに紀念碑建てあり候、前は縹渺たる太平洋に面し巨巖奇石多く靑峭黑壁さながら天人の斧もて削りしが如く打ち寄する激浪の音たかく水沫珠を躍らす壯觀、後は翠色滴るばかりの一帶の小松原、右は砂白きはた奇なる介殼など拾ひつゝ海鹿住むてふ海鹿島より伊勢路浦の渚を淸けき波に足を洗はせつ或は美はしく霧ヶ濱を經て有名なる犬吠岬の燈臺に、左は磯廻り中の奇景なる女夫鼻より平磯を經て銚子川口に至るべく、朝は大波の音に夢さめ、黄昏よりは犬吠岬の燈光にて海はひとしほの詩味を加へ、朝な夕なの海の眺め、晝にも歌にも、御許樣來まさば御得意の御歌さては美はしきスケッチを拜し參らせむをかしこ。

（評）人をして遊意を催さしむ。

○三寮の友に　兵庫　田中園子

第一信

親しき光子の君よ。今宵は月も清く候て、何となく心動かされ候まゝ若しさしつかへもあらせられずば、二寮あたりのおばしま迄御出かけ給り度其折は必ず君が愛讀の詩集と、ブックは御忘れ無き樣願ひ上げ候。

第二信

今朝は例よりも早く起き出で、學園を散歩致候に、ポンとつよき音聞えて頰をなづる朝風に、えも云はれぬすゞしき香の鼻を打ち申候、すゞろなるまゝしばし夢心地に何の香なるらむと、思ひめぐらし候に、遙か彼方に眞白き鐵砲百合ほの見え申候、こは師の君が丹誠して作られしものにて、先程の音はその咲く音にや候ひけむ。折から輝く星の光りに、夜の神が形見の朝露くしう輝きて、ハラ〳〵とまろび落つる樣こゝにも星がきらめくかと思はれ候。この美しき玉のいたづらに散らんも心もとなう候へば、早速部屋にかけ入り、硯を取出て二三てき受けて、直ちに君が許にと、此書を認むにて候かしこ。

第三信

光子さん、私の部屋の屋根の瓦の中に雀が巣を作つて居ますの、私ちつとも知りませんでしたが、道の方の垣の外から長い竹でこつ〳〵何かつゝく音がするので、見ますと、竹のさきに取もちをつけてね、子供らがひッつけに來てますのこんな所に巣を作つた雀はとくね大かた孟母が學院の側に家を遷したのを聞いて、わざ〳〵寄宿舍の屋根を見込んで來たのでせう、中々えらう御座いますね、子雀がチュー〳〵泣いてますわ。今日靜肅の時間がすみましたら御こしなさいましな。さよなら。

（評）鐵砲百合面白く候。

○妹の處へ　安藝　近藤貞子

雪ちやん此の頃は御日さんが怒りなすつたか酷くお照りなさるね然し雪ちやんに御無事ださうで嬉しいは此頃は御父樣や御兄樣が滿洲から御歸りに成つて、御土產を澤山頂き其上に支那人の御話を聞いて雪ちやん嘸面白いでせう姉さんは雪ちやんの身が羨ましいよ度々は御手紙できかして頂戴ね御願ですよ姉さんもねそれ去年御一所に吳へ行つた時に登つた樣なあれよりも、もつと奥の草や木が茂つてしんとして寂しい山の中に居ます。けれども馴れると寂しい事もありません却つて氣樂ですよ、山と山の間には谷があつてその近所には龜の甲の樣な岩や又俵の樣な石や人の顏の樣な岩種と奇しい岩や石があつてそれに腰を掛けて谷を流れる清水を見て居ると何だか仙人の樣な氣がしますよ又木の枝には可愛らしい鳥が來て妙な聲して鳴きます每

日それを聞いたり草を摘み谷に降りて水の流の中へ石を投げ入れたりして樂しく暮して居ますよ雪ちやん姉さんの處へ來たくはありませんか若し來たかつたら御母さんと一處に御出姉さんは待つて居ます左樣なら。

(評)むつかしき語を使はずしてよく仙境を寫されたり。

○海邊の友へ　信州　大井雪枝

御文嬉しう拜し申候、都の人も集ひ來て賑はひ初めし磯の邊に、なつかしき人諸共朝な夕なの潮あみ、さては砂白き松原のほとり清く涼しき波の音に心洗はせ給ひつるとか、山猿のやうなる妾いと羨しう存じ候。

鄙は今夏蠶の盛りに候、照りつくる夏の日菅の小笠と只一筋の手拭もて頰包みつ、腕もあらはに桑つむ乙女の歌の節面白う所々に聞かれ申候、夕立雲空の彼方にと見えそめて心急かるゝ折々は、妾も手助けにもと見まね人まね致し候へ共、はやる心に運ぶ手元の覺束なく侍るまゝ、度々妹の笑ひを招き候。

椎の大木梢動かす風もなく蟬の聲のみ喧しくて、玉なす汗止めやうもなき眞晝頃は、妹諸共里の小川に汗流さんものと存じ候へ共、はしたなしとのそしりこはさに背戸の清水に汗拭ひつゝ、お前樣の御身の上つくづくと羨やみ居り申候。

されど夕風涼しく稻田を渡る頃と相成り候へば、此所彼所の涼み臺蚊遣の烟細くたなびく其が中に、太平の御代ことほぐ笑ひさゞめき滿ちていと長閑けき有樣に御座候。

やがて又都の學び舍に日にやけし姿と、潮に黑み給ひし御前樣と顏見合せて笑ひ申さんと、今より待ちわび樂しみ居り候御返し迄かしく。

(評)簡なれど趣ある節を悉く寫されたり。

○海水浴場より　徳島　坂野白露

親しい美代ちやんと別れてから海水浴にと參つたのは早一週間も後のことで身を溶かすやうな炎天の下に潮をなめ又砂の上にころがつて今は亞弗利加の土人のやうに黑い體となりました、もう一週間も經てばどんなに焦るでせう、されど夕日西山に落ちんとする頃白帆に風を孕ませて舟歌面白く歸る漁船などあるは目の屆く限り見渡せば紀の山々おぼろげに淡路の沼島は手にとる如く和田の岬は青松を乘せて遠く海中に突き出でたるさま恰かも畫の中にあるがやうで暑さ勞れも忘れます、又珍らしい魚名も知れぬ貝など拾ひて美代ちやんのお土産にと思つて眞砂の上を走り廻り日の暮るゝを忘れし事の幾度か、なつかしい美代ちやんと一所に散歩せばやと獨言するも度々です美代ちやんもしつか

り勉強しなさい、歸りには色々の貝其他珍らしいものを澤山持つて歸りますよ、其時姉さんの顏見て笑つて頂戴。

（評）叙景よろし。

○都の友に

伊勢　守岡　みどり子

御身よ、よろこばせ給へな。妾はげにうれしうて〳〵候よ。とのみにては御分りもあるまじけれど、實は、偉大にして神靈ある自然の神は、けふ革命の巨礫もて憂愁に沈める妾をして、微笑の兒とならしめしにて候ふ。御身が何かと慰めたまふをも顧みで、只管、はかなき空想にのみあこがれて、狂ひつ、泣きつ、女々しくも憂愁に送りし前世紀の事ども、今にして思ひめぐらせば、「ああ、若かりし、」との微笑は、自ら痩せたる頰に溢れ候。御身よ。田園生活の寂寞に泣くは、人世の光榮、市井の名聞に魅せらるゝ間のみにて候。一度心靈の明鏡はれて、永劫萬有の流轉に於て、現世はたゞ一刹那よと悟り得ては、白雲輕く踏んで、一籠の椎柴の外に念なき峯のかせぎ、春風耕耘の袂輕く、一束の菜蔬の外に心なき野良のいとなみ、何のいやし、つらしてふ事かあるべき。なか〳〵に趣味の多きものに候ふよ。かくとは知らで、昨日までも、今日までも、たゞつらし悲しとのみ聞え上げて、まどかなる御胸をいしくもとゞろかせ參らせし罪、いと〳〵深うも候ふかな。添へ參らすは、昨日野良よりの歸るさ、ふと興湧くまゝに寫生せしものなるを、あはれ拙しと御笑なく、平和なる田園に衣食して、自然をほゝえむ昔の友の、幸福のいかばかりかを思したまはらば、こよなき本望に御座候。さらば、御身よ。

（評）懐しさ思ふべし。



釣り（選外）　神奈川　中村　三重

○都の姉上へ

愛知　白井やぎえ

梢吹く風涼しう卯花垣にさらばひて青葉の夏も早や老い申し候、實に淋しきは秋のみかは、うつら〳〵とまどろみ候枕邊近く、水鷄の聲訪れ候頃より分けて姉樣戀しう泌み泌みなつかしさ覺えられ候。姉上樣！不忍の池に蓮亂れ咲く頃と覺え候に例の觀客ひし〳〵と押しよせ來申さん。さればよ、脊戸の蓮池にも四五日前より蕾の數々見せ候て、今朝しも文讀む窓の靜けさに綻ぶ音ども聞え候。

又しても古めかしき事には候へど、昨今の里景色一筆二筆申し上げ候。

古澄の夏の曉まだ明けやらぬ梅田川溶々として萍花雪と亂れ咲く邊には青鷺の羽ばたき靜に、朝月淡き若蘆の邊り小蝦はねて波の輪をつくるなど、とり〱に心ゆく眺めに候。

日は午に候。遙に井堰のあたり飴賣る笛眠たげに聞ぇ候。障子明くれば、いさゝ小川の水清う魚すくふ童三人許り佇みゐるが見ぇ候。先程迄空の一過に堆く積みゐたる雲の何時かとけて流れて日光雨の如くさすよと思へば、風に梳らるゝ羊毛の夫れのやう、浮々としたる雲二條三條、碧空に漂ひ行くにて候。

日暮れて妹と共に後山に登り候。野も丘も皆薄紫の煙に蔽はれて、墨繪に淡き並松のあなたおかしき色彩の炊煙縷々と立登るが見ぇ候。草に伏して樂しき歌ども口吟さみ候へば田面を撫で來る風心地よく、青茅の戰ぎに點々たる百合の花ほの白う暮れ殘り候。家に歸り候へば、月さやかに上りて、露しげく風靜に、鈴虫轡虫きり〱すなんど、小さき庭に溢れんと鳴きつゞけ候。里の秋の近うなりしにて候よ、かしこ。

（評）奇麗。

○嚴島より　はりま　湖畔

新もみぢ社の溪流に双の足洗はせつゝ羊齒生ひ繁る岩が根にこし打おろし申候木の葉一つともたらさぬ此せせらぎはいかなる境より溶けてこぼれてきたるかとなつかしう候まゝに。

くみあげて掬びても見つ夢うたひ理想うたひて流れゆく水。かく平和歌ひつ急湍なしつゝやがてはあわだつ海の一滴となり候べき此靈水のいとほしくてひた見いり候へば床なす眞砂もやらじとてや下流に小石と現はれて堰とめ顏に横はるも折からあはれとながめ候。

蒔繪の櫛に水うけて鬢のもつれをかきあげつゝつくづくながめ候へば舊りし木立のけたかさよ幾抱へかあるべき數株の縱に日かげはもれずしめやかに地をはひてくる奇しき香にをのゝき申候またこゝらある楓にはやがての秋の忍ばれてはるか宮居になく鹿の音さへさびしう候いき。

君よ秋にかよふ此水のうたをそのまゝ夢にとて今宵の宿は相定め申候かしこ。

（評）詩境詩情。

○鄙ぶり　松山　山脇幸子

四つの袖を二つにさきて、なつかしき君と別れ、戀しき父母の笑顏に接せしは昨日の夕暮に候ひき、早速御

知らせ申すべき筈なりしも、父母初め弟姉まで嬉しがりて、都の珍らしき話などせよと、せめらるゝに、つい其夜は、彼れ是れの物語に時をうつし、遂に今日まで延引いたし候罪許しませや。
さても戀しきは郷里にて候かな、大きくなりし弟、おとなしくなりし妹、唯父母の次第に老ひ給ふが憾みにて候。
都には見なれぬ物など許多あれば、珍らしと思ふものは一々書留め置きて次の便りに申あぐべく、唯歸りて一寸異樣に思はるゝは、道行く人の「生意氣な女學生がポツ〳〵歸つて來る」と語るを聞しと、昔の友の皆嫁きて一人も居ぬとに候、妾も歸りて生意氣な女學生の一人に數へらるゝ身と相成候。
鄙びたる唄などお聞かせ申せば嘸御笑ひ草にもあらめと存じ候へども耳新らしきものもまだ聞かず、そは追てお知らせ申すべく、此度上京の折には是非、茄子や南瓜や田舍のお土產澤山差上ぐべく今からお樂しみ居り給はりたく、先は取急ぎ右まで、かしこ。
(評) 道行く人の言傾聽すべし。

○歸省中友へ　山梨　白菫女史

小川の岸に繁れる靑葉に、只涼しと寄せる此里すら、照る日の盛なる時はいとゞ堪へがたきに、まして人足繁き都の地は、如何かと思はれます。あなたは別にお變はないですか、私も達者で每日先年の樣にあの川でしゞめ貝拾つてゐます。
此頃はね自然に憧がれていつも〳〵迎を受けて宅に歸るの、無理もないの、ですから內でも少しは許して下さるの、獄屋同然の寄宿舍に三月も四月も居たんですものネ。ご飯焚も餘程上手になつてョ、始の中はこがして許りをりました、又或時は水を入れずに焚いた事もあつたの、用を仕まへば、學科の復習、スケッチ等、夜は丸で半分は月の下で遊んでしまふの。あなたもそんなにお忙しい事もないでせう、したら手紙の一本も下さいナ、郵便の來るのが何よりの慰藉よ、さらば花子の君。
(評) 寄宿舍な獄屋同然とはちと酷ですな。

▲月あかき夜友のもとへ　清水濵臣

いざたまへ、もろともに此の月のさやけきな、所せきつぼのうちにのみやは見はて侍らん、なにがしがなりところにまからん、それもまろうどなどきあひて、あるじまうけする程ならば、それがしのかくれがにまからん、それもありきたがひて、あらぬ程ならば、北山の律師の室をおどろかし侍らん、それももし里になりたらん程ならば、うしろの山に登りてよもすがらめであかさんな。
いざたまへ、もろともに
なへてよのちりをよそなる高山の
松の梢に月をいざ見ん
そのいろの峰までもこそ

新歌謠

編輯局選

特別第二賞

福岡縣嘉穗郡　洗耳

私しやお上の山守り娘庇髪とか未知らぬ

〔評〕俗謠の精神。

天

近江國阪田郡入江村字筑摩　藤居英淵女子

電車自働車一度も見ぬがわたしや都へ汽車で行く

〔評〕所謂新歌謠。

地

京都　岩淵國子

香りよいとてキッスをすれば紅がうつつた薔薇の花

〔評〕キッスの美化。

人

信州　竹田末子

牡丹崩て芍藥散て殘る姫百合思案顔

〔評〕百合の思案が歌の思案。

秀逸

○盛岡　高山あい子
めざまし時計は田舎にやないが川のながれが目をさます

○府下　小室きん子
暑い最中の飯焚や辛い熱さ烟さで玉の汗

○本郷　薫子
唐茄子買ほうて八百屋の店で打診して居る女醫學生

○上野　好月
私深山のうもれ木なれどせめて弟を世に出さう

○鹿兒島　木原米子
幼さき妹に花籠持たせ姉が寫した水彩畫

○岐阜　あさ子
田圃底ても年貢は高し少しあるとて見たて取り

○飛驒　萬殘月女
月の御殿へ電話をかけて君が行衛を尋ねたい

○大和　貴美子
山家ながらもハイカラ式で内のおさんは庇髪

○越後　瀧澤みつ子
麥の御飯に茄子汁たいて夫の歸りを待つて居る

○上總　小川國子
添ふた當坐はたゞそは／＼と襷かけたり外したり

○麹町　山下里子
いくら言たとて聞えぬ村と村と村とを鷄が鳴く

○上總　一笠女史

ほたる來い〳〵むこうの岸にや辛い水賣る店がある

○今年しや萬作此稲刈りてこいて米にして町に賣る　　岩代　服部水仙子

○駈けて來るのは魚賣り娘魚の命で身を飾る　　香川　益女

○今日の朝顏赤染衛門明日は紫式部やら　　千葉　吉畑せい子

○妾しや上州横野が原に蓬摘んだり蠶かひ　　上毛　關口初子

○咲かぬ中にと今朝こそ起きて見れば朝顏さいて居る　　東京　とき子

○髮に挿さうか秋に入れよか折てくれたる女郎花　　大分　工藤榮子

○わしの里には戸數が五十前も後も背田たみ　　越中　清女

○百里むかふの都の兄に知らせたくない家の樣　　越路　白菊の露

○髮は島田で機織るむすめやがて嫁入る仕度とや　　伊勢　松本しげ子

○天の扉に衣打ちかけて天河を渡るか月の姫　　麹町　淺井千鳥

○濱の篠島若葉の鈴鹿なんな桝形の茶屋娘　　愛知　渡邊羽衣女

○颯と風吹きや露もつ花が白も赤とてロンテニス　　静岡　石神喜惠子

○沖の白帆に夕日がさして繪にも似たよな波の上　　兵庫　綾子女史

○月蝕皆既の今宵の雨は天文學者の涙やら　　金澤　大地波子

○瀧の白布浴衣に縫ふて風の團扇で涼みたい　　常陸　今泉磯子

○今年豐年目出度い年よ前も後も笑ひ聲　　陸中　若生なか子

○毎夜毎夜の雲雀の宿は誰れも知るまい麥の中　　山茶花

○繁る夏野の路珍らしくとへば嬉しや清水湧く　　南多摩　金子楓蔭女

○友となりたやきみあざみ草わしは十二の父なし子　　周防　佐保子

○待てど來ぬ夜はおもひにあまる啼くなまつ虫きり〳〵す　　姫路　船戸幽規子

○お花十七里での美人あれさ蝶々が後を追ふ　　仙臺　飯塚たへ子

○暗にほの〳〵夕顏棚や蚊遣り烟の這ふてゆく　　大阪　紅露

○戀の二人が月みてなればいつかあなたにとりがなく　　美作　杉山えみ子

○夢のみ園に白蝶黄蝶花のみ魂が舞ふのやら　　秋田　大越みさを子

○霧にうするゝ背田の上をないてかすめる眞白鷺　　埼玉　むらなぎ

○菖蒲小車軒ひきよせて花を召せよと奈良なまり　　新潟　岩瀬波子

○駒の轡の鈴振り落ちてちろりんりんと秋の山　　下野　波多野まさ子

○日影さす間の朝顏さへも紅よかすりとおしやれする　　周防　桔梗子

○白いりぼんに海老茶の袴胸は戀する紫に　　安藝　白露子

○　　小石川　吉田樊子

風にゆら〳〵野の白百合のかなり涼しや夏の月
伊豫　曉子

○飛んで行きたや月宮殿へ天の使の羽借りて
安房　ちえ子

○池にうかべた坊やの舟に蝶がついたよほばしらに
若狭　長谷川英尾

○なつかしいぞへ名は郡草安否ききたや兄上の
丹後　城下孤舟子

○蜒が結んだ柳の糸輪夏の夜風がなてゝゆく
秋田　黑丸松琴女

○暑中休暇て久々逢ふて昔語りに日は暮れる
神戸　秋月百枝

○夏を忘れた一夕立に池の蛙も蘇みかへる
淺野藤子

○里の童が草履を蹴れば明日は天氣か秋の空
秋田　比貝多喜子

○夏の夕ぐれ妹つれて橋のほとりへ避暑をする
秋田　武田はる子

○姉ちやん何處へ行く花席機りに糸の色綾身が沈む
淺草　大沼きさえ

○天津乙女がかちどきあげて今やかへるか虹の橋
品川　小林のぶ子

○蝶を埋めた築山蔭に夏も知らない百合が咲く
群馬　横田君代子

○話はラッパ節はやしは座操鍋ぢや囃子が踊り出す
土浦　濟子

○散れと敎へて出したる弟叙勳になるとはゆめの樣
岡山　三宅馨

○雲は東へ御月は西へ君は南に居るとやら
下總　渡邊きわ子

○月が廻れば廻るに伴れてそゞろ歩行や花の影

○不二のたかねは只白妙の雪の衣きて晴すがた
千葉　小川ふみ子

○月をのぞくと柴折戸をせば響床しき菊畑
德島　阿部保惠

○前は白帆よ後は背田燕舞ひ入る夏座敷
橫濱　吉川亂調子

○硯引寄せ雑物砕きエゝモ自烈たい水が無い
東京　芝野吉江子

○唄のあるじは姉さん冠り朝の山路を駄馬ひいて
秋田　佐藤ひさ子

○降つた小雨も漸く晴れて川のほとりて夕涼み
きよう花子

○都よいとこ御門のお傍いつも櫻田花の空
芝　つれ子

○私しや七十路孫子もあれど百姓する氣はまだやめぬ
安房　忍足靜子

○星のあかりで拾ふたリボン何處の涼い人のやら
愛知　俊子

○霧は晴れるよ蓮は咲くよ鐘は六つなる夜はあける
橫濱　瓢之舍

○咲くも蕾むも我身の花は心一つの植どころ
安房　夢の家

○紀州よいとこ南は海て上り下りの船がある
紀伊　阪本容子

○今年しや蠶の作上出來で芝居出來るてきておくれ
滋賀　伊藤登久子

○泣きて別れたこの磯濱は今は二人の夕すゞみ
本所　三ツ森富士子

○東京見えるよな眼鏡をほしや千兩出しても求めたい
金澤　和田倫子

廣津柳浪先生選

短篇小説

特別第二賞

○人の噂

埼玉縣　中村むらさき子

「ちよいと、淸ちやん好景色ね」、心地よげに水の中で田植の農夫をさして、雪子は云た。「さうね」と淸子は點頭いたが思出した樣に、「雪ちやん私ね貴女にお話があるの、人に聞れては厭だから、私の洋傘の中にお入り」と妹の如く肩に手を掛て自分の傘に入た。「アラ淸ちやんと雪ちやん、大層遲い事ね」と四五人の生徒が馳て來ので淸子は當惑さうに、「私今日は雪ちやんに、お話があつてだワ」といふと「アラさう、どんなお話?」「花ちやん惡いワ、人の秘密の話なんか聞たがつて」、「邪魔になるから早く行ませう、二人でゆつくりなさい」と行つて了つた。淸子はそれをみ送り乍ら、「アノ、お話つてね」と口籠る。「何淸ちやんお話つて?」「あのね」と聲を低めて「雪ちやんに、に……兄樣が在でせう」淸子はポッと顏赤めた。雪子は何と思ふてか嬉そうに微笑乍ら、「え丶中學三年で、年は淸ちやんより一歲多いの」「アラ私其樣な事きいたのではないわ」雪子の視線を避るやうに淸子は勇しく飛交す燕をみてゐる。やゝありて淸子は「雪ちやん貴女誰が一番好」、雪子は奇訝顏で、「私その事は、そら學校の櫻の下で云たでせう、彼時から少も變なくつてよ」「櫻の下で……誰が一番好と云たの」「アラ知て丶……ほら私姉樣とも思ふて慕つてるのは淸ちやんだつて」「さうでしたつけか、私も雪ちやんが一番好よ、年は三つも違ふけれど……」。ガア〳〵と鳴て居た蛙は兩人の足音に驚いてボチャン〳〵と田の中に飛込む面白さ、雪子の手を取て淸子は暫く見とれて居たが「雪ちやん私是から貴女と仲よくする事できないんだわ」「えッ」雪子の無邪氣顏に浮んでた靨は消え、星の樣な限は圓くなつた。「あのそれには譯があるの、貴女と私が斯う仲が好のは、兄樣が有爲だつて……約り私が目的があつて貴女と親くするのですつて、私今日お友達がいふてたのを聞たの、私貴女の兄樣はよくみた事さへないんだに……」「だから淸ちやん其樣事ないんだからい

いむ」とうつむいて居た雪子は突然顔上た。「だけど私父に知ると何も知ないから眞とかと思ふて、私を他の學校へやつて了ふワー「だから私悲しくて厭なのだけれど貴女と親くせぬようにして友達に目的なんて事ないつてのを知したいのよ」と清子は桃色半巾で頬を被つた、雪子はうつ向て無言。噫誰が彼樣噂を起たのだろう、清ちやんと私の仲好なのを嫉んでる、花ちやんか艶ちやんかしら？まあそれはよいとしても。私どうして、あの優しい親切の清ちやんと口を聞ずにをられよう、一時間の授業て別るのさい辛く窓と窓から互に首出して



笑ひ合のであるのに……。あの日常も私を抱ようにして髮など撫付て下さる事は猶更あの優しいお言葉も聞事ができぬのだ、それ許りか折角思ふてた海水浴にも一所に行なくなる神樣はどうして親しい兩人の間を割のであらうと雪子は少女心に想亂て思はずホロリと一卜雫。清子はそれをみて可憐しさに堪えず抱寄ようとしたが思ひ返してみぬ振した。清子は我心を殺して成丈雪子に對して不親切にして思切らせようと決心した。「雪ちやん承知して呉て」流石に聲は震た。雪子は涙の眼をあげて「私いや!! いつ迄も貴女の妹だわ、」清子は、はつとしたが

其儘口をつくんだ。遙彼方でラッパ節の聲が聞えたので耳傾けて聞てゐた淸子は、後で自轉車の鈴の音がしたので急いで避た。雪子はうつ向た儘避ようともしない、淸子は我言葉に深く思惱んで耳に入ぬのであらうと可愛さに、今の決心は破れて「雪ちやん自轉車が：：：、危險事よ」と優しい雪子の手をとり確と我身へ引つけたのであつた。

少女の感情の單純なは學校時代が一番で、學校に居る頃の苦勞は恐らく、斯んなものであらう、ありさうな事て、小苦悶の裡に人生の影が宿つてゐる、寫し方も相當の工夫は凝らしたものと見える。（選者評）

（天）

○川のながれ

盛岡市三戸町百六十六田村方　高山あい子

日は燒きつく樣に照つて居る、川は高い音をたてゝ流れて行く、川には半分落ちた土橋が架つて居る、川の向ふには茂みがあつて其側に小屋が二三軒立つて居る周圍は山でかこまれて居る、空は藍を溶かした樣、その所々に銀の樣な雲がちぎれて飛んで居る、よく洋畫にある樣な景色。

洗濯物を桶に入れて此處の堤を下つて來たのは年頃二十二三、つくろはぬ姿に何處となく艶な所があつて鄙珍らしい。

女は子供の着物を一二枚洗ひかけたが何故か時々川の面を見るでもなく手を止める、彼の女は今胸の惱みに堪へかねて居るのである、彼の女は今追想に餘念もない、そして今は洗濯物も忘れて居るらしい、否其最愛の子をも忘れてしまつたのであらう、彼の女の頭腦には、たゞ華やかなりし學校時代の夢をくりかへして居るばかりなのである。

「寄宿舍の朗讀會に「淀みに浮ぶうたかたは」と方丈記の一節を讀んで喝采を得た事もあつた、何の氣であんな、……まあ無心の昔が懷かしい戀しい。

高兄樣のお友達、折々遊びに來給ふた許りであつたに幼なき心に深く刻まれて。

政雄樣には既に定まる方が有るときいて實に十七年は夢の樣に思はれ、斷然我は女敎師と覺悟をきめた、それは伯父樣にいつまでも厄介かける事がすまぬと思つたことも加はらうし、文才があるとか何とか友におだてられたこともたしかにある。

しかし、あゝ、が、この血の淚――實際少女心には血の淚であつた――試驗も見事落第に終つた、身躰の無

理や心の惱やで病氣になつて此地の祖母上の許に――其時はまめであつた――あゝ此れが今日ある原であろうとは。

清治どのゝ家から話の有つたとき我から進んだのは東京の伯父樣もびつくりなさつた、高兄樣はなほ驚きなすつたらう、幾分か政雄樣の事を知て居らしたから、ほんに我ながら何故斯うもまあ志が弱いか、私は失望のきはみふと田園生活といふものに光明を認めたかのやうに思つたのであつた、詩人の歌では樂しそうな美しそうな、けれど實際は。イヱ皆私の罪、私の意志が弱いから、私は今更もう何と云つたつて返らぬと知れば、昔を戀しいとも思はぬ。我は山上清治の妻。もうむかしの八重ではない。

何も夢、もと此地は御兩親の御生れなすつた所、私は此處の土になればよいのである。」

振り返れば原の彼方には我が家が見える、晝寢から起きたか小供の泣き聲が聞える、女は夢からさめたか、忙がしく洗濯物をまとめて立ちあがつた、「私は山上清治の妻、もう昔の八重ではない、あの房子さん――ほんに兄弟の樣だつたが――が政雄樣の二度の奧樣におなりなさらうと、孃ちやまを持ちなさらふと何の私に關係はない、私は山上清治の妻だもの」言つてニッコリ懷より出した一通の手紙引き裂いて川に捨てた、ホッと息をついて家を指した、不思議や眼には輝く露もない、彼の女は諦めを得たのであらうか。

眼先が變つて居て面白い、田園生活の落寞な有樣を一層きかせたらよろしかつたらう。昔の八重が學校時代の花やかさを夢想して、方丈記の一節を引き出したのは殊にあはれが深い、要するに讀みごたへのある作(選者評)

地

○雨の夕

小石川　奈美木翠子

しと〳〵と小歇なく降り注ぎ、夕暮れて未だ間もないが常から人通りの尠ない淋しい街の大方は雨戸を閉ぢて、廻り後れた豆腐屋が眠むさうに呼んで通つた後は一層寂りとして、濡れた小犬が一疋其所の狹い露路に驅け込むともう夜の色は四邊を包んで雨は一頻り強く降り出した。此物淋しい雨の夕を筒袖を裾短に着て、破れて所々骨の露はれた大きな番傘を斜めにして小走りに急いで行く娘がある。

見れば德利を提げて片手には傘と一所に少さいが風呂敷包さへ持ち添へてゐる。

「美代さんぢやないの？」娘は此言に氣が付かぬか答もなく行き過ぎるので。

「美代さんぢやなくつて」今度は少し聲高に呼ばれたので、初めて。

「ハ、誰れ？」漸々その破れた傘から頭を出して薄暗がりに雨を透してジッと窺ふのである。

「オヽ、矢張り美代さんだワ、什麼も其樣だと思つたら」

「アラ、姉さん!!何處へ行たの」ひたと身を倚せて懐かしさうに姉の面を見上げるのである。

「美代さんこそ何處へ、此雨の降るのに、今時分歸路ぢやないてせう」お美代は日々造花の手内職につい隣町まで通ふのである。

「エヽお使ひに…………」視線を力なく地に落して甚く首垂れるのである。

「誰れかお客樣？」「イヽエ、アノ豊……豊田ヨ」氣遣はしさうに姉の面を見上げるのであるが「姉さん嫁ッて？豊田へ、お繼母さんは一人で承知して、もう壽江が何と云つても屹度私が嫁かせるつて、それだものだからお祝ひに一杯飲むのだつて今日は豊田がお鳥目を出して私に行つて來て呉れつて」提げものを重さうに上げて見たが甚く姉の心中を氣遣ふ如てある。



別れた後（選外）　下總　須藤武子

「屹度嫁かせる」此一語はひしとお壽江の胸を刺したのである。「マア何と云ふ……餘りだワ、私死んでも豊田へなんか……オヽ嫌だ」軀中をブル／＼と慄はせたが「アヽお母さんさへ生きて居られたなら這麼思ひ迄はしないて濟むだらうに」我れともなく泪は沸いて肌寒いやうな嫌な氣持に襲はれるのである。

突然車夫の呼ぶ聲に驚愕いて二人は身を展いたが、夜は全く狹い往來を閉ぢて雨は未だ／＼歇みさうもない。

「オヽ美代さん、餘り遲くなつて又叱られるといけないから、もう別れませう、私も今日は其所迄お使に來たのだから。

「エヽ」と計りで悲しさうに足を移すのである。

「美代さん、美代さんチヨットお待ち！」

「何姉さん、何か用？」

「イヽエ別に用ぢやないけれど」と又近く倚つて「此簪は奥樣に頂いたのだけれども私はちと華美だし、お前に上げるからお挿し、今日初めて挿したのに、雨が降るから置いて來るのだつたのを忘れたのが丁度善かッたワネ」自分の髪からソット抜し替へて與るのである。

「姉さん折角ですけれど私不用ないワ」「何故？」「だッて姉さんに遣ッたッて云ふと又……」

「さう、好いぢやないか、外の人に貰つたつて言へばいゝから挿して行らつしやいよ」

「ぢや頂くワ……左樣なら」

「アヽ氣を付けて行らつしやいよ」

妹は冷たき家庭に、姉は淋しき主家に互ひに振り返り振り返り暗を辿つて東と西へ覺束なげに歩む後姿。

一輪の花簪は此淋しい小說に少からず光彩を添へた、わざとらしくなく、自然に人情の奥底から出たので、姉と妹のあはれな境界にも流石は女とおもはせる手際、作者亦文を語るに足る（選者評）

人

○楓

長崎縣　郁の子

私は今故郷の入口の楓の木の下に立つて居ます、それは／＼大きい木、本當に大木です、見上れば、その枝々には嬰兒の手の樣な葉をいくつも／＼重ねて居て静かさはまるで太古の樣です。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

思へば私が父上や母上のお止めなされたのも聞かずに……お友達の花子さんや文子さんが、東京に勉強にいらつしやつたので、私は無性に羨しくてたまらず……東京に出たのは指を折れば、早いもんです、足掛け三年になりますの、丁度その時は、この楓の葉が眞赤に色どられて龍田姫の手で織なされた錦の樣でしたが、今は青葉……本當に浮世は思ふ樣に行くもんではありません、私が未だ東京の學校を卒業もせぬ中に父上は、さまで貧乏ではなかつたんですが、村第一の憎まれ者の高利貸、名はたしか山崎庄藏と云ひました、それに金を借りて相場に手を出したのがそもそも零落の基で父上はそれを苦にして、とーとー病氣になり、去年の十一月に歸らぬ旅に赴きました。がこんな時には不幸が續くものでその上に母上が又病氣、丁度五月の三十日に歸れと手紙が來ましたので、すぐ六月の二日にあちらを立ち五日に歸りました、今日ま

てもう二ヶ月位こつちで母の看病して居ます、東京を立つ時は本當に悲しゆーございましたわ、見送つて吳れたのは高等商業の俊さんがたつた一人、泣いて別れました、こつちに來れば昔の邸は人手にわたり、母上は私の兄樣と二人かすかに暮して居て、兄樣は臺所の仕事から野や畑の仕事まで一人でなすつていらつしやるんですもの、私はつくづく今までの不幸を悲しみました、兄樣に對してはどれ程氣の毒でしたらふ、然し母上も兄樣も何ともおつしやらずに「よく歸つた」と一言おつしやつたきり、しばらく嬉し淚にむせびました、母上の病氣はそれから大分快方に赴き、今では時々郊外の散歩などなさる程になりました、所が其の間東京の俊さんから手紙が來ましたので、開いて見たら出來るなら上京せよとの文言、戀しい俊さんから來いと云つて來るんですもの、行きたい事は行きたいけれど、又母上の病躰や兄樣の辛苦を見ると上京しやうと思つて居た心も失せますし、どうしやうかと三日三晩寢ずに考へましたの、然し格別よい分別も出ず、話すに相手もなく、本當に心配して居ます、此の頃私が獨で此の心中の悶へを慰むる塲所はこの楓の木の下です、あゝ戀しい俊さん、いたはしい母上、氣の毒な兄樣。

＊　＊　＊　＊　＊

夕日はもー沈みました、どこの家からも夕餉の煙の上るのが見へます、私は早く歸らねばなりません、あの村の東のこんもりと茂つた森の影の九品寺の鐘樓から打ち出る、夕暮の鐘が、長い〳〵餘韻を引いて聞へます、さらば、楓の木よ、明日の黃昏又私を慰めて下さい。

秀逸

少しの邪氣無く書き續けられてある、戀しい俊さんいたはしい母上、氣の毒な兄樣に、小さな胸を苦めて居る少女心の眞情は、少女らしく出て居る、文字を離れて作品のよろしきを採る（選者評）

瀨田の蜆取り（選外）　京都　濱野郭公



○友情　武藏　ほたる

「オイいやに靜ぢやあないか」と、曲んだ障子をガタピシと明ける音に、はッと我に返つて見ると、いつ上て來たか親友の根本が突立て居た。

「ア、根本君？はいり玉へ……何少し考て居た所さ」と、起下る中に根本はずつとはいつて來た。火鉢などいふ洒落た物のある筈もなく、薄汚い机の上に怪し氣な小皿が灰落しの代用に成て居て、夫でもマッチ丈は新らしいのが一つ供へてある、蓋し煙草屋の景品なので……

親友は煙草を吸付ながら。

「大分鬱いで居るネ、まあ煙草でも吸ひ玉へ」と、朝日を投り出すのであつた。

根本は僕より三上の、同じ苦學生であるがもう五六年都の風に揉まれたお蔭に、せち辛い世渡の綱に有付て、働きさへすれば衣食して樂に學費を支出する程の收入はある、未來の代議士なのである。

磊落な、細事に頓着しない豪傑風の男だけれど、一種妙に人懐こい所があつて、自分で苦勞した丈、非常に同情に富て居る。

根本は一寸眉に皺をよせながら（之は彼がものいふ時の癖なので）

「君何を考へてた、又生活問題だらう……何も君等は未同志間の坊ちやんで困るよ、全躰苦學でもやらうと云ふものが金の事なんか心配して居て何うなるものか有たらあつた時、なければ無で無理にもすます、時には鹽をなめて飯の代にする位の勇氣がなくては駄目だ」と、滔々懸河の辯をふるひかけたがふと氣が付た樣に調子を落して。

「夫とも何か別に替つた心配でも出來たのかい」と、氣遣はしさうに問はれて、僕は内心慚愧に堪なかつた實に其金問題（も大業だけれど）に就て頭を惱して居たので、まづ差當つては夜學會の月謝を是非明日の晩迄には納めねばならず、夫より何より吐胸をついたのは、昨日迄唯一の命綱にして居た寫字を、何が氣に入らなかつたか、當分出版を見合せるからと、體よく謝絶された事で、幵も明日からは何を働いてパンにしやうかと、獨思案に倦み果てゝ、寧そ根本の所へ出掛て智惠を借やうかと思て居た所であつた。

僕は頭かき〳〵委細を物語ると、根本も大きく點頭いて「さうか、夫は困つたらう……月謝位は何うにでもなるが……何か旨い事があると宜がなあ」と、半獨言の樣に云て一寸頭を傾げたが、思出した樣に膝を打つて

「む、ある〳〵、昨夜宿の亭主が或新聞社で配達を一人欲しがつてると話してたつけ、あれは時間の短いわりに收入は中々あるが……併し君新聞屋が出來るか

い」と、親切に問はれて僕は今の塲合何業でも擇ぶ所てない、殊に文明の魁をする新聞なら同じ配達でも働き心地が宜からうと答へると根本は笑まし氣に。

「君がさういふ積なら早速歸つて話して見やう、善は急げだ、傍へ極りてもすると不可ないから……ぢやあ失敬……」いふかと思ふともうミシ／＼破梯子をならして行て仕舞つた。

僕は何といふ氣輕な、友情に厚い人だらうと、今更の樣に彼の親切が身に泌み／＼と思ひ知られて、挨拶するのも忘れて茫然して居たが、急に思ひ付てせめて後姿でもと遽て、表の障子を開いて見たが、もう影も見えなかつた。

東京のやうな個人的競爭の烈しい都會では、存外友人同士の助け合ふと云ふ塲合がなく、此小説にあるやうな話は實際に於てもいくらあるか知れない。終りの處、茫然として居て、友人が歸つてから氣が附いて後姿でも見やうとする呼吸は、能く人物が表はれて居る。（選者評）

○望みもの

廣島　乙女子

「伯父樣御願がありますが聞て下さいますか」

と雄三は云つた、庭から馳て來て。

雄三は大學の文科に通てゐるので恰度今夏休みなので當地に歸て來たのである至極快活な青年であるので、親類や他人でも中々受けがいゝのだ。

「御願ひ、むゝ何だ」

「伯父樣僕が來年卒業したら僕の望みのものを下さますか」

「はつはつはゝ、之は驚た、大きな坊ちやんがはつはつは何がほしいのか」

「何つて伯父樣の大事なものです」

「己の大事なもの、はあ、あれか御前が始終ほしがつていた彼の時計か」

「はあ時計も戴き度のですがまだ他にあるのです」

「之は／＼、それぢやあ何か云て御覽」

「云ひませうか、云ひ惡ひなあ、伯父樣きつと聞て下いますか」

「云て御覽、其樣に入るなら來年の成績次第さ」

「僕の成績次第で必ですか」

「あゝ」

「伯父樣、あの、美、美保さんを下さい」

＊　＊　＊　＊

美保子は今雄三が父の所に聞きに行つたのを案じて居る所へ雄三は勢よく走つて來た、そして其顔には笑をたゝへているので。

「美保さん」
「はあ如何でしたの」
「安心し給へ」
「えつ許して下すつて」と早喜しげに美しき笑を顔に浮べた。
「僕はうれしかつたよ美保さんは」
「私、私も」耳まで眞赤にして。
「美保さん來年が待ち遠ひね―僕伯父樣に何て云はうかと思て若し伯父樣が馬鹿て怒りでもされたらと思てびく〳〵して云つたのさ」
「でも、よ御座んしたね、私夢のやうですわ」
「美保さん海岸に行かう」
「御父樣笑つたでせう」
「あ、何を云ふのかと思つたつて」
二人は樂しげに海岸の方に行くのである。

突飛なところが無邪氣で面白い、少女的喜劇とも見るべく、別にむつかしい理窟はない(選者評)

○面會　千葉　高橋里子

高等女學校寄宿舍の應接室に語る二人の姉妹がある、姉は四年生で、紺がすりの下には眞白メリンスの襦袢の袖を其の見せて、カシミヤの袴をキッとはいて、髮は花月に飾もない。色白で細面、目には希望の光を湛へて何となく氣高い、誰いふとなく春の女神といはれる、又高女の杉山といへば知らぬ者はないほど秀才美人の名が高い。妹は姉より五ッ年下で十二、是も劣らぬ美少女で丸顔、白メリンスの地に桔梗を染めだした筒袖の美しくオリブ縮緬の帶がよくうつる、眞黑い髮を長く下げて、淡紅色のリボンが光る、「時サン母樣は何て仰言つて。」時子は丸い眼で姉を見上げながら、「母樣は何とも仰言らなくつてよ?唯ね、芳枝はも―一月許も來ないが外出しても家によるのが嫌なのかしら」つて變なお顔して仰言つた事があつてよ、」「さう、私はね一週間に二度づゝ行つたのに今度は一月も行かないでせう、ですからもう一年も皆樣に逢はない樣な氣持がしてほんとに時サンには逢ひたかつたわ、と姉は涙ぐんだ、そして又言葉をつゞけて「でもね母樣の御機嫌が惡いのに行つたつて面白くないし、舍へ歸つても樂しく勉强も出來ないんですもの」「ほんとだわ?。と强く姉の言葉を受けて、私はも―姉さんが戀しくなつて仕方がないから裏門からこッそりと出て途中でお朋友が呼んだつて知らないふりして走つてきたのよ、」「さう」と姉は悲相な顔に微笑、姉妹二人長く話したい

が面會時間が切れたので、二人應接室をてゝ芳枝は妹を門前迄送りてた、「時さん明後日は日曜だから必度行つてよ、母樣に貴女仰言つて頂戴な、」「はあ言つてよ、待つてるわ、ほんとに被來つて頂戴、ね？姉さん、」時子は懷しそーに姉を見据えて「ほんとに久しくお目にかゝらなかつたわ、私この前の日曜に面會に來やうとしたら又母樣に止められてよ、一人て奥へ行つて泣いてたわ、」と涙ぐむ、姉だけに芳枝は時子を慰めて校門を出した、そして可愛い後姿を見えずなる迄見送つた、學校と舍との間の中庭には色々の草花が咲いてゐる、芳枝はそこを通ながら覺えず一寸遊蝶花を取たが、ふと氣がついてあら惡るいわ、といつてほゝをそめた。

舍の二階では先刻から芳枝ら二人を見下ろしてひそひそ話してゐる生徒が五六人、「あの方が杉田さんのお妹さんなの、まー美人ね」「杉田さんによく似て被在しやる事」「でもお二人共お可愛そうよ眞實のお母樣でないんですから、」「今度のお母樣つていふのは佐原の人てお初さんといつてまだ若い美人でせう」「あら美人たつて先のお母樣の方がずつと上よ」「天二物を與へずつて杉田さんも秀才美人の名がお有りなされば一方では家庭があんな樣？いけないものね」等と芳枝の朋友が話し合つてゐる、實に芳枝等二人は憐れなものである、實母は先年歸らぬ道に立出でた、間もなく後妻を迎へたが元より意地惡の後妻、二人の姉妹が實母の樣に仕へるのに、まるで敵の子の樣に取扱ふのである、一月前に芳枝が家へいくと何が氣に入らなかつたのか芳枝にあたり散らかすので其から今迄ゆかなかつたのである。で今日は時子が面會にきて今度はくる樣にといつて行つた、此學校ではいくら近所の人でも皆寄宿しろといふので芳枝も三町許しかないけれども寄宿してゐるのである。繼母の仕打を父に話す事は二人にはないし父は自分の職務は忙しいし加はへて後妻の口が甘いので、斯樣事があらうとは夢にも知らぬのである。

實の處繼母物語には飽き氣味てあるけれど、場所が學校と云ふだけ周圍が新しいので、又一掬の趣味がある(選者評)



小春（選外）　東京　加藤豊子

○破難船　　赤坂　齋藤紫桂子

怒濤のさけびはやう／＼おさまツた、むら雲はちぎれ

ちぎれに走つて行く、二十日ばかりの片われ月、悲しむがごとく、あざけるがごとく輝く光をあびて、先の末吉丸は、白帆はやぶれ帆柱は折れて、靜な波の上にねむる樣にかたむいてゐる、松の老木を渡る風、蕭々として、離れ小島の此處、苔むす巖によせては碎くる波のしぶきをあびて、よし子は二十年の春をすくはれたのであッた。松の雫堅く結むだ口びるに流れいつた時、よし子はフッと眼を開いたが、其身躰が、むくつけき腕にいだかれて居るにおどろいて、又其まゝ、ガックリすると「オヽよし子さんお氣がつかれましたか」我名をよばれて、ツイふり仰ぐと、月は松の梢をもれて、船員の服裝の輝く其面を射た：：：潮風にふかれた顏は色あくまで黑くなッて、薄く口ひげさへ生ひたが、其涼しい、ひとみ、情ある口元、三年前のまゝではないか「マアー貴郎は長樣！」「そうてす！マアー靜にしてゐらッしやい：：：イヤ久らくてしたナー」「ほんに、あの隅田川のボートレースの日、あれきりて御座いましたわね！其後、船におのりになッたとは伺ひましたが、此樣に御助をうけますとは！」「イヤ實に不思議な御縁でした」：：：ア、快活な物言昔のまゝだが、あの定子樣と御わかれになッてから都の地へは一度も御上陸あそばさぬとか：：：然し今の定子樣の御心、御樣子、申上げたら何と思し召そう？よもや、にくいとは仰せられまい、オ、そうだ〳〵折があッたら、御わびしたいと仰せられた定子樣の心を御傳へする時はいまと、決心して「アノ長樣：：：アノ定子樣てすね！」「エ？」と忽ちまゆのくもりにあらぬ方を見いッた「あれは皆母樣のみ心でまつたく定子樣のみ心は今も御變りないのてす」とかろうじて：：：長はハッとおどろいたが、また冷かに、「ア、そうてすか

イヤそんな話はよしませう」「イエ御いやでも御座いませうが一通り御きゝあそばして、アノ定子樣は今ははかない御身で御座います、アノ嫁入てから見るも御いたわしい日にましの御やつれ、ハイそれも皆、貴郎にすまぬとの心づかひ遂に不治の病とかて間もかくお離縁あそばしたのてすが、もう其時はたよる御方もないので：：：ハイ其時は御兩親とも御なくなりて、昨日まで私と二人のわび住居：：ハア私、アノ御存じの友雄が八丈島に居りますとわかりましてそこへ：：：それて少しの間の御別れいたしてのりましたのがアノ末吉丸：：：今頃はさぞ一人淋しく泣てゞ居らッしやいませう：：：どうぞ御願ひで御座います、潔いみ心あはれと思し召して今まての罪はお許になッて下さいませ！」熱心面にあらはれて涙は青白い目を流るゝのてあッた、ック〳〵と聞いてゐた長は：：：ア、そうてあッたか、よし子はたしかに信ずべき女だ、それと共に定子：：：あの柔和い内に犯し難い瞳：：：彼女ばかりはと、あれ程信じてゐたのに、少しばかりの事を疑ッて：：：さぞ定子こそ怨んでゐたろうと思ふと今の定子の上のなつかしい樣なあはれな樣な：：：うるむ聲音に面ふり上げて「ア、今日まで私はあやまッて居ました、實にはづかしいてす、此度之を貴女から渡して下さい、之から半年の航海を卒へたらきッと」「エ？それては御許し下さッて、アノ之を？」とよし子は、自分の事の樣に喜んて、輝くルビー胸にいだいて嬉し涙にむせんだ、一天隅なくはれて、東の方少し白んてゐる、彼方巖の影から二艘三艘艪の音勇ましう船歌聞えて來た。

別に取立てゝ言ふ程のこともないが、よし子と云ふ女と、長との間に何等の關係がないのと、よし子が定子の爲に寃を雪いてやらうとする眞實と、一寸他の小說と型を異にして居る、難破船は作者の工夫した事てあらうけれど、それほど感じなかつた（選評者）

新笑話　編輯局選

天　○婉曲

下谷區仲徒町三丁目一番地　入江かつみ

ピアノに對せる令孃「先生私は譜を見て彈きましたのですが如何で御座いましやう」

先生「恐れ入つた御手際ですがその譜の本には誤植が多いに違ありませむ」

地　○才子多病

橫濱山手共立女學校　山口直子

甲「ネー君昔しから美人薄命才子多病なんて云ふけどあてにならんね。

乙「ナゼ？僕はそう思ふがなー、甲「だつて僕——病氣なんかしたことないもの。

人　○明日の新聞

小石川區原町一〇　明石光子

何か包まうと思つて今年五才になる敏雄さんに「新聞紙もつてきて頂戴」といひますと今日の新聞をもつてきた、で「今日のはつかつて了つてはいけないから外のもつてきて頂だいな」といひますと「ぢや明日の新聞ならいゝだらう」

秀逸

○借りる人ど貸す人

京橋　磯千高

家を借りる人「こゝは電車が通つて便利だが騷々しいだろうな」貸す人「いゝえ一と月位經つと騷々しいとは思ひません」借りる人「それては一と月位經つてから借りませう」

○晝寢

伊勢　蘆の舍女史

子「母さんはうそを云ひました、昨日三つねると公園へつれて行くと云ひましたてしよー、なぜつれて行つてもらへませんか」

母「昨日からまだ一つしかねないよ」

子「だつて母ちやん僕は晝寢を二つしたもの」

○緣談

京橋　梅月

易者「御緣談は宜しう御座いませぬ先樣がもう一つお年が行つてますと至極良緣てすが」

見て貰ふ人「それては來年になつてから妻合すことに致しませう」

○藥價

日本橋　栗山紫柳子

効能神の如く如何なる難治の慢性症にても二週間にて必ず根治す藥價三日分二十錢七日分四十五錢二週間分八十錢三週間分一圓二十五錢

○帷子

紫淸女史

非常の暑さに、家の者は、皆帷子を着て居たら、一番末の弟は、「妾にもカヤの着物を着せて下さい」

○聞く

愛知　小川千代

母「お前は少しも私のいふことを聞かないねー」

子「イゝエ。今聞きました」

○初物

宮崎ゆき子

子供「お祖父さん、初物食うと七十五

日生き延るて云つたねー、祖父「あゝ」子供「だかから太昔の人は長生きしたんだ」祖父「なぜ」子供「初物の出來たて許り食つてたからさ」

○書名　廣島　花藤春枝

老人机上の書籍を指しながら「あれは何だ」「字引です」「西洋では字引の事を何と云ふか」「デクショナリーと申します」「何だ字引書也か」「成程ナ」

○勉强　大阪　花すみれ

母「お前やこんなに夜の更けるまで勉强をしたら又頭痛がしますよそして又朝寢をするから早く寢なさいよ」娘「いゝえ勉强とは違ひますよ小説を讀んで居るのです

○御飯と握手　本郷　渡邊蕭子

作爺が畑に行くので乳母やがお握りをこしらえて居りますと英ちやんが見て「アラおかしい事乳母がお飯と握手して居るよ。

○藪醫者　香川　鈴木柳糸女

一人の年若き婦人泣入る小兒を抱きつゝ　女「先生只今私が一寸裏へ行て居ました間て火箸て眼を突きました故御診察を賴ます」先生「是は手遲れになりましたね」女「でもすぐ連れて參つたので御座い舛よ」

○黒に染まる　百々　章子

母「娘や!! お前もモー十六、朱にそまれば赤うなるッてナ、早く何處へ小間使にでも置て頂く樣にしなさい」娘「だつて御母樣、釜の臀を御覽なさい、火にそまつて黒くなるじやありませんか。

○筆のありか　安藝　さゞなみ

女「貴君何か見へませんの?」男「アノ最前まで使つてた筆が何處へかくれたか」女「オヤ貴君お耳に」

○植木屋　兵庫　井上一子

お客「オイ植木屋此植木は、五錢五厘とあるが、五厘まけておけ」植木屋「まけることあてきんてがす」お客「なんて、てきんのだえ」植木屋「なんてていい元が植木だんべい價切られるとつかんから」

○子供　福岡　波月

子供「お父さん昔の武士はどんなに頭が大きかつたでしよう」父「何故だ」子供「何故つてあなた城を枕に討死するつて云ふもの」

○はだか　紀伊　鷹本かをる

母「坊や、はだかていては、お巡査さんに、しかられますよ」坊「デモお母さん、罪金出すと、けんたいだはね」

○握手　京都　竹葉女史

田舎者初めて京見物し西洋人の盛んに握手しつゝあるのを見て、あーあゝ西洋の醫師は親切者だ歩きながら脈を見ている。

○機織り　福岡　白月

歸省の娘に母「お前嫂ばかりせせらないでも機でも少しお織りな。」娘「一寸此織る物に糸通して頂戴。チヤランパタツパタツアー母樣〳〵糸が切れてよー

○手紙　栃木　江面眉葉子

小兒「お父さん何故手拭ッて云ふのー」父「手を拭くからさ、」小兒「デモ淸どんは帶がないつて手拭をしめてますよ、父「其時は三尺よ

編輯局選

はがき文

特別第一賞

○屑も錦

神戸　宮本たき子

母様が粗末にしてはと、やかましう仰有つたお蔭で一昨年の春から溜めた、琴やヴァ井オリンの糸屑を仕上げたら、此夏は、立派な晴衣が一枚、織られました。

織られたるは何の曲。

特別第二賞

○晴雨計

神田　筑紫ふみ子

一番簡單で明瞭でそして少しも面倒でない、一寸窓をあけると、伊豆の連山の色が青ければお天氣、灰色ならば雨天、未だに一度も違つた事がない。

我家の天氣豫報。

天

○しやしん

大坂東區東高津南元町百十番地　橋本賀壽尾

昨日私は友達と濱寺へ行きましたが、今日の新聞に濱寺海水浴場の寫眞が出て居ますので、何氣無く見ますと冷汗が出ましたわ、だつて私が彼方向いてかゞんで居る處が、眞正面に寫つてるんですもの。

こちら向いて御覽。

地

○愉快な事

小石川小日向水道端荒木坂上　吉田妻子

現今學生社會の腐敗して居る中で、堅固な心、純潔な精神を以つて、修業していらつしやる方を、見出すと私は一番愉快に感じます。

これある哉。

人

○理想の花

上州碓氷郡九十九村大字小日向　横田君代子

ロウズを以て墻を作り中を七分して菊にて境を付け一間を福壽草に次はスミレ第三はアヤメの間眞中を撫子に第五六の間は鳳仙花毛糸桔梗に雜居を命じ最後の間

は百合朝顔に與へ、牡丹芍藥は鉢にして番兵に置きたい。

春の使者は蓮の間に招ず。

秀逸

○夕立の跡　四谷かへで

夕方かけて一しきりふつた雨は、さつぱり晴れて、跡は虹の影きよく、かゞやいた西日はうつくしう、蝸牛の頭を照らして居る。

蝸牛、蝸牛、お前の家が燒けるぞ。

○續虫の社會　麴町淺井千鳥

蚊は高利貸の如く人の血を絞りて腹を滿し、泥を齋家とせば蟻は建築家なり、蠅は冒險家にして蛀虫は彫刻師なり、蛚をして詩人とせば蟖蟲は裁縫師なり、水馬は漁夫の如く土掘るお螻は田舍のお百姓。

「虫の社會」は一度出たり、之れ第二、續け得て奇抜。

○果物の色　丹波紫かつら

可愛糸ちやんの頰の樣な桃の色、兄さんの軍服みたいな柿の色、アフリカ人の樣な栗の色、そして苺の色は恥しかつた時の妾の顏色。

葡萄の紫は袴の色。

○故　鄕　奈良白藤女

たのしき歸省の夢さめて、今宵の便船に又も京へ歸ろうとするのである、暫しなりとも楢の葉越に洩れ出る宵月に昔を偲ばんとすれば、心なき妹の「姉さん可笑のよ、お月樣ばかし見て、東京にはお月樣がないの」。

天の原ふりさけみれば……。

○植物採集　千葉高橋里子

午前採集して來た植物を押さうと、甘しい晝飯もそこそこにすまして、さて見ればカバンが見えぬ、扨どうしたろうと大さはぎして探せば庭にまゝごとせる姪が得意に切り刻んでゐるカバンは飛だ所へ投げ捨てゝ。

香魂既に空し。

○埴生の宿　埼玉むらなぎ

埴生の宿もわが宿玉のよそひうらやまじ、と歌ひながらひとり畑で茄子をちぎつて居りますと、そばを通る二人のハイカラ女學生が破れた我家と私とを見くらべて、何やら笑つて話ながら行きました。

高潔。

○心地好いもの　北越武子

御祭りに御客樣が大勢來た時と稻穗の出揃ッたのを見るのと朝早く御隣や後の家の表戸の開かない間にひぐらしの聲を聞きながら水をくむのと他所行の支度がすッかり出來て母樣行ッて參りますと云ふ時。

話するに此お孃樣は内氣でない。

○噫何とせう　伊勢　一翠女史

故郷の夏景色をとの在京の友の求に、長々と書いつけた手紙に添へて、櫻の靑葉と薔薇の押花、それから不出來な寫生畫五葉とは、夫々送る準備が出來たが、只遺憾なは今啼く時鳥！噫、これはかりは何とせう？。

蓄音器。

○各女學生の氣性　京橋　磯　千鳥

高等師範女子大學生徒は活潑なり、女學館生徒は柔和なり、跡見學校生徒は貞實なり、美術學校生徒は沈着、某學校生徒は墮落、學習院女子部は古風なれども女學館はハイカラなり。

當らずと雖も遠からず。

○夜の女中部屋　湘南　富　久子

こゝ六疊の中央にほの暗き燈火一つ、小間使は國許の母君に便りすべく机の前に、奥女中は己が衣縫ふとて懸命に針運ばせつ、おだいどこの下女は例の通り足長々と白河夜舟。



三原山　（選外）　東京　氷村とれ子

賤の女も人の子なり。

○ゑびす講　名古屋　小山かく子

善美を盡した紙幣銀貨銅貨柿栗餅魚類抔が眩い程二脚の机に山の如く積まれた、然し惠比須樣も大黑樣も笑つて御手を觸れ樣ともなさらない。

商賣繁昌、御馳走澤山。

○寫眞　わすれな草

大兄樣は角帽、次の兄樣は學習院の制服姿、姉樣は江戶褄模樣に立矢の字、私と妹が鹽瀨の袴で寫した仲よしはらからの繪姿、今日丸木から屆いたのを見ればああ私の目は：：笑つたために糸の樣に：：：。

諸友面影の光彩たらしめよ。

○下女の歌　下谷　伊庭　磯子

下女の靜、臺所で面白そうに何か歌つて居りますからそつと行つてきいて居ましたら、斯樣に歌つて居りました。蒟蒻の背骨で躓いて、ひやつて豆腐で咽燒いて、十六七の男の婆樣にとうたらば、夏降る雪に寒茄子、ア、ヨイ、ヨイ〳〵。

美音、鼠を走らす。

○合奏　赤坂武代子

月は今しも築山の松が枝にかゝれりあゝいゝ月美代さん合奏しませうと姉はオルガンの傍に立つたそれでは姉様離れ小島をヴハイヲリン肩に弓をあげた水や空空や水ふる。

天地の音樂。

○忘れ草　小石川　小林さゆり女

私の家の墓には忘れ草と云ふ草があつて小さい時よく友達と行つては、病氣を忘れる怖い夢を忘れると、草の上へ寢ころんで遊んだものだが、其時分の樂しさは、未だに忘れずに居ます。

忘れ草あれば忘れな草あり。

○燈火の美　橫濱　吉川英子

燈火の美は多く水に伴ふ、雨の夜に若葉もる影、雪の夜に窓洩る影、池を隔てゝあかるき影、岸に連りて波に動く影。

不知火は海上に燃ゆ。

○蚊の三日　加賀美津惠

一日、机の書生にベンチの女學生。二日、昨宵御孃様の後について蚊張の中へ入つたら今朝いつしよに疊まれて終日蟄居。三日、晝寢の奥様。

吾輩は蚊である。

○夏の往來　橫濱　千秋子

男子は働き子供は遊び車夫は走り氷屋は來るし水撒は來るし犬や牛馬は通るしパン屋は往くし硝子屋は行くし色々の人が湯玉の汗を流して通る。

英國人、米國人。

○母の愛　安藤小羊

まだ私が女學校にいました時に故郷の母様から、着物を送つて下さいましたその中に只一つの苹果これは今年初めてなつたのであるがお前に送るからとかいてありました、私、思はず涙がこぼれました。

林檎以外の味ひ。

○朝の半時　阿波　内田しげり

妾は朝小ぐらい内に起き、牛にやる草をかりに行き、籠に一ぱい入れば、歸りて朝飯を頂戴し、其れより畑に行くのです。

其れより起きる人もあり。

○好きなもの　相模　[illegible]千鳥

私の宅では父様はうたひがお好き、法科大學にいらつしやる兄様は今に私の姉様になる松平さんの君子さんがお好きらしいわ。學習院中學の兄様はハーモニカと近松全集とですつて。母様は子供がお好き。

學習院君、語るに足る。

○靜ちやん　房州　藤井盈江

四月になると東京へ、行くのです。わたし何も文屋の康秀が、誘ふのではありません。只修業のために、ゆくのであります。いつて女學校へ、入學して、墮落しないつもりであります。

文屋の康秀は奇拔。

○末の男　和歌山　岡本民枝子

私は長女です妹四名あります皆それぞれ學校へ行つてゐるのよ此度六番目に男子出産したのよ、それは〳〵母が可愛がること。

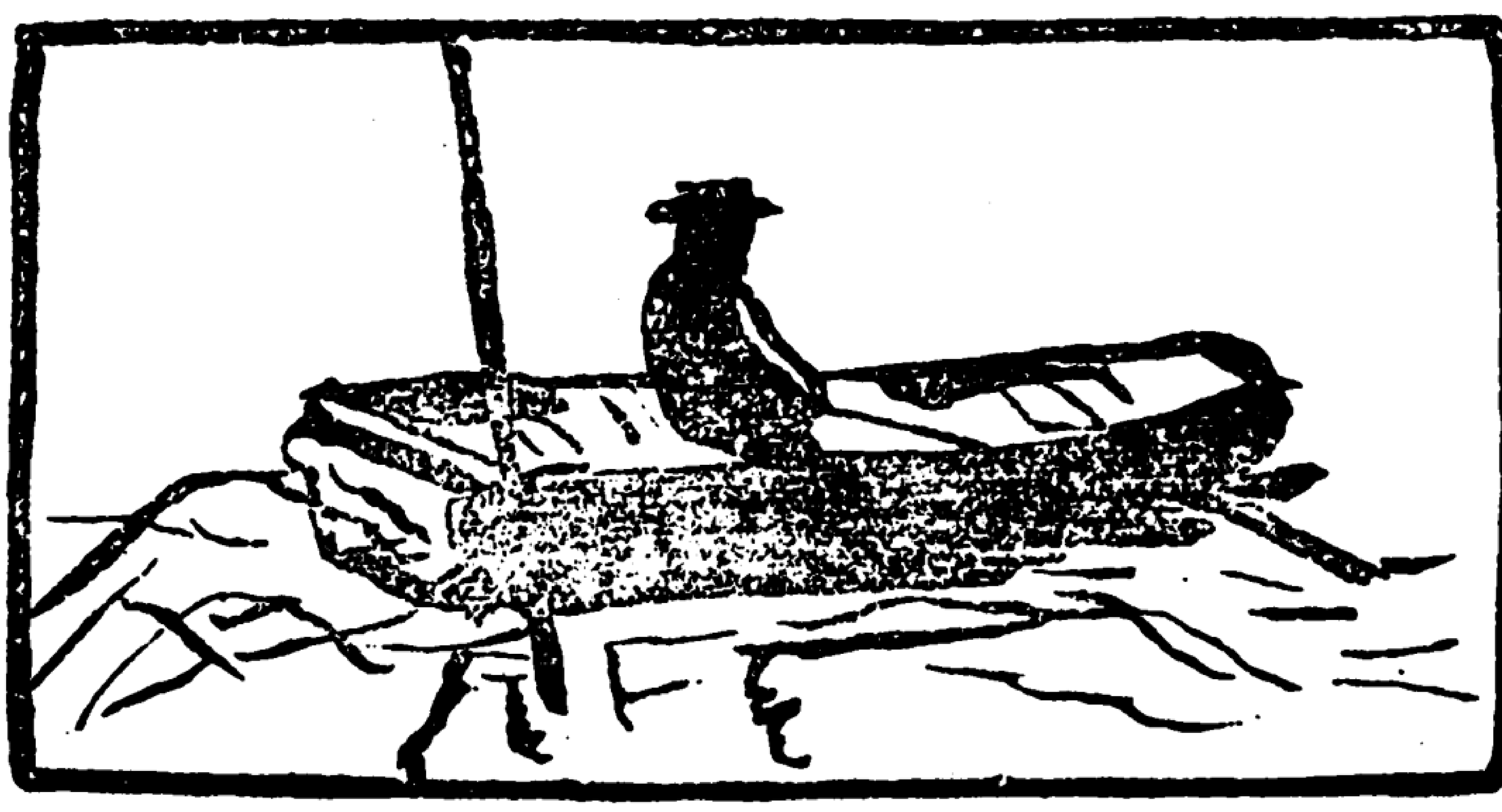
それんてはいけませぬ。

○スケッチ　下野　波多野まさ子

大洗の磯打つ白波淺黃に靑に藍に、水平線の沖には眞黑い波、犬吠岬の綠の松がオリブに紫に、尖端のは紺靑の松、曉の空際に帶黃だ雲時に樺に紫紺に、瑠璃の天上には薄黑の雲が棚引く、天の配合自然のくまどり。

色彩の觀察に富む。

一繪一詠（選外）　深川　齋藤チカ子



○落たる木果　能登　北島久子

今朝早く起きて齒楊枝をつかひながら裏の庭へ出て林檎の木の下へ行きましたらまあ見事なのが二つ落ちて居ましたので私は早速お母さんとこへ持つていつてあげました。

○妾のお願　德島　岡田白梅

妾は學校のお友達が、一人も缺げなく皆揃つて、ツヤ〳〵したお顏で、九月七日に登校してもらいたいと、それぱかり思つています。

○道すがら　京都　島本久惠

今日の歌會は何だろふ靑葉か朝貌かそれとも夕涼かしらもしそーだと月を入れて川を入れよーかしらあ螢にしよーおー私とした事未だだいも分らないのに。

○鳥取市　鳥取　坂本朴樹子

千古の恨みを永刧に語らざる久松山は市の東北に只默として鳥取市を哀れむが如く見下して居る市の人も朝な夕な三十二萬五千石をさゝやきて之れに省みない噫未來に於ける我が市の發展や何時。

○吾が望み　濱田　小松原德子

我が國人が都鄙を問はず、皆自然の趣味に富むこと、繪畫音樂が多く發達すると、西洋的家風になると、祖父樣や祖母樣が、文明的に成られると、次には女子文

壇記者樣の如き叔父樣が持ちたいこと。

○夏の夜　上毛　あら井

夕餉を終り二疊の――書齋に入り讀さしの書を繙けば蚊に刺れ名もしれぬ蝶は障子にビイ〳〵と騒々しく洋燈の中や硯の中や本の上に落ちる、顔に打つかる、ほんとに夏の夜はきらい。

○我が家に來る人　岐阜　紫葉

一番早く來るのが新聞屋さん次ぎは牛乳配達ラッパを吹いて來るのは飴屋さん小供連れて來るのはお乞食走つて來るのは郵便配達夕方になると來るのが八百屋に魚屋さん最後は私の一番好きなお父樣。

○九段坂上の一夕　白梅

坂上に立て、遙かに眺むれば暮色蒼然、オリーブ色の雲濃く、品川沖と連り、帆船三四、近くは、ニコライ教堂遠くは、上野の森、淺草觀音、五重塔凌雲閣大厦高樓の高く空に、聳え道行く人影は蟻の如し、この一瞬時に東京大半を一目に。

○白ばら　伊勢　田中芙蓉

今朝姿見の前に立ちましたら、玉の樣な、露をふくんだばら一輪、上の隅て香を放つて居りました。まあどなたがと思つて、手にとらうとしたら、露がホロリと、白粉の中へ。

○花の位　横濱　千秋子

白百合を神樣と仰げば蓮花は佛樣なり撫子を男子と思へば女郎花は女子の如く櫻を軍人とせば柳は農夫の如し梅を君子と呼べば蘭は詩人なり菊花を貴人と崇めれば菫は實に神の子の如く思はれる。

○我家の四隣　京都　登久子

北隣りは工場て職工が澤山居て、朝から晩まで、流行歌の歌ひ續け南隣りは御隱居樣が入らして琴や三味線で毎日〳〵御樂しみ裏の隣りは淨瑠璃の師匠でピンピンと鳴りつゞけ前は下宿て明笛、尺八ハーモニカ、果ては詩を吟じるなどいつも四方から賑やかな事よ。

○よく似たもの　豊前　中村春濤

愛と色情、愛敬とお世事、温和と柔弱、自尊とうぬぼれ、自愛と利己、謙遜と不見識、活潑と亂暴、節儉と吝嗇、奇人と狂人、善人とお人よし、それから今の人情と吉野紙と……。

○妾の庇髮　神戸　まさ子

まあ、それは〳〵大變な勢て、蜂がとんで來たもんですから、あつと驚してにげ樣とする途端、あゝ！蜂は妾の庇髮の中へ。いつだつたか兄樣が「庇髮蜂が入つて大騒」て仰つた事を思出して誰も見て居ないのに、妾恥しいやら恐いやら。

○安いもの　東京　芝野水江

兄は新聞程安いものはないと云へば、弟は端書の方が安いと云ひ、父上は家て飲むお酒ですつて、私は女子文壇よ。

○私が家　名古屋　森部蝶子

私が家は野中の一ッ家、前の川邊には今日此頃は、し

のすゝきや女郎花、桔梗も咲けば、尾花も咲く、夜は父樣は尺八母樣は三味、兄樣にお歌を願ひ、私はお琴、浮世の風は何處に吹く、お暇もあらばたづねて御座れ。

○よそながら　大坂　ひろ子

過る日堺の大濱を逍遙の歸り偶と目に付きしは、何時も誌上に美はしの花咲かせ給へる君ならずやと思はるゝ竹叟寓と言ふ門標、海に向つた高樓の欄によりて遙に沖を眺めさせ給へる美はしの君。

○町はづれ　堺　竹叟文子

大きな蝙蝠が蚊を喰ふか或は高く低く、夕月の影を碎いて藪から流れて出る小川に懸つて居る、板橋を馬追ふて歸る馬士の唄長う藪のかなたに消えて、街燈に飛ぶ虫の大きな影にぢやれた犬も去つて：：遠くに按摩の笛。

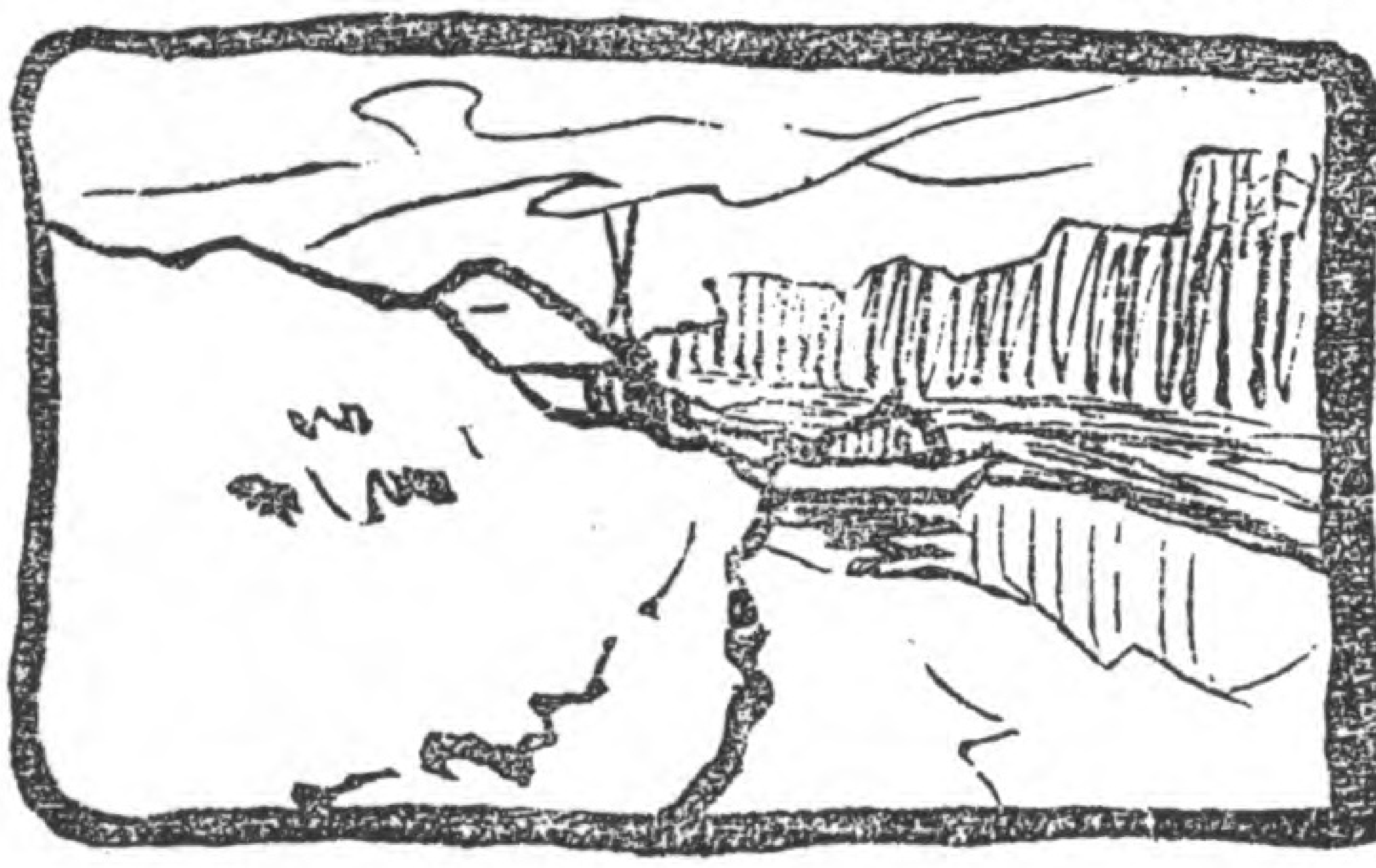
○悲喜交も到る　遠江　中山ふじ子

汗水滴して働いた金で買つた袴は家主に持つて行かれる、夫婦喧嘩をする、小供はしほ／＼登校する、優等一番の證書を抱へて威勢よく歸る、兩人大喜び、頭を撫る家主をどなる。

○夜中のお針　長江尙子

夜十二時頃床に着く間もなく、お隣の奥樣に起されて明日の朝の五時の汽車迄に京風通の單物を仕立下されとの事其より縫ひ掛けて四時半頃に出來上り火延を掛て居る時停車場にて汽笛の聲。

舟江（選外）　宮城　渡邊しげ子



○桔梗の束　大阪　べにつゆ

君よ、瓶に挿さずや、わが情ぞと友は桔梗の花束を床に投げぬ。淸香室に滿ちて葩の紫なるがほろゝとこぼれたり。あはれ市に花召せと呼ぶ童女の襟の破れに、白銅一つ與へて買ひ取りし秋の姿はこれかや。

○御飯のおいしかつた事　名古屋　宮地すみ子

朝早く起き野良に出て新らしい空氣を吸つて家に歸つて膳に向つた時、一家六人睦まじく笑ひ興じて御飯を食べた時、學校から運動會に行つて高い山の上から靑く澄んで居る池やお米のたくさん實つて居る畑を眺めて食べた時。

○郵便脚夫　相模　ゆたか

三伏の暑さは眼も眩まん許り、龜の甲の樣な地を草鞋一つに踏み躙る郵便脚夫、いとほしの事に、御苦勞ですねお暑いのに誠に濟みませんよ、と勞れば日頃無骨な彼れは、凉し氣な笑を洩し、何うしまして。

○水晶の巢　京橋　原孝子

掃除したる庭を打水したるに桐、柿の木の間を大なる

蜘蛛の、巣を作て見苦ければさつと許、打水したるに巣は破ずして水晶をつるしたる様、なりたれば遂に其まゝになし置ぬ。

○秋の聲　淺野梅子

此間まで、大海原のやうに、蒼然と見えた田の面が、漸く黄ばむで、そよ〳〵と吹いて來る風が、やゝ肌寒く感じる様になつたのは已に秋が立た證據で、蔓の枯た瓜畑や竈の下でなく蟋蟀の聲が、秋の聲である。

○芝居見　福岡　増田一子

一寸春子さん、貴女の御辨當は何んてす、エッ生菓子てすて、洒落てるわ、千代子さんのは？玉子、私の母は何時も豆がよかろつて困るのよ、秀子さん貴女の燒芋一ッと替へて頂戴な。

○寫眞帖　淡路　伊藤綾子

りゝしい髯にきつい眼をして居るは軍人の叔父様背廣の服をゆつたりときた大のハイカラは高等學校の兄様漆の様な髪に紫袴は妾と姉様此外たくさん挾んてあるが皆よそ行顔をして居る只弟の秀夫だけは無邪氣に笑つてる。

○感謝　金澤　清流杜若女

……織るにも縫ふにも暇なき故本意なきながら糸代にもと溜め置きたる金三圓御送り申候間浴衣買ひて此頃の暑さを凌ぎなされ候……母より……ア、辱なや……ハラ〳〵と落つる涙に思はずも有難き御手紙を汚がしぬ。

○田舍の夕暮　上毛　關口はつ子

淺間山より噴出す灰色の煙がだん〳〵變るにつれて、夜の帳はをちの森こちの林、はては野原家までもどんより包だ、見上る空は白く地は黒く山紫に灯提あかくくねりくねつた田圃道を縫てゆく。

○衝突の原因　北海道　渡邊逸子

下るべきに下り屈すべきに屈するは克く伸ぶる所以なり然るに方今伸ぶべからざるを伸び威張るべからざるに威張る者多し故に物其平を得ずして稍々もすれば相衝突す。

○夏の七快　長崎　栗田壽賀子

朝木蔭に洗濯する、遠山の蟬の聲、日盛りに海水に泳ぐ、碧瑠璃の空に銀の如き雲を見る、夕朝顔の蕾を數ふる、月夜に散歩する、美しきコップに清水を溢るゝばかり汲む。

○物賣り　埼玉　野の花

女の子が笊を小脇に抱え納豆ー納豆と呼べば手拭を吉原被りにして太き括り紐に箱下げたるを脇に襷がけして淡路島通ふ千鳥の戀の辻占ー皺がれたる老人の聲はりあげて花ヱー花ヱー。

○綠色　神戸　小羊子

麥の畑早苗の小田、靑葉の山、若草の野邊、是等は皆綠色の集合てす綠程心地の好い色は他に有りません綠は眞面目な靑年を意味する理想の色です。

○月見草　大坂　偲子

時鳥青葉に啼く頃、重き病氣に臥してより此頃は、身の來し方行末など思ひ煩らひ、文讀むさへも懶き餘り、やをら身を起してにじり出づれば、ぱつと黄いな花粉を飛ばしぬ、あはれ一輪の、月見草。

○墓詣　栃木　岸よし子

楮の青葉がこんもりと茂つてゐる下に、陸軍歩兵伍長大山俊一之墓と記した碑がある。その前に十二三の少女。一枝の桔梗を手向けてねんごろに額づいた。夕日は西の山に舂づいて。夕べを送る鐘の音が響いてきた。

○きまりが惡い　東京　とき子

今朝は寢忘したので、大急ぎでお仕度をして學校に行けば目やにが付いて居たので笑はれきまりが惡かつたから急いで自分の席に着き、風呂敷包を開けると、アラマア妹のと間違つて居るは。

○燕　香川　青葉女史

あゝいぢらしの燕よ、今年も慕ひ來るか、過ぎにし初春屋根を繕はんが爲に、過ちて汝が住み家を害ひしよされど愛らしき燕よ、いとしき汝が子等を育てよや。

○靜ちやんの居室　河内　松尾むらさき

靜ちやんの居室は母さんのお化粧室で圓窓の下に小さな机がをいてあります。其机の上は何時も奇麗に方付けられて居つて、妾が買つてやつた寫眞立てにはご自分の寫眞が大事そうに立てゝあります。



水海踊り（選外）　陸中　百合女

○あはれの妹　大和　植田郁子

妹のすきな、菫たんぽゝなどは、冬に枯れても、春又美しく、咲くのに、あはれ妹は、三とせ前に逝つたぎり、一度も歸つてこない。

○夏休み　德島　坂野白露

やつと我が家に歸ると皆なが朝から晩まで忙はしゆうしてゐるから、それで私はお手傳ひすると色は黒く焦るし體はふとるしこれこそ立派な第三國民の母となれるでしやうか。

○ノーウヰック　山本たけ

名高いノーヰックは小さい舟にひかれて、巴のドックに入りました、滅茶苦茶に破れ何れがマストかデッキか分りません、之が大威張で津輕海峽を、横ぎつたものかと思ふと、可愛相でたまりません。

○十五夜　南葛飾　中里きん子

東山より出て常より大きく皎々と照り渡る月は、江戸川の清き流れに宿り、河畔の薄尾花は風に浪うち、草葉にすだく蟲の音なつかしく、家毎の窓には、月に供へし、團子、すゝきなどの、影いと面白し。

○點滴　埼玉　大野てい子

軒より落つる點滴は微妙にして。岩間より落つる點滴は幽邃である。而して梢より落下する點滴は活けるが如く。水槽より洩るゝ點滴は恰も死せるが如き音響を有す。

○妾が家　美濃　西村秋子

妾の家は前にも高山あり裏も大平山岳とて大山をひかへ且つ裏口の清水は晝夜やまず滴れるを聞く夜に入れば森によどりの鳴くもほのかに聞ゆ。

○笠　佐渡　谷川桂月

此の酷い暑さに、甚左衛門の妻の獨り、笠冠らざるはと、思ひ〳〵近よれば、笠は路傍千草の蔭に安らけく眠れる乳兒の、日除となつてゐるのであつた。

○土用　阿波　内田みばへ

今年も早や土用に入れり、昨日と思ふ新年の雜煮も歌留多も既に半年前の昔となれるなり、人生は唯前進するのみ、然して其前進の速力亦極めて急なり。

○朝　山形　零紅梅女

朝まだき弟の文ちやんと練兵塲に行つて深呼吸をしてる中、千歳山からお日様が顔を出し、町にはかまどの烟いと豊に、西は謂はゆる最上の平野にして青々たる稻葉朝風にゆらぐ。

○清水　岩代　根本松江

毎朝薄暗い内に、草刈りに行く私等が、先を爭て飲む清水があるのです。今朝こそ私がと眞先に馳て行きますと、マア蛙が一匹澄ました顔で這入て居たのです。

○手傳　韓國　手塚靜子

此夏の休暇には兄様や父上の田畑の草拔きでも手傳て上げようと思つて、一寸の間手傳て見ましたが、すぐ嫌な氣になつて止めました、て我身の去年と變つたに驚きました。

○水入らず　和歌山　百合子

母様は野菜を作るにお骨折り、妾は二坪半の地面へお花をぎッしり、今は朝顔や夕顔で草の門も出來て、蝶の君には絶えず成らッしやる、父様は色んな鳥を澤山飼ふので、大事の大事の、花畑を大なしにされる。

○テニス　大坂　妹尾正子

お日様西にかくれた暫し散歩と友を誘ふ、と見る運動塲の北の隅ネットを渡る涼風そよ〳〵と、あらたまらぬ事よ…いつしか勝負を爭ふ球の音ぽん〳〵〳〵、左右前後攻めては守る急がしさ。

○活動寫眞　越中　清女

樂隊がなる舞臺は眞暗、中央の白幕に寫るは寫るは、南山の激戰、二百三高地奉天の占領、さては旅順の海戰にバルチック艦隊の全滅など、種々、見るもの聞くもの、里人の目には一として珍ならざるはなし。

○蝶　三河　白井やぎえ

朝飯をしてゐますと、幾時もお庭で見る蝶が舞つて來て、お椀へとまらふとするので思はず袂て拂ひますと力無い羽翅をして去つて仕舞ひました。

誌友倶樂部

○衣服に就て　（課題）

○　東京　吉江子

私の一番好きな衣服は姉さんとおそろひの友禪それからこの夏仕立てた明石、又理想して云へば春夏秋冬四季に着る衣服三十枚程づゝ揃へて置いてとつかへしつかへ着て見たいがそれは私お出世してからよ。

○　京都　郭公

流行は一切追はない事にして居ります、何故かと云ふと一つの色がだれも似合ふわけは有りません私はヂミなのが似合ないので一番よく似合ふと自分も思ひ人も云はれるのは矢絣で色は濃い紫か納戸又は濃い海老茶、八丈も好きてす帶は縮緬と色繻子の上品なもの、禮服は黑か小豆色か葡萄色帶は薄色の時は黑地に金て大きな竹の葉を織り出したもの黑い時は金茶地に浪などを織り出したものなどが好きてす私は小さい時から織物の帶をしてをりますから柔い帶は常てもきらいてす。

○　大坂　みつ子

妾の着物は夏冬とも平生はいつも木綿のたき縞て帶はメレンスと黑繻子の腹合せてす、今いゝ着物にこしらへたいのは菊模樣のある紋おめして、あづき色、帶はしゆちんの黑地に大きな鶴のあるのをのぞんでいます、帶上は絹ちゞみ、色は、ときのごく薄いので半分白、からげひもは赤博多で無地、私はこれだけをほんとに欲しいと思つています。

○　日高河畔　阪本はる子

妾は田舍者て都會の人達のやうに四季毎に變つた着物をよーきませんわ只自分のこしらへた木綿のばかりなの晴着といへば春蠶仕事の暇にお蠶を飼ふた糸てそれも自分が織つて着るのよ。

○　東京芝野　水江女

いくら好いと思ても赤い花の友禪などはまさか着られやしない、だから父上にお願をして鼠色の縮緬の裾模樣を買て戴いたの、そりやいゝことよ、松葉と梅花が出て居て、母上は帶がつり合ないからつて赤帶も買て下さいました、私は是れを思ふと親孝行しなくては濟まないと思ひます。

○　小石川　こてふ

私の理想の衣服、を申して見ませふ、冬物て、お模樣の三枚重れ、先づ切れ地は濵縮緬のリユーとしたの、色は葡萄鼠、模樣は勢のいゝ波を、大きく江戸褄にして、下着は白の紋羽二重の大柄を二枚重ね、帶は厚板織、紅梅茶の地色へ孔雀の羽根を金とぼしにするのです、長襦絆は緋無地の、紋縮緬ですよ、之れが私の理想服なの。

○　埼玉　佐久間

好きな色は葡萄色、桔梗色、時色、玉子色、藤色など、模樣は秋の七草、波に千鳥、山水、縞物てわかすりの入た物私は夏冬共かすりがすき、衿はいつも白、帶はせず、きらい、ゆるむから、袴は海老茶、しこん共有けれどしこんがすき海老茶はふだんに用ひる裁縫の時はお話する樣な事はないの只自分の物だと早く出來上ると母に笑はれるだけ。

○　京都　岩淵國子

京の着だふれと云ひますが私はちつとも好い着物はほしくありません唯着て見たいと思ふのはトキ色の洋服なの。そして柄は四季ともヘヂなすつぱりしたのが好よ今着てるのはれ紅梅織とか云ふ白い瓦斯の樣なので柄は藍色の井の字形に茶色の矢がすりが通つてるのよ其に紫袴かさもなくば紫じゆすに片方はリリーとチエリーとローズの模樣を散らしたふくりんの帶、じゆばんの袖はトキ色よ。（八月上旬）

○　大坂　悠月

私は筒袖がすきてす、色合縞柄模樣などはあまりはてなのはきらい、それても小さいてすからあまりこまいものもきませんが、それから筒袖の破布が一番すきてす、けれどみんな母樣がちやんとして下さいますので、たゞそれをきるだけて好きのきらひのつてそんなにわかりません。

○　久留米　あさ子

私、着物の縞柄は餘り、はでゞなく、色合は、さほど美しくなくとも、何度洗つても〳〵古びれない、久留米絣や久留米縞のやうなのが好き、夏の衣服ては、大和絣か又は越後縮か伊勢崎銘仙など、冬のは東京双子か、大島つむぎ、等何れも、地質がよくて色の變らない、こんなのが私の好きな着物てす。

○　東京　とき子

現在着て居る衣服をお話致しますと私はかすり

物を好みます故嘗前は薩摩絣を着嘗からは白地の縮を、浴上りには手拭浴衣、私は一ツ物をいつまで着てゐると心持悪いので度々洗ひますので薩摩絣も名ばかり浴衣などは模樣も消え失せてしまひますのよ、ですから洗濯屋へでも行つたらいゝなど云はれますのよ。

○　鹿兒島　菊園子

私は色合等、なるべくはでやかな方がすきですこ袖は長いのがほんとうにうれしいけれども、こんなに丈ばかり高くなつては仕方がありません、それで此頃は袖をみじかくなして身の方を長くしました、それに今學期から皆筒袖になりました。袴をつける時はいゝけれど、帶をしめる時は、いかにもみぐるしいわ、だから、いゝ着物は筒袖にはしません。

○　東京　すみれ

私着物のことなど少さい時分には念頭にもなかなかつた、けれど年がくれば自然氣にかゝる樣になる子供ならば藤色のすそ模樣に菊形の赤地の帶、玉子色のしごき髮はちごわにしてあまりかんざしなどさゝぬがよし。

○　房陽　柴田絹枝

妾のお國は山里なものですから皆樣は十六世紀的の衣服ですが妾は少し廿世紀的の流行なのが好きです當の衣服はオリブ地のモーカの中がた然も元祿柄です理想の衣服は不定兎も角其時の流行柄のうすもの、世は妾の樣な者をハイカラと云ふかは知られども所謂バンカラだつて一種のハイカラですもの。

○　德島　齋藤菊子

折角の御尋ですから御答します、妾は別に衣類に好みと云つては、ありません、妾は母が織て與れます、木綿の縞を常に着て居ります、帶とても別に好いのわ持ちません、未だ學校時代ですから。

○　米澤　ろく子

私の生地は田舍でございましてはでやかな模樣や色合など召しますと人はあれこれ申しまして自然文明的な着物なんか得られませんが田舍にても私の一番好きなものを申し上げませう先づ色合は薄い古代紫。模樣は茶地に銷柳の縞入れ白茶にて蘭の散し模樣。縞は栗皮茶に細き金糸などの矢筈縞。袷地はカーキ色にこぼれ梅、帶地はうぐひす茶地に七草模樣。

○　越後　きい子

私はあまり華美な物は好みませんよ、夏冬とも絣がすりは大好き、されど暑中には、光線の反射する爲め、白地がすりの木綿縮に、風通りのよきため、國産の小千谷縮なども用ひます。此より追々冷しくなりて、花や、お茶の、おならひに行くには伊勢崎の羽織に袷、こまかき、かすりの對のもの。

○　あやめ

田舍ですからいゝ物は着ません、不斷は手織の木綿物ばかり、色合も別に好みはありませんが、田舍だけに地味な色がすきです、縞は餘り細かいのは好みません、夫でも夏は白地のさつばりしたのを着ます、袷は皆白、帶はメレンスのを締めます、貧家ですから皆さんに恥かしくて申あげられない位です。

○　横濱　千子

衣服についてはi別によい考へもありませんが文明に進むに從つて女子でも洋服が流行致して參りますこれ甚だ輕便て活潑でよいと思ひますがやはり婚禮とか何とかの儀式日には三枚重ねの■模樣に丸帶白半衿を着ていつまでも優美な日本風俗を永綴させたいと思ひます。

○　札幌　若葉子

私も着物を着て居る一人ですから憚からず申上ませう幼ない時からすきなものですから私のは大抵矢絣です色合は凡て上品なのを好みますほんとうによい矢絣になると高尚優美ですのれ然し近頃我々女學生間にこれが流行して一種ハイカラな物の如く云ふのはつまり濫用した結果でせう私の好みを一寸御披露まで。

○　千住　宮崎ゆき

私の一番好きなのは、絣、整然としていていゝのですもの、そして單衣ならば、白か水色の矢絣！袷物では、小豆色の濃いのに細糸であつさりと絣になつていろのなど大好き。それでも、此の頃の湯上りの時など、水色が白であつさりと葉模樣のあるのを着替るのもいゝものです。

○　岡山　永原多計子

妾の好きな衣服は色々ありますけれど、其内で宜いのは先き頃、軍隊通過のあつた時、婦人會から歡迎に停車場へ行けと言はれて新調した貧耶子紋付の着物に紫紺の袴、是れが日露戰役の紀念衣服として妾の一番好きなのよ。

○　横濱　薇草

私は未だ學生だし其に衣服などに就ては元來が無頓着な方ですから、能く解りませんが、自分は日常着にも夏冬はかすりが好です、殊に冬など羽織と着物とお對なのをキチンと着て居りま

すのは嫌味がなくて一番好てす、他出着も普通なのであれば柄など少し位悪くともかまひません、然し近來流行の改良服は全々嫌ひやはり我々は日本古來の袖の方が優美でよい樣に思はれます。

○　秋田　黒丸松野女史

餘り熱し暑いので長々しい白メレンスの下着一枚だけで窓より彼方の松林を望めば、そよ〳〵と押寄せ來る青波、カーテンをなぶる時に段々夕暮となると好きな少し華美だが格子縞の單で姉と共に裏庭のベンチの上にすはる。

○　秋田　黒丸T、K、子

休暇で家に居た文子樣は遊びに來たので早くも心に浮んだのは本誌の新課題、忽ち眼中に映じたのは文子樣の衣服、頗る華美な納戸眞岡の浴衣に白メレンスの下着、腰にゆだれし紫紺の袴、能く似合つたこと……。

○　神戸K　T

私の冬の常着は銘仙か黄八丈の樣な物を用ひます綿布は着ません、絣の銘仙に下着はサラサ形の唐縮緬襦袢もモスで半襟は淡紅桜の羽二重で濃紫の地に白て矢ハズの御紹の少々はでな被布を着て居ます全體私は意氣な風は厭で縞も立縞か絣物を望みます又一寸他所行は上下大島か小豆色の御召に下着も同じ色の物で帶は緋純子の丸帶をしめます、すべて、下品やはでな色は禁物です。

○　東京　さだ子

私れ肥つて居ますから格子縞は餘り好みませんの、然し母なんかはよく似合ふと申して居りますのよ。夏冬共に矢がすりが澤山な方ですよ、やはり好きな故でせうれ、只今は、白地に紫の矢筈がすりを着て居りますの。

○　肥後　那須天子

私の着て居ります衣服は絣が二枚と縞柄が五枚にて私は縞柄のものを好みますけれども夏の絣のかたびらは大好きであります。

○　薩摩　白梁女

私は木綿でも汚のつかないさつぱりとしたごく手輕いかすりが大好き、そして其かすりが色物でなくあつさりしたの。縞のべたべたしたやうな縞物は大きらい。

○　リボン女史

夏物ならば麻の葉に鹿の子蔦の模樣の絹縮、オリーブ絣のお召、紺絣は薩摩久留米など、冬物は紫矢絣のお召、小豆色のひし小紋(羽二重)ぶどう鼠に元祿の裾模樣(縮緬)など、あつてほしい。

○　石見　ちどり子

妾は、赤い、色が好きですから、衣服も赤い處の多いのが、好きよ、着物は、短いのが好きよ、ことに袖は長いのは嫌よ然しはかま丈は黒が好きよ。

○　失名

私は決して絹物の好い着物はほしいとは思ひませんが、木綿で數多くほしいのです、縞も縦縞を好みます色合はあまり目にたつのは好みません、理想の着物はいつも色の變らないおとなしい縞がすきです。

○　千葉　八木美恵子

妾の一番好きな衣服は伊勢崎紬です、そしてこの手の衣服も二三着ありますから別段外に欲しいものはありますん、「錦の中へ糞を包む」だてはいけませんから。

○　堺　白桃子

私、皮色地の矢絣御召の袷が、一番好きです、そうして帶は、チリブ色秋草模樣の厚板、此着物に此帶は一番私に能似合ますの、併しふだんに絹物を着る身ぶんではありませんから常は綿大島紬の十絣の着物に海老茶色繻子のたびをメて居ります。

○　信濃　山崎みきを

妾ハイカラの御嬢樣のように元祿模樣だの桃山式だのと言ふ樣な流行ものは嫌いなの、何故つて美はしいけども不經濟よ、妾は蠶を飼ふて製絲して母樣の織つて下さつた着物が一番好いの、強くつて暖くつてほんとに經濟よ。

○　本所　すみれ子

姉樣のよい着物が出來た時お父樣がお前にもと申された時、妾いえ〳〵妾は一番何より彼より木綿のどんつくがすきよ。

○　近江　宇野民子

妾は學校へ行く前に鏡に向い、衣服が正しく着て居るか否やをたしかめるのであります、すなはち、正則に着て居ると否とは其人の心まで見別ける事が出來ます、それにしても十才になる無邪氣な弟が洋服着て、さつさと學校へ通ふ後姿、未來の軍人にと思ひますと、一層勇ましく見うけられます。

○　周防　田舍女

ありの儘申上升から都の姉樣方お笑ひ下さい升な元より田舍の貧き家庭世の流行を追ふなど思ひもよりません現在の浴衣は白に薄藤の瀧縞久

留米絣附屬品は白、水色、トキ色、冬着は葡萄鼠、御納戸、オリーブ等そして私ソマトーゼの故か縱縞、流形、竪枠を好み總て色、模樣、縞柄、高尙にして餘り華美ならざる經濟的の物こそ私の理想の衣服。

○　　横濱　星戸　蓋子

わたしは白い〳〵衣服が一番すき、あまり赤などのついたのはすかないのよ、友禪などを母がすゝめますいつでもことはります、衣服のしまはなんてしようれえ！まア少しは元祿が入つてもよいのれ、理想の服は帶をしめるがいやてすから前がひろがらないて、暖たかい服がまアそうれえ。

○　　羽後　前田　久子

妾が美しい好い衣服は持ちたい着たいは山々てすけれど貧家に生れし故買ふ事も出來ませんのてすから今はたゞ粗末の手織の木綿衣服二三あるのみにてよその令孃方の四季折々の流行の晉物を澗山しく思ひ居るのみ。

○　　伊勢　芙蓉

私横縞だの派出な柄の衣服を着ると大變肥つて見えますてすから大抵薄色で立つた縞、絣てもはつきりして居るのが好きてす。そして私は妙なの、自分が見て買つたのてなければちつとも似合ひません。

○　　金澤　ヒンク女

私は立縞のはつきりしたのが好きてす色合や模樣は人目にたつのがきらひてすたとへば元祿の如き。當地ては女子の洋服は流行しません稀に他から來た將校のお孃さんが着らるゝ樣に見受けますがそれも一二歲乃至十歲位迄てす、私の學校ては二學期から袖丈一尺六寸の筒袖を着ればなりません。

○　　靜岡　福井　貞水

決してお笑ひ草てはありませぬ、妾等は田舍ものてすから絹布の小袖などは御嫁入の時僅に一重、それも下等を求めます。緣日とか祭禮の中途着は夏はカスリを好み、冬だとて年始の回禮にも糸織か米澤など、羽織はナヽコ縮緬などが關の山てあります、襦袢の衿や袖口には赤色は嫌ひ、紫、青、水色など好む。

○　　大阪　三原　やく子

それは女て御座いますから、美しいうつりの良い物を着たいのは、誰れも同じて御座いますが、別段人樣を驚かそうとの野心もありません、年よりはじみな人目に立たぬもので夏はかすりの中柄冬は白黑の大名縞のはつきりとした衣服を好きてすわ、他方へ行くのにも大方は縞物紋付なんかは、數へる程も着ませんのてす。

○　　長崎　生野　輝代

色合からいへば、紫、青、綠、白、オリーブ等を好みます。縞柄は、はつきりとした立縞。模樣は、花形て餘り赤の入らぬものを。又矢がすりは私の大好物てす。袴は、海老茶、紫共にすいて居ます。私は横縞よりも立縞がすきてすから現在着て居るものも、立縞、晴着のものも皆立縞ばかりてす。

○　　紳戸　淸水　露子

あゝなんと云ふ淺ましい事てしよう妾は皆樣の樣に美しいハイカラな着物を夏なれば涼しそうに冬なれば溫く着流す事は出來ませんのてす今日は妾の肌に着てますが明日は人手に渡す樣な境遇に居ますのてすいや此の色が好いとか彼の色が粹だとか云つて居らつしやる言の下に妾の樣な者も居るんてすから皆樣少しは思ひやつて下さいれー。

○　　横濱　波　南　子

妾の樣な貧困者はあまり上等の衣服は着苦しくて嫌ひてす、妾の一番好きなのは母の遺品の二子縞の細かいのてす、此れを着ますと兄弟がお母樣の樣だと言てくれます、妾は上等てなく美麗に洗つてあるのてあれば何れても好きてす。

○　　丹波　十八才女

私は夏の薄物は白地に紫色又は紺の立縞か絣て年よりは少し派手なのが、袷綿入は紺か小豆色の地に立縞絣又は矢筈絣、そして下着はモスリンの更紗それに上下共葡萄色モスリンの裾廻し、羽織は小紋か絣が好き。

○　　埼玉　高山　ふく子

妾の好きな衣服は、絣縞や、こうし縞て、此の頃の、平常着は、はてな紺絣に、元祿こうしの、ヒメリンスの丸帶てす。

○　　金山麓　楓　子

私は淺葱地に白い縱飛白が大好きてす、決して美しいのを好みません。私は常に絹の織り込んてある着物を着た事はありません。

○　　秋田　松田　せい子

一槪に衣服のことなどは申されませんが兎角肌の色や顏の容丈の長短によつて各好む柄は違ふと思ひます妾はオデコに拔目鼻は向上主義口は鰐口然し髮は青柳月の眉肌は雪てすよ嗜好はやはり人並て流行品は纏ひたいのよ行李の中には久留米絣の衣服と友禪メレンスの帶白綸子ルの

下着襟は七八本昔を偲ぶ筋の這つた紫紺の古袴

○　千葉　畷子

妾の地方は田舍ですから妾を始め皆樣の衣服は皆所謂田舍縞です。妾の理想と申してもまだ年をとらんので解りませんが唯さつぱりした着物に海老茶袴が一腰あれば澤山です。

○　播磨　平谷哀月

理想の衣服は春夏秋冬通して色はお納戸に茶に夏は惣して白味のかすりもの縞はもしやくしやしてならぬはき〳〵としたもの。

○　東京　好子

鵜羽鼠に櫻の江戸褄模樣白下着、綴錦の赤地に桐を織り出せる帶を矢の字に結びたる、色、梁梅の細縦じまに十字がすりの御召縮緬に茶のすその袷に、利久鼠に葛かづらの染め模樣博多の帶を一寸見せ、素鼠無紋絹縮の羽織を引つかけたる、藤色の黑みたる、瀧じま壁すきやに、半えりも見せて白絽地に百合を染め出せる帶しめたるもとり〳〵ににくからず。

○　埼玉　山口邦子

私は絹織でなくてサツパリとした木綿織の縞物や絣物が好きてして、ことに矢絣、雨絣、井桁がすり瀧縞などは大好てす。色は冬物なら濃いの夏着なら淡いのがよろしいかと思ひます、そして妾の現在着てますものは龜甲形の綿布であります。

○　岡山　梅月

妾はまだ、學生てすから何も別に好みとてもありませんが、兎角流行のものが大々的の嫌ひ、所謂時代後れ、古風が好きてす、だから、ソレ元祿よ、もゝやまよ、オレンヂだの、オリーブだのと、さわいて居られる方を見ると、嫌になります。

○　大阪　坂上ちか子

私の理想の衣服は明石地藤紫色立横縞矢がすりの衣服に白地百合模樣絹ちゞみの長襦袢淡あづき色の衿おりーぶ色派にちどり模樣の友禪帶淡桃色絹ちゞみの下帶に帶上げ絽ざしの帶じめ。

○　越後　よれ子

私はあまり華美な物は嫌ひ、殊更、お母さんは質素〳〵と、習慣の樣に、おつしやるから、私は夏冬とも、手織木綿の、常着てすよ、しかし極暑の時には、小千谷縮なども、用ひます。

○　神戸　すみれ草

身は綾錦でかざり立て指には金や寶石の指環をはめて意張る人がありますが私は少しも彼樣な事が望みません、それよりもむしろかざるのなれば上着よりも下着に上等の品を用いて着るよりも襦袢を一層立派にするのが最も私の理想にかなつた衣服です。

○　神戸　大島なでしこ

私の好きな着物は、ぶどー色て矢がすりの模樣、そして、しつはおメシが好きてす、夏物ては明石が好き、帶は、シユチン、夏は、絽、ひふは羽二重かチリメンてうすい色がすき、袴は、カシミヤがすき、色は茶、衿は白がすき、今現在もつて居る、着物ては、明石、おめし、メーセン、羽二重等が多くあります色はハイカラ色とやら又昔むらさき等が多い。

○　記者

女子と衣服に就いては問題が澤山あつて言ひきれませんが餘り流行にかぶれないて自分の顏だちや姿に相應した色合、縞、模樣、形を撰ぶ事が必要てせう。女子は脂肪に富むから勢ひ伊達の薄着をしてもいゝさうてすが餘り薄着をして秋立つや、風邪引いてはいけさせん。

新課題

お小遣（十月五日しめきり）

お小遣の金高、支出と收入、費用の細目、使ひ方の心得、貯へ方、父母の敎訓、何でも彼でもお小遣に關する一切の事、御遠慮なく寄稿を乞ふ。

○各地の俗謠（十一月五日〆切）

▲唱歌が行はれるやうになつてから所謂俗謠は少くなつたけれど猶殘つてゐる地方もあらうし又世間に知られない俗謠もあらう▲現在に行はれて居なくとも傳つて居る俗謠で未だ書物に載せられないもの▲其種類の概略を云ふと、はやり歌、子守歌、手毬歌、盆踊歌、臼挽歌、工女歌、稻刈歌、田植歌、馬士歌、船頭歌、樵夫歌、遊戲歌(子供が遊ぶ時に歌ふもの)、木遣節、數へ歌、神事歌など幾種もある▲日本歌謠類聚、新選歌曲集其他類書に一度出たものは採用しない▲行數は必ず七行と限らぬ、二三行延びても宜し▲單に歌だけを書くとも又說明を添へるとも御隨意▲お爺さんやお婆さんに其流行つた俗謠を聞いて投書されても面白い只それが人の知つてゐるのてはいけない▲由來俗謠蒐集の事は甚だ困難な事と

しられて居る幸ひに愛讀者諸孃の同意を得て我文壇に此事業を成さしめよ。

○諸孃と記者

○愛讀致して居りますが未だ一度も投書した事はありませんので是非一度投書したいと思つて居ますが其れに就て投書するには半紙に書いて狀袋へ入れて出せば宜しいので御座いますか一寸御尋ね申ます（芝區曉子）（記者曰、それで宜しい） ○記者樣私今年三年を經て女學校にはいつたばかりで愛讀者諸姉樣の御仲間入りは出來ませんが以後勉強して色々なものを出したいと思ふてをります其時は何分よろしく御たのみ申ます（下野國龜山夏菊子）（記者曰、追々お仲間になるでせう） ○あのー和歌や俳句は葉書で投書してもよろしいのですか又二句書いてはいけないのですか（水戸市上市馬喰町片町二〇大久保かう子）（記者曰、和歌俳句は半紙、ともにてもよろし、一首限り） ○記者樣私は去年の秋戀しいなつかしい母に逝れましてそれより後は何樂しみもなく思ひ出しては人知れず涙に袖をしぼつて居ります、けれども先つ頃より女子文壇愛讀者となりましてから何よりのたのしみとして讀みます此後充分勉強してまづいながら投書致します、（京都市川原町ちどり女）（記者曰、お氣毒な御境遇お察し申します） ○新體詩の小說的になつたのはいけないてせうかお答へ下さい（記者曰、拜見しないと分りませんから兎に角お送り下さい） ○記者より夏虫魂に答ふ、お尋れの通りになさればよろしい○記者樣私、和文を學びたいのですが始めには何んな書を用ゐたらよろしいか、（長崎市宮崎つな子）（記者曰、只和文では漠然としてお答へが出來ません） ○日向宮崎川原町うめ子樣より暑中の御あいさつ有りがたう（記者） ○記者樣私はなか〱皆樣の御仲間入りなんか出來る者ぢや御座いませんけれど之から追々投書しようと思ひますの手蹟も誠に見苦しいので御耻しう御座ひます記者樣文壇も月を加ふるに、したがつて、面白く、なりまして、ほんとに、嬉しう存じます記者樣東京はまだ御暑う御ざいますか、當地など日中は少し、あつう御座ひますけれど、朝夕は寒ひ位さつと吹き來る風に思はず衿かき合す程でござひますよ（富山縣魚津町松木濟子）（記者曰、仰の通り秋風都門に入りて銀座街頭、巷の柳ハラ〱と石だゝみの上にこぼれるのを見ますと、行きちがう人の面にも朝寒夕寒がしみてるやうてす、秋爽き北陸の空、幸ひに孃の健康を祈る） ○これからどん〱投書いたしますからどうか御なほし下さい私の所は田舎てすが記者先生皆樣を御つれなされて御遊びに御越し下さい（記者曰、此れだけでは何地へ遊びに行つていゝのか分りません、皆さんも讀友倶樂部に住處と御名は忘れないやうに書いて下さい） ○記者樣へ、妾は女子文壇一號からの愛讀者てすが、常から投書致したくて仕樣が無いんてすけど何だか耻かしくて出來ませんてしたの、過日思ひ切つて和歌を投書致しましたら、あんなつまらない和歌が選に入りまして嬉しいやらお耻かしいやら今度また變てこなものばかり送りましたから御笑ひ下さい、それから和歌や俳句などには何首限何句限つて數に制限はありませんの一寸御伺ひ致します（大阪上福島櫻木美智子）（記者曰、物事はあたつて見ろと云ふ通り遠慮して居てはいけません、現にあなたのやうに思ひ切つてお出しになり直ぐ選に入ると云ふ事もあるのですから外の皆さんも何でもやつて見れば分りません、さてお尋れの歌も句も一人に一首又は一句限りです） ○記者樣に御尋れ申ます、新體詩は一人三句以下との事ですが、半紙壹枚へ三句並べて書いてもよいのですか又別々に認めればなりませぬか（岡山永原多計子）（記者曰、三句並べて書いてもよろしい） ○記者樣に、まことに相すみませんが、妾等女學生が愛讀して、無害な、そして高尙なる、小說類をお敎へ下さいませんか、御つひてに著者の名を敎へて頂戴な、（菊女）（記者曰、明治のものなら坪內博士の「妹と背かゞみ」若松しづ子の「小公子」島崎藤村の「破戒」國木田獨步の「獨步集」柳川春葉の「いさゝ川」夏目漱石の「漾虛集」など） ○記者樣私六月に投書しましたのに元より詩文は撰にもれたと思ひ升が讀友部の三種中一ッも出て居ませんがどーしたのでしよう（伊豫淸風女）（記者曰、も少し大きな紙、せめて半紙半枚へお書きなさい） ○記者樣山家は秋風の吹き出しましたが都はいかゞで御座いますの私は學校へ出て居ましたが病氣のため只今休すんで居ります只なづかしい文壇を友として朝夕遊そんで居りますお身大切にさないませ（福岡朝倉郡志波、足立奥野）（記者曰、御病氣とはお心細いてせう、只さへ秋はあはれを催ふすと云ひますからお氣丈夫に御養生なさいませ） ○私は田舎て育つた至つて淺學の者てすが女子文壇が好きて先頃から愛讀して居りま

すが此度始めて投書致しました故悪しき處はお教へ下さい（八王子井澤菊江）（記者曰、毎號此のやうな事を仰つる方がいくらあるか知れません、一々お答へに及びませんが、悪いところがあれば申上ます、申上ないのは皆規定通り選者の方へ廻したものと御承知下さい、作の善悪は記者の申上るべきものでなく、誌上の批評で御判定下さい）

◎諸孃の交際

○親愛なる誌友諸孃樣妾は秩父の山の中の者てすが今春漸く都の女學校を卒へて今ては家に居ります、玉章や繪葉書交換大好きてすからお送り下さい（埼玉縣秩父郡吾野村坂石町分卅番地高山ふく子）○數ならぬ私に多數の方が交際をお求め下さいまして實に有がたう存じます、一々御返事致されば成らぬので御座いますが何分修養中の身て行届き兼れますから失禮乍ら此欄て御禮申上ます誠に御厚意に背き何とも恐入りますけれどどうか悪しからず思召して（下谷上根岸太田秋津子）○誌友樣たち私は今年やうやう女學校を卒業したばかりの淺學ものて御座りまするがよろしく御交際下さいまし、（大津市神出三井寺の下高橋喜子）○本誌愛讀の姉樣方私は田舍のつまらない者てすが愛讀者の一人になりましたから御交際下さる方はどーぞ御玉章下さい（群馬縣佐波郡玉村町字角淵村山田節子）○諸孃樣妾は淋しい小都會に語る友も無く月日を送る不束者てすが以後よろしく御交際を願ひます、（群馬縣邑樂郡小泉町長谷川しげ子）○豐前京都郡延永村藤本千代子（和歌俳句の御交換を願ひます）○二十才以上の誌友諸姉樣の内末長く御交際下さる御方と繪葉書や玉章の御交換を御願ひ申ます（陸中國遠野町若生仲子）○佐川貞子樣私も同縣で離れて居りますが若松て御座います昨年から此本を愛讀して友なさ身は無上の樂みして居ります此の後は何卒御交際を御願申上ます然し淺學なる身て誠に御恥しう御座います其外諸孃方にも御願い申上ます又手紙の交換も御願致とう御座います（岩代若松市停車場前會津物產會社内小川芳子）○愛讀者の皆樣失敬ながら交際を願ひます以上（下總印旛郡富里村大和栃原はな子）○多才の諸孃方よ末永く御交際を願ひます（宇都宮市旭町一丁目九十番地大岡春子）○なつかしい姉樣方誠に不束な者てすが三月から愛讀の一人となりましたからどうか永久に御交際下さい假名の方はお斷はり（伊勢國四日市濱町田中信子）○芝區の姉樣がた私は麻布の加條延子てすが此の度芝區に移りました御近邊の御方樣はお遊びに居らつしやい（芝區白金志田町一番地加藤延子）○妾は二年前よりの愛讀者てすこのたび鹽原の湯に行きましてつれ〴〵のあまり拙なき歌にて「若くさ」となん小詩を綴りぬ同好の御方には二百人限り當はがきに自作の和歌十首御送り下されなば先着者へ直ちに進呈致します（栃木縣那須郡下江川村字熊田二十七、江面嘉久子）○女子文壇愛讀者の御姉樣無學な私に、何卒御交際文通下さいませ、拙き筆にても御返事は、きつと差上ます（廣島堺町一丁目山村芳子）○清國韓國へ移住して御出る方に御交際をねがひます釜山仁川、天津北京などにいらつしやる方が澤山お有りなさる樣てすがあちらの樣子を御知らせ下さへ私の知人もあちらの清國の方に居ります必ず御返事は申しますから御手紙を下さい（山梨縣甲府市錦町加賀美千代子）○私しは繪が大好氣てあります誌友の皆さん御文や肉筆繪をお送り下さい御返し致します（羽前南村山郡柏倉門傳村安達久子）○妾は百姓貧家の一人娘て十歳の時尋常卒業し間もなく母を失ひ都合に依り廢學し朝夕人に雇はれ居て勉強も出來ず甚だ困まつて居ります併し諸孃樣私は何程貧しくても御返事しますから御手紙を御惠み下さい又御敎育もして下さい（秋田縣南秋田郡男鹿中村中間口壹番地武田はる子）○「淋しや太田の金山育ち外に木はない松ばかり」あゝ妾は此の金山の清水を掬んて詩情を養ひつゝある無才者てすから全國の諸孃から御引立をお願ひ申ます（上野太田町入町大沼方、なみ子）○誌友の皆樣、此東北の地は昨年に反す米作は近年稀なる豐作なりと農民の喜び何に例へん者無し、依つて東北地方の適順なる天候と、米作の豐かなるを報知致升（秋田縣の中央にあつて登美子）○私は高等小學校を卒業し更に女學校へ入りたいとおもいますが許されません皆さま永久的に繪ハガキ手紙などの交際をねがひます（京都府相樂郡祝園村字祝園第三十番戸庄司芳雄方庄司定子）○御誌御愛讀の諸孃樣私も愛讀者の一人て御座いますが、何も存じません者てすが、誌友の皆々樣と御交際致したく御座います、どうぞ御願ひ申ます（本郷區大學病院近藤外科二の關渡邊かほる）○誌友の諸姉樣よしたしく御交際下さいまして有がとう御座います以後もよろしく御交際下さらん事を（仙臺市小田原車通四十一番地菱沼しげ子）

○誠に不束者ですが愛讀者の一人に加はり度存じますから以後は宜敷御交際を願ひ申ます（靜岡縣沼津城内添地三二入渡邊とよお）○私は一巻からの愛讀者で雪の名所高田に住て居るのです今脚氣の爲めに一ヶ月も休學してゐます何卒皆様よ書物編物葉（ニツ以上）など送て下さる方二十名に限り一風珍らしい花瓶敷からんぷ臺敷を日數が經ても必ずゝゝ御返禮致しますから願ひます（越後高田五ノ辻神社内中島康子）○皆さん妾は日本海のほとりに住む賤女でありますが可愛と思召したらなにとぞ御仲間入りを容してくださいそうして繪葉書の交換も（長岡市中學校前河津商店方にて河内米子）○妾も妹に死に別れてから常より强からぬ身の遂に病に犯され日本赤十字社の三重支部其他一、二ヶ所の病院へ入院してゐましたが此頃は少しよくなつたので故郷へ歸りました妾の不在中には種々となつかしい御玉章を下だすつて有りがたうござります御返事のもれた御方も有るであろーから失禮ですけれど誌上で御禮申上ます今は病後にて何ともなす事なくゐますからきれいな繪葉書や玉章御よせ下さいまし御返禮は必ず御忘れ申しません、（三重縣志摩郡立神村六五、小林敏江）○私は本月最愛の父を失ひまして日夜悲嘆に暮れて居ます幸にして世の諸姉様に乞ふて慰安の詩歌を得たいと存じます（癸の國腦三〇六山田はぎ子）○妹と思召して幾久しく御交際を願ひます（島根縣簸川郡高松村須谷千賀子）○妾の昔は御江戸で育てられました者でありますが只今は丹後の片端新舞鶴に住む不束者であります諸姉様御見捨てなく御文や繪葉書の御交換を御願申ます（丹後國新舞鶴餘部町上入丁目町原幸十様方増田ともゑ）○鶴田房子様及び、一部の諸姉様よ、私は私の胸に黒雲が掛りて、ツイ、無禮なる行爲を致しましたのを深く御わび申上升（東京芝區濵江）○記者先生誌友の姉様方と御交際がして戴きたいと思つて居るのです然しまだ何の勝手も存じませんが誌上へ御のせ被下さいまし（滋賀縣大津市白玉町多田病院内河村菊子）○諸姉様等はことに圖書の交換や繪葉書の交換が御好みなさる様ですが妾は成るべく御手紙の交換にして下さりたいわそして妾は日本一の下總御料牧場と一里もはなれないところに居りますから牧場の様子や附近田舎の様子など少しは知つて居りますから御のぞみの御方は御送下さいませ又繪葉書の交換も（千葉縣印旛郡遠山村駒井野清宮きわ子）○願はくば血の通ふ限りとことはに御玉文を惠み下さい直ぐ様御返事申します（奈良縣下市町阪口様内多村さかゑ）○皆様私は小學校卒業の後學に志して只今はある學校に奉職して居りますので元の學友は大方農に從事しましたですから私がはなしゝてもはにかんでろくゝゝ相手にもなりませんそれで本年から本誌愛讀者の一人となりましたから今後よろしく御交際をねがひます（千葉縣山武郡松尾町津知屋發子）○妾本當の事に思ふて中越しの通り送本するともし後は只の一本も御手紙下さらない方があるだから妾小學校の同じ歳頃の方々罪のない無邪氣なお話が一番だわ寫眞交換の時も隨分ずるい方があつて腹が立つけれど名前を言はない事よ（北海の〇〇子）○諸姉様私が此度愛讀の一人に加りましたから以後よろしく（陸奥南郡藤崎村清水清造方清月短夜子）○誌友の姉さん達ちよ末ながく御交際を願ひます（本所區向島中ノ郷町百十二辻あい子）○文壇愛讀者の方は誰方でもよろしう御座いますから水彩畫を送つて頂戴な相當の御禮はいたします（府下豐多摩郡澁谷村淺野はつ子）○皆さん永らくの間御交際を御願申します（福岡市東通り荒戸町山本松子）○うるはしき繪葉書や御玉章澤山御送り被下ましてありがとう就て此度下記の處へ轉宅しました相不變宜敷御願申ます（大阪市南區上本町二丁目五六増田方岡田とみ子）○妾は京都の者で先つ頃少しく事情ありて下名の淋しき片田舎へ移りました皆様何卒お寫眞、繪葉書、お手紙の御交換を願ひます（美濃國揖斐郡谷汲村字德積一、岩村澄子）○播磨龍野局區内長谷美智子様妾今年十四才になりました無學無才のものでありますが永久御交際して下さいませんか又住所姓名を極くこまかに御教へ下さい（三重縣伊勢國河藝郡椋本村堀國子）○御心ばえ優しき諸姉様がた私如き不束者も御いとひ召さずば何卒御交際を御願ひ致します（東京四谷大番町入十三番地堀方幸方）○どうか御交際下さい又御玉章御寫眞雜誌の御交際をお願ひ申します（三重縣一志郡小野江村伊藤秀三方ひで子）○私は山深き信州の長野におります愛讀者の一人でございますが何卒皆様末永く御交際願ひます（長野縣長野市櫨堂町小林その子）○記者様皆様に末長く御交際下さるやう交際欄で御紹介下さい私はれ只今女學校の生徒で御座いますが未だ誠の友を得た事が御座いませんの淋しい境遇の者は自然と人に對する情が冷なる故でしようか

（横濱市宮川町一ノ九島本方ＭＫ生）○諸姉様には日頃美しう御過ていられますか、よろしく御交際を願ひます（丹波篠山西新町石原糸子）○私はひとり者よどうぞ御見すてなく交際を願ひます、（荏原郡平塚村中延千三十四番地坂本秋）○以後よろしく御交際を願ひ升何でも御交換致します（市內本郷區森川町五十四小西しづ）○諸姉様よ私は片田舍に住む淺學の愛讀者ですがよろしく御交通を願ます（群馬縣佐波郡連取村森村はま子）○繪葉書なり玉章なり御送り下さいな必ず御返事申ます（丹後舞鶴與保呂村由里本政子）○滿天下の諸姉様よ私は愛讀者の一人となりました以後末長く御交通をねがう（東京下谷區金杉上町神崎雪子）○誌友の姉君達へ以後御交際下さる樣御紹介を願ます（麻布區饅町八番藤本香子）○博學多才の姉君たちよ以後はよろしく御交際を御願ひ中上げます（鹿兒島縣始良郡蒲生村上久徳山元しも子）○妾は小石川の日本女子大學校にて生徒さんが園藝（殊に蔬菜栽培）を爲されて居られるを見て感心致しました其れて妾は皆様に西洋原名（アーリースカツレトシヨルトホーン）と申す極作り易い人參の種子を差上度く存じますから皆様御望みならば二錢切手を添えて御申越なされまし（東京府下蒲田局區內新宿四一六石川久子）○親愛なる諸孃様よ私近日肖像畫を描いて居りますがつたなきながら御自分の御寫眞御送り下された御方へ先着より長さ一尺二寸巾一尺半身に描いて御おくり申ます猶御交際も（肥前伊萬里川東六七番地松永白百合）○若し諸孃の中で十四五才の方て高等女學校の一二年生又は高等小學校の四年生あたりの方で永久御交際して下さる方はございませんか御伺ひ申します（鹿島市西千石町二五二上村方勝月のぶ子）○長く御交際を願ひます（神戸市北長狹通七丁目九番地高木せつ）○誌友の皆様私は誠に不束な者ですが愛讀者の一人として末永く御交際を願ひます（鹿兒島縣肝屬郡東串良村富來みふれ）○誌友の諸孃様よ妾は草深き西も東も山ばかりの片田舍に淋しく朝夕を送り居る誠に淺學者ですが末永く御交際を願ひます、夫れから御玉章或は御寫眞の御交換をして頂戴（三重縣伊賀國上野徳居町増森たま子）○誌友の皆様どうぞ末ながく（失禮ですが一度ぎりは御斷り申します）繪葉書や玉章の御交換を願ひ上げます（大阪南區上本町二丁目五六印藤政子）○在台北の姉様方よ來る臺灣神社當日の景況が知りとう御ざりますから讀み古しの新聞二三日分御送り下さいませんか御禮には先月當地で開かれた本道物產共進會紀念繪葉書スタンプ附を一組差し上げます（北海道札幌南一、西三ノ二、菅谷雪嵐）○親愛なる多くの姉上の君よ自分は三宅様の水彩畫が、無限の慰藉で且つ勉めて三宅張に畫いた繪葉書數十枚有るんですけれど交換いたしませう、また殘念ながら文壇の口繪深山矢ひましたから口繪の可及的に古きを十枚か十五枚或は五枚でも御惠送下さいました人には指定した口繪の肉筆を差上ます（茨城縣北條町峯澤彩洋）○私は今年高等女學校を卒業いたしました只今は宅に居りますから何卒御交際下さいまし又御寫眞エハガキの交換をもれがひますよ（遠州濱松町川合ゆき子）○皆様友達になつて下さいませ（沖繩縣那覇若狹町二七九一大島ふさ子）○花の都に居ます諸孃達、私の兄は上野の畫を學ぶ學校に居りましたが此度轉地療養をするので私も此地へついて參りました、私は日本女學校に通うて居たので都こひしくてなりません、何卒美しき繪はがきを送りて下さい、御交際をいたしたいと存じます、途上直江津にて（佐渡、佐渡郡畑野村大字寺田計良方吉田すみ枝子）○皆様、私し多年苦心の結果得ました朝顏の珍種特別を以て御頒布いたします、御同好の御方は繪葉書又は御書面を以て申込み被下ませ、但し三十名限り（京都府相樂郡祝園村字菅井松田かすみ子）○秋は阿波の草深き片田舍に本誌を唯一の好侶伴としてをる不束者ですが、どーか交際なすつて下さい（徳島縣美馬郡拜原村鎌田トラヱ）○誌友の諸孃様方よ私はつまらぬ者でありますが以後永久御交隣を願ひます（筑前國粕屋郡久原村安河內きく）○ドーヅ手紙の御交際を願ひます（日本赤十字社石川支部寄宿舍和田倫子）○妾は四月以來不快の爲一室を借り病院へ通はねばならむ身となり誠に物淋しく誰一人話相手はなし只本誌に心を慰むる計りて然も德もありません何卒諸姉様玉章なり繪葉書なりへお寫眞を添えお送り下さい妾は返禮に先着五名まで房州名所繪葉書一組に醜い妾の寫眞十名まで繪端書一葉に妾の寫眞二十五名迄地方寫眞一葉五十名迄地方新聞一日分に繪端書一枚をそえ後はそれ／＼なものを上げますからお早くどし／＼（千葉縣安房郡北條町北丁土岐せい方柴田翔枝）○私誌友の方々は皆正直な約束を守る人と信じて居りましたが此度は實に驚きました、茨木の小泉はま子様、伊勢の岸うたの

様、讃岐堤靜江様、貴孃達は繪葉書、寫眞、雜誌の交換を望まれましたから御送り致しましたに一月過ても何の音沙汰もありません、(横濱直子)○大阪のひろ子さん、貴女は新町の今出ひろ子さんてはなくッて濟みませぬが御住所を詳しく知らして頂戴な (大阪市北區上福島北一の一五九藤井方櫻木美智子) ○記者様にお知らせ申します誌友倶樂部の内て繪葉書や何かを交換致さうと申すお人様へ妾は三十枚も御送り致しましたが、いづれのお方も御返書下さらず唯だ唯だ取りつばなしにしてしまひます、ほんとーに、ひどひ人達ちてす、其が姓名は後便にて(芝、鶴岡かつ子) ○近頃和歌や俳句を作り初めました皆様に參考の爲めおめぐみ下さる事をねがひます(京橋區木挽町二丁目關口縫子)○皆様、妾は山中のごく淋しい小學校に不束ながらも、教鞭を執つて居るものです、文學なんども至つて辨へませんが、何卒お見捨てなく、詩文の交際を願ひます以後、詩信を賜らんことを望みます(靜岡縣北豆山中、中村かをろ)○妾は周防の片田舍に住む不束者てすが 女子文壇の愛讀者の一人として 諸姉様よ 以後よろしく 御交際を 願います(山口縣周防國熊毛郡高水村淸尾西村しんじ)○皆様したしくご交際下して 誌に難有存ます丁度れ去月三十日頃より 本日九日まて七十四名てした(在西備みれ子)○愛讀諸孃様よどーぞこれからは永久に親密な交際を 願ひます何とて一つ知らぬものてすからどーぞ 何分宜しく願ひますよ(千葉縣海上郡足川村八木美惠子)○最愛なる誌上の諸姉さまよ愚妹は 今ミッションスクールの本科二年に席を置いてありますが 末永く御交際下さい(仙臺市小田原東通四十一番地秋月澄子)○滿天下の諸姉様方よ私にも何卒末長く御文通を願ひます (佐世保市木場田町六八三松村ますえ) ○私しも女子文壇の愛讀者てすがお仲間入りを願ます(京都蛸藥師寺町西入北田紫露)○諸孃様よ、妾は繪葉書、寫眞又新聞などを交換致したいと思ひます、何卒ぞ心當りの者は御交際下さい下名へ (上總國横芝町島喰大木紫女子) ○何卒御見捨なく御交際有られんことを妾もすぐ返事いたします (上總國山武郡横芝町沼のほとり大木くら子) ○東京麹町の姉様方よ御なつかしく御座います 私の叔母様は麹町土手三番町に居らるゝのよ勅使の佐伯有義は 叔父なのよ御交際を願ひます又北海道の姉様方よ 私の兄様は北海道の或學校へ出て居らるゝのよをろかなる私なれど御交りを願ひます (富山縣中新川郡上市町吉江亞平方安田崎子) ○片田舍に寂しく寂しく過している孤獨の 妾を哀れと思し召し何卒繪葉書及び御玉章永久に御交際下さりませ (佐賀市柳町副島まつ子) ○誌友の皆様宜しく交際を願ひます (京都市上京區千本出水上ル廣瀬豐子) ○私は今有田女子高等小學校に通學中てす年齡は滿て十參先進諸孃様方誠に 不束者てすが御見知り置きをねがひます (佐賀縣西松浦郡有田町赤繪區武末悦次方辻登茂子) ○東京より歸つてからはご無沙汰計りてすみません 前に交際した方は勿論他のミッスに於ても 何卒交際して下さい同時に上等繪葉書の交際を願ひます (秋田角間川町うら町松田せい子) 妾も厚き皆様方の御情けに依りまして 健やかな素の身となりまして嬉しや都にて學ぶ 事の得る身とはなりました愛讀者諸姉様末永く御交際下さい (芝區新錢座町八鶴岡かつ子) ○過日上京の節はぜひ御社へ御伺ひいたす筈て 御座いましたのについ上りそびれて失禮いたしましたなほ 留守中に御手紙被下ました諸姉様非常に 御返事が延引いたしましたが歸宅後何かと 家事多忙をきはめておりますから筆とる事も出來ません何卒あしからず何れ閑暇 になり ましたら 必と御返し いたします(兵庫柳田白百合子)○私本誌は大好物なの記者さま、 私しれ、 これから自作をボツ〳〵投書します又諸姉様も不束な私ても 末永くお交際をお願ひ申ます。(常陸太田町きざき二丁目戸田つる子) ○皆さま方へ御交わりをよろしく御願ひ致します(福岡縣豐前小倉市新魚町四〇林千賀子)○諸姉様私は草深い田舍娘て 御座いますが何分よろしく御交際の程御ねがひ申ます (兵庫縣加西郡和泉村高見琴子) ○私は一時的な交際はいやよ永遠心變らぬ諸姉様と 御交際を願ひたいのて只美しき繪葉書てなくても (美作國中鐵誕生寺驛南杉本駒子) ○玉章繪はがきの御交換を願ひ升ゑはがきなればより以上のゝて 御返し申します(羽前鶴岡天神町佐藤芳子)○壇友の君達に申しますまだ一向御挨拶も致しませんて 誠に失禮いたしました、 私はまだ十六て其の上不束な者て御座いますが以後は 何卒御導のほどを願ひます(伊豆三島町加藤爲子)○記者さんも諸孃さんも私は今投書するのが初めてすから 何分今後共お見知り置きを願致します (北海道小樽新地町五番地高橋醫院方高橋喜美子)

○圖書換讀

○もし皆様の内てシホリ又は 詩集文集など御送

り下さる方ありませんか御禮は屹度致しますよ(神戸元町三丁目增谷清子)○妾手許に(故一葉女史著)通俗書簡文、懸賞文集、等不用になつて居りますから美しきゑはがき又はしをりにて右の品御入用の御方は御申込下さいそれから繪はがきしをりの交換も御願ひ申します(大坂市西區土佐堀裏町二山内米子)○何程ふるてもよーござんすから女學世界や女鑑送つて下さいませんか御禮には雜誌を送ります(尾張東春日井郡小牧町字船津水無瀨鶴子)○皆様の御内に雨江著の暗香疎影御持の方は相當の質假で御ゆづり下さいませんかそれからハート形の菓と、私の花菓と、交換して下さらなくつて(府下王子大島方大谷みどり)○皆様の中で詩集伶人、まひる野、花守、御不用の方があるなればどうか御送り下さいませんか先着者五名に美麗なる繪端書と其他りぼん菓など品々直ちにお送り申上ます、(東京麴町區土手三番町一番地渡井千鳥女)○誌友の姉様妾は音樂が一番すきて何よりのたのしみとして居ますものですが妾と同じかんがえの方はどうか樂譜の交換を願ひます(神戸市北長狹通七丁目九番高木勢津子)○御姉様達の中て妾しの持つて居る乳姉妹上下、己が罪上中下、麗子婦人上下、男氣の中て青春春夏の卷か天打つ波、女夫波の中何れにても交換して下さる御方は申込んで下さい猶女子文壇、女學世界、文章世界、新聲、文庫、明星等の雜誌澤山ありますから御望の分は繪はがきにて申込んで下さい順々御送ります(和歌山縣海草郡川永村大字島、山口靜子)○花がたみ、白すみれ、花たば、はつ潮、いさゝ川、心のあと、うもれ木、星、心の波上下、女波男波、の内御送り下さいまし私れ亂れがみ、思ひぐさ、世界武者修行、遠征奇談、秘密の怪洞、江の島道、秋のや遺稿御送りいたしますから(新潟縣南蒲原郡大島村原みさほ)○皆様の内で伯爵夫人か、乙女の操、魔風戀風、青春、御不用の方は私の食道樂、黑潮、かこひもの、馬琴妙文集、明治の禮式、育兒と衛生、家庭と衛生、裁縫と手藝、婦女の玉章、家庭の快樂、高等女子文のかきぶり、何れにても御望の物と御交換下さいませんか(兵庫縣加古郡新ノ邊村三浦時子)○諸嬢様妾の小猫、己が罪、女道樂、吉丁字、間一髮、召集令、新小說、火の柱、寶の鏈、仇と仇、良人の自白、朝嘝、小公子、と皆様の内失戀狂、魔風戀風、乳姉妹、不如歸、伯爵夫人、病戀愛、ほとゝぎす、戀衣、多情多恨、青春、やどり木、戀と戀、淚子、御持ちの御方は交換して下さい(榛原郡川崎町靜波片瀨米松方渡邊きよ子)○皆さんの中に元祿世相志を御送りに成れば月刊食道樂(一冊十二錢)三冊と海軍紀念日消印附繪葉書か一葉全集一冊の何れかを御送りします(神戸下山手通八丁目五十四番串田方串田とよ子)○岡崎及び書物の有利なものを好みます御惠み下さいませ(神戸市楠町七丁目十四ノ三増田ゆき子)○皆様私女子文壇、女學世界、文藝倶樂部等三十冊程有りますから、菓、繪はがきなど御送り下さる方に差上ます(橫濱市西戸部町一六五大鹽節子)○花守日記、花紅葉琴曲自在、女子文壇社發行美文作法、やまと文粹、新體詩集涼風、古今和歌集遠鏡、等不用になつて居ります姉さまがたの御うちて伶人、みだれ髮、淺香花御持ちの方は何卒かへて下さいな又私心ノ花明星ハガキ文學など十二冊程持ちて居りますから繪はがきて御申込遊ばせ着順十二名の御方には差上げます(神戸市兵庫門口町杉山とし子)○早速新聞御送り被下有難存じました又妾の新聞御送り致しましたが住所番地不明にて皆戻りまして殘念です何卒御知せ願ひたし(東京府下荏原郡蒲田村四一六、石川久子)○一葉様とやら何れの御君かは存じませんがみ心ずくしの白ぎくの歌有りがたく頂きました別に御禮差し上げる處てすが御住居不明の爲め誌上て失禮致します(日向のとみ子)○ナイチンゲール又「孝女白菊」のうた御もちの方は御めぐみ下さいまし御禮に押花差上ます(相撲平塚町原田愛子)○みな様の中て「塔影」「金色夜叉の歌」「金鈬」「忘れがたみ」「一葉全集」「麗子夫人」御不用の方は私所持の花守二十五絃ハイネの詩集と交換下されずや(美作英田郡福本町國司門子)○皆様私の處に小說「想夫憐」と「女夫波」とが御座いますが皆様の中に「少華族」か「町の仙女」か「やどり木」と交換して下さる方は御座いませんか、私のはあまり古く御座いません、(尾張國知多郡龜崎町井口登代子)○誌上の諸姉様もし中村春雨氏著無花果御持ちの方は私の女學生のしほりまた女學生訓と御交換下さいませんか(東京市京橋區銀座一丁目岡崎千枝子)○皆々様の內に小說乳姉妹己が罪不如歸忘れがたみ人の兄まだ見ぬ親等御不要の御方は御送り下さい御禮として新小說其他數十冊ありますから必ず五錢以上の繪葉書をも添へて御かへし致します(膽振國有珠郡伊達村矢內キクエ子)

◎剽竊詩文の注意

例によつて他の作品を剽竊せりと指摘せらるゝ人の名前を掲げませう。

○第拾貳號の分

▲門司、胴芳子。　論文地賞「文章の妙」は中學文壇第七年廿五號（第百八拾壹號玄賞）大隅武田末吉君の作を。

▲尾張、近藤玉子。　消息文秀逸『故郷の弟に送る文』は三拾九年八月一日發行秀才文壇第拾六號百拾七頁三河岳陽生の作を。

▲福井、橋爪縦子。　の和歌秀逸『つれ〴〵』の句は大坂毎日新聞に出てし明賀磁麗。

▲東京、とき子。　新笑話人賞『電氣のお湯』は明治三拾五年三月四日發行二六新聞の附錄にほん橋幻夢生の作を三字省略せしのみ。

▲尾張、野田樂子。　新笑話秀逸『半人前の醫者』和泉、小百合嬢の『矛盾』は何れも大坂毎日新聞に掲載のもの。

○第拾壹號の分

▲石川、濱田芳子。　論文『女子の本分』は六月一日發行本誌論文佐渡中山綱子作『女子の本務』を燒直し。

▲佐渡、谷川桂月史。　新笑話天賞『教へてあげた』は三拾九年五月五日發行の兒童教育一口話の二等賞松永二三男君の作を全然、仝上地賞『インク』千葉縣高橋幸作分は誰の作を、（兒童教育の本誌第三卷一號岡田金纖坊の作）又上總關芳蘭子の『丸燒』は明治二十三年一月日本之少年第一號滑稽小話中の今井幸吉氏の作を何れも。

○第拾號の分

▲山形縣、渡部宮子。　新體詩秀逸「燕」は明治三拾壹年三月廿三日、文藝倶樂部臨時增刊千葉萬紅登の卷二一六頁武島羽衣氏の『ぬれ燕』を全然一句も不違又仝大坂、赤松峯牛子『蜀魂』は懸愛文集の「ほとゝぎす」を全然。

▲神奈川、清水はな子。　はがき文「墓參り」は讀賣新聞（昨年夏）小品文集百五十九頁郿畬中見麗子君の靈祭を。

其他宮山敏子の小說「鳩のお墓」周防麗子の笑話『矛盾』は他より剽竊の旨前號通り報告あり。

○第九號の分

▲鳥取、西村とし子。　新體詩第二賞『天の浮橋』は少年文集第四卷第九號一三八頁岡本淵月氏の作を、

其他駿河古川秋子の論文『自然美』及豐前百留むら子の敍事文『里の夕』大和豐田晴登の笑話『測量家』は他より剽竊の旨前號仝樣の報告あり。

○第八號の分

▲はるみ子。　はがき文中『返事の樣々』は本年五月發行中學世界小品文中にあり。

○國　嶠

▲第十二號の選外『農夫』山口磯村せいじ子の分は尋常小學讀本第一、仝『スケッチ』高松江川しづ子の分は滑稽新聞百拾七號式部理想中美術家を、又第五號地賞『ろくぶ』埼玉縣小林きや子の分は明治三拾八年六月一日新古文林第二號二七三頁未醒先生の畫を何れも踏襲。

◎いひわけ

▲他の作を剽竊したといふ、報告に對し辨疏されました諸氏の姓名及要旨は左の通り。

横濱、吉川英子より。生れ落ちてから盜文などした事がないのに殘念である、兄にも叱責され雜誌の投書を禁ぜられたと云つて長文の辨疏、自分の文『朝顏』と百字文の『朝顏の玩弄箱』と兩々對照してありますが記者は兩文を觀察して猶辨疏の餘地ありと辨疏者の名譽の爲めに解釋します、併し明暗兩照らす神の存在を忘れてはなりません

阿部とみ子より。剽竊せりと云ふ注意者は其雜誌の名と場所を堂々と發表して貰ひたい、徒らに賞品を貪るものでない云々。注意者は責任を明にする必要がありませう、

今回剽竊詩文等に就き注意を與へられたる諸嬢の姓名を發表して其周到なる厚意を謝す。

○群馬縣田島仙子○函館小雪○大坂柳生ふじ子○志摩すみれ女史○上毛正義生○羽後濱江女史○小倉安藤なか子○芝區鶴岡かつ子○東京青木すみれ○朝日新聞愛讀者○小石川SY生○小林櫻花○ Sayonona ○周防SS生○神戸鳴出政子○吳市府川撫子○高槻赤松春雨子○星戸薰子○かをる子○芝二少女○大坂TK子○ゆき子○芝花枝○遠州田中薰○小石川玉翠女史○淺草大澤如松○相陽一少女○靜岡一少女○埼玉縣近藤とく子

Leaving to the gazers
the thoughts to scan,
Up on the summit
illumes the autumn moon.

「見る人の　心々に
任せ置きて
高根に澄める　秋の夜の月。」

B. I remember that too.

乙. 私も覺えて居ります。

A. Would it not be perfect to go out in a row-boat on the moonlit Shinagawa Bay?

甲. 月夜の品川へ舟を出したらば，嘸美事で御座いましようね。

B. I was just on the point of expressing the same idea. Did I tell you that I had a very beautiful time on the bay last month when the moon was full?

乙. 丁度私も同じ事を申そうと思つて居りました. あの先月滿月の頃品川の沖に遊びに參りました事を御話し申上ましたか。

A. No this is the first time I have heard about it. Please tell me.

甲. 今始めて御うかゞひします，何卒御話し下さい。

B. It is impossible to give you the indescribable effect made by the sailboats gliding noiselessly on the glittering silvery water, and by the blinking lights along the shore from Shinbashi to Shinagawa.

乙. 到底も煌めく銀波を音なく過ぎる帆掛舟や，新橋から品川までズーと海岸に沿ふて，燈の瞬して居るなどは，說明しは出來ません。

A. I must go then. Suppose I ask my father to take us out this evening.

甲. 私も是非參りましよう. 父に今晩私共を伴て呉れます樣に賴んでみましよう。

B. That will be fine, but it is too sudden and too late to start now, so let us go tomorrow if your father is willing to favor us.

乙. 至極結構では御座いますが，今晩では餘り突然で，又是から出掛けるは少しおそ過ぎますから，若し御父樣が御伴れ下さるなら，明晩に致しましよう。

low smoke, which obscured sun and sky. It is hard to bring oneself to believe that it is midday, and somehow above that choking darkness the sun is shining in his strength, for it is black as midnight—nay worse, for at night the electric and gas lights enable you to move about with more os less ease, while in this unnatural darkness the lights themselves are swallowed up. This condition may last from a few hours to several days. It can readily be seen therefore how it affects all departments of life in the metropolis. Selected.

彼方に太陽赫々たるを信じ得んや．そは日中の暗黒深更の闇に等しく，否夜半に劣る數倍なればなり，夫れ夜に入りては電氣燈，瓦斯燈等多少通行者の便を助くるあるも，此稀有異常の闇には，凡ての光其力を失ひて用を辨ずる能はず，而してかゝる狀態の依然たる，數時より數日に至る。然れば此大都府に於ける諸界の各方面に及ぼす影響や推して知べきのみ。

On a Moonlight Night

A. What a beautiful night this is! I feel like a new being when I look at the moon.

B. Could there be anything more peaceful and more suggestive than the moon?

A. This is one of the times when I wish to be a poet, don't you?

B. Yes, I agree with you. And the autumn moon is so serene and queenly.

A. We used to sing a song of the moon and only one verse of it I remember:—

某月夜に

甲．何んと奇麗な晩でしよう．私は月を觀ますと全で別人の樣な心地が致します。

乙．月程平和で，色々の事を思ひ起こさせるものが有りましようか。

甲．這麼時は詩人に成り度いと思ひますが，貴女は？

乙．御同樣です．本當に秋の月は靜肅で威嚴が御座います。

甲．よく月の唱歌を歌ひましたが，今はその一句しか記臆して居りません，

Where distant fountains break
From the ground.

湧きくる清水の
畔にて。

(5) Mourn'st thou thy homeless state?
Oh soft, repining wind!
That early seek'st and late
The rest it is thy fate
Not to find.

(5)定めなき身を　歎きてか、
悲哀に沈む　オー風よ！
終日尋ぬも　安靜に
廻り得ぬこそ
汝が不運。

(6) By valleys, woods, and springs,
No wonder thou shouldst grieve
For all the glorious things
Thou touchest with thy wings
And must leave.

Bryant.

(6)谷間に森に　水際に
汝の悲しむ　是非もなし、
めでにしものに　汝が翼
休むるひまも
あらばこそ。

The London Fog.

Of all the weather phenomena I ever saw, a genuine London fog is the most unique. It is positively terrifying in its silent power. At its mandate the great railway systems have to modify their schedules and the trains crawl through the darkness. Cabs and busses move at a snail's pace through the streets, and men move about as if under a spell of some sort. The sky looks as though some vast conflagration were pouring out yel-

倫敦の濃霧

予が實見せし天候異常の中にても，倫敦濃霧の如きは無類なり。聲なき沈々の動力恐怖に餘あり．大鐵道會社も濃霧の制裁に預りては，其時間表を變更し，列車は闇黑中に爬行す．大小の馬車市街を徐行する恰も蝸牛の如く，通行者の動作さながら呪文束縛を受けしが如し。擧げば大火，黃煙天に漲りて，太陽と空，之が爲に隱せらるかと怪まる。如何で此日中にして，陰闇の

女子文壇第二巻

英　文

津田梅子閲　河井道子述

The Voice of Autumn

(1) There comes, from yonder Height,
A soft repining sound,
Where forest leaves are bright,
And fall, like flakes of light,
To the ground.

(2) It is the autumn breeze,
That, lightly floating on,
Just skims the weedy leas,
Just stirs the glowing trees,
And is gone.

(3) O'er shouting children flies
That light October wind,
And, kissing cheeks and eyes
He leaves their merry cries
Far behind.

(4) And wanders on to make
That soft uneasy sound
By distant wood and lake,

秋　聲

(1)彼方の岡越え　きたる音は
何を歎つの　調ぞや，
飛びかふ木の葉は　照る日かと
紛ふ色濃き　森越えて。

(2)こは秋風の　ゆら々々と
茂れる叢　おとづれつ
紅葉せる樹木　驚かせ
戯れつゝぞ　過ぐるなれ。

(3)聲立て遊ぶ　童子等の
袂に輕し　小春風，
罪なき顔に　キスしつゝ
去るや嬉聲を　あとにして。

(4)暇なく廻るも　美しき
沈みし調を　極むため，
遙の森や　湖や

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

女子家庭の新讀物

鈴木秋風君著　太田三郎君畫

小說美文　朝晴

〔好評〕

全一冊新式製本本綴
洋裝密畫入頗優雅
（正價四拾五錢　郵稅四錢）
特別賣價四拾錢　郵稅不要

目次

▲箒木　▲枇杷の實　▲蟬時雨　▲田舍道　▲春のひかり
▲髯そり　▲野性　▲手袋賣　▲江戸川　▲野菊
▲喧嘩停車場　▲春の悲　▲青葉日記（花ぐもり、海酸漿、向の丘、
音樂家、惻隱、寂寥）　▲遠潮

彩色插畫

薔薇　潮の音　詩集　太川端

（三版）女子懸賞文集

全上等紙
四百廿頁
廉價廿五錢
郵稅不要

目次

○短篇小說（廿七）○消息文（三十五）○抒情文（三十）○叙事文（三十二）○論文（十五）○新體詩（廿七）○和歌（三十五）○俳句（四十四）○はがき文（廿八）○圖篇廿七○附錄＝大家文集（七）計十一項：三百〇七題

河井醉茗君著　山中古洞君畫

詩と美文　玉蟲

〔好評〕

全一冊新式製本色クロース金箔、色箔入頗優雅
（正價金六拾錢、郵稅六錢）
特別賣價五拾錢　郵稅不要

目次

◎姉妹　◎舞少女　◎笛物語　◎火性　◎木の葉　◎昔の戀　◎鍬を止めて　◎哀江頭　◎朝顏の葉　◎紫苑

◎をさな草紙　◎廢城　◎幼き富士　◎詩人村　◎眠らんとして　◎夕暮日記　◎戀想文賣　◎手函の薔薇　◎わが家の正月行事　◎海の幸

◎渡りぞめ　◎戀ごもり　◎廢屋　◎天なる戀　◎大和三山　◎故郷の家　◎故國の音樂　◎さゝやき　◎くもり空　◎繪師

◎夕燒　◎天香山　◎春意　◎鶯のゆくへ　◎夜の戸　◎終點まて　◎新年の家　◎愛子の死　◎五尺手拭

◎氷山　◎暗き谷　◎草刈　◎林檎　◎塔下の少女　◎落葉を焚く歌　◎我子　◎いのり　◎玉蟲草紙

◎若葉の家　◎濱名湖物語　◎手紙の端に　◎雨夜の占　◎軍人町　◎狸囃子　◎歲の暮　◎片羽を奪へ　◎駿馬

◎吾行く道　◎幹に刻める　◎冬の日影　◎詩人の家　◎朝餐晩餐　◎若尚の子　◎吾家の花　◎高野街道　◎蠶顏

發兌元　東京京橋區大鋸町十一　女子文壇社　郵便振替貯金口座番號　は壹七貳九番

各女學校生徒作文參考最適書

女子の文學獨習手引

第壹編

美文作法

本居東宮侍講題詠　下田學習院女子部長題歌　小杉文學博士序文　小森松風編著（既刊）

中央新聞（八月十六日）の評に曰く

に於て美文の起原名稱種類を說明して抒事文抒情文抒景文に關する古今文士の文例を出し、次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文飜譯法、漢文の素養、讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳述したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

女子文學全書の第一編として出でしもの總論

全一册大判　二百卅頁　正價四拾錢

第貳編

言文一致文範

坪井理學博士序文　山田美妙先生序文　小森松風君編（新刊發賣）

論より實地明治式の新文章言文一致體の好モデルを各部門毎に掲げ傍ら起原發達種類熟練法等迄面白く說いてありますから是て充分練習試作が出來ます文範作例は皆當代名家の粹英實用雅美兼帶の言文一致體は清新の思想を發揮すべき明治女性の必要機關又家庭文房の珍としても錦簇花園の觀ある此文範をおすゝめします

全一册大判　二百三十頁　正價四拾錢　郵税不要



改正定價　壹册（大判二百廿頁以上）金四拾錢○三册前金壹圓拾五錢○六册前金貳圓貳拾錢○全部十二册前金四圓　凡て郵税不要（郵券代用壹割增）

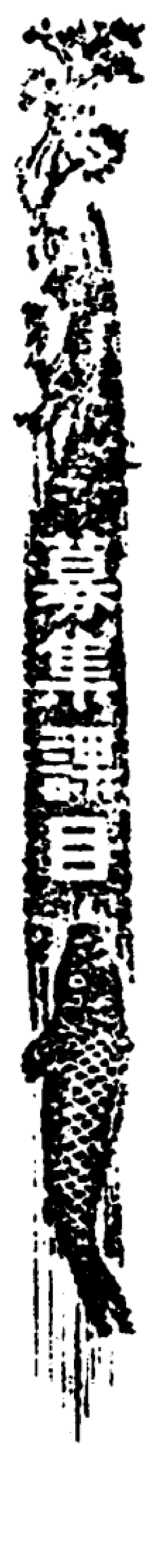
低廉無比

（全部目次）

三十九年七月より隔月に出版全部完結の豫定なり

編輯の都合により三編以下順序變更するとあり

廣告料ハ發行部數ニ比較せば最廉無比（有効確實）



選者大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井酔茗先生、佐々木信綱先生、巌谷小波先生、山中古洞先生）

○論文 ○抒情文 ○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以内） ○はがき文（半紙かな付廿四字四行）

○短篇小説（半紙總かな付廿四字六十行内） ○新躰詩（半紙十句以内）

○和歌（半紙一首） ○新歌謡（全上） ○圖畫（一寸の二寸外風俗景色）

○新派俳句（半紙一句） ▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事 但着色無用日本紙の薄きもの

○新笑話（賞與金、一等五拾錢二等參拾錢三等貳拾錢正金にて呈す）

賞與品

（三十九年十二月迄）

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小説○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞 金壹圓五拾錢 ▲地賞 金壹圓 ▲人賞 金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謡の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分 ▲地賞同二ヶ月分 ▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽證狀を添へ贈呈すべし

【投稿メ切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投書規定 必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○他人の作物を剽竊したる當選文は勿論無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○各種の原稿（同封）取纒郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

【最寄書店になくば直接發行所へ總て郵送無料なり】

定價

女子文壇（毎號水彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一册（大判百册頁）	前金拾錢
八册（半年分增刊共）	前金七拾六錢
十二册（一年分增刊除ク）	前金壹圓八錢
十六册（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢

郵税無料

定期增刊 二月十五日 五月十五日 八月十五日 十一月十五日 發行

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法是は半ヶ年分以上の前金拂込に限る「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば無代で呉れます（郵券代用は壹割增）

廣告料金 改正

	特等	一等	普通
一頁	三十圓	廿五圓	廿三圓
半頁	……	十三圓	十二圓
一行	……	……	四拾錢

メ切毎月十五日也

【備考】特等場所は表紙四の面なり○壹等場所は色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込む紙面なり▲廣告面一行は五號活字廿四字詰、半頁は（一段）卅二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年九月廿八日印刷
明治三十九年十月一日發行

定價 金拾錢

（二卷第拾三號）

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎

印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

不許轉載

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話【本局六〇七番】 女子文壇社

特約發賣元

東京市神田區表神保町三番地 東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿 東海堂
東京市日本橋區呉服町六番地 北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地 上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地 良明堂

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



女子文壇最廉無比
定價金拾錢
郵税壹錢申受けず